

536
224

隨筆
人百書百

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始





三浦藤 著

人間世間

大正
15. 10. 14
内交

536-224

筆隨人間世間

春草集

目次

大正十四年歳晚の辭……………1

偶 感 一 つ……………10

暮 の 一 日……………15

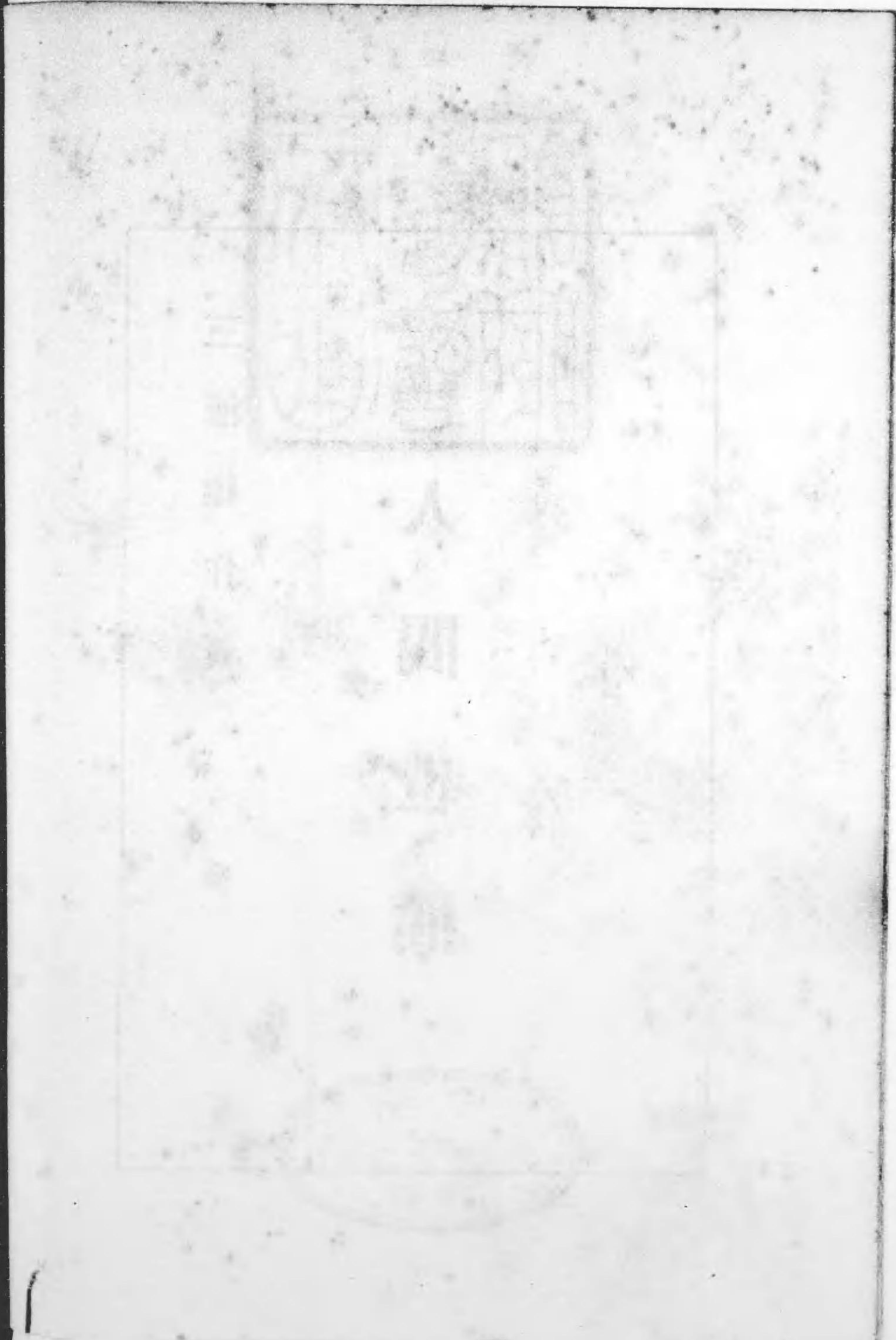
春 淺 し……………22

有 朋 自 遠 方 來……………26

天 と ぶ 白 鷗……………32

時 は 過 ぎ ゆ く……………37

丸 の 内……………42



閑居雜筆

長崎ばなし	四八
名と功	五三
孤野浴泉記	五八
舊師の追慕	六五
春霞	七一
夏	七五
近郊の水郷	八〇
或る旅行記	九〇
秋の夜に	一〇一
蟋蟀	一〇七
人間世間	一一三
永久動力	一二六

雜囊

廢都の秋	一三三
秋風の歌	一四四
一茶	一六六
狂俳	一八九
斷想錄	二〇三
夏のおもひ出	二一三
文樂の人形	二二五
江戸文化	二三六
民謡と郷土舞踊	二七七
身邊雜事	二八七
友人の著書	二九一
自分の著書	三〇五

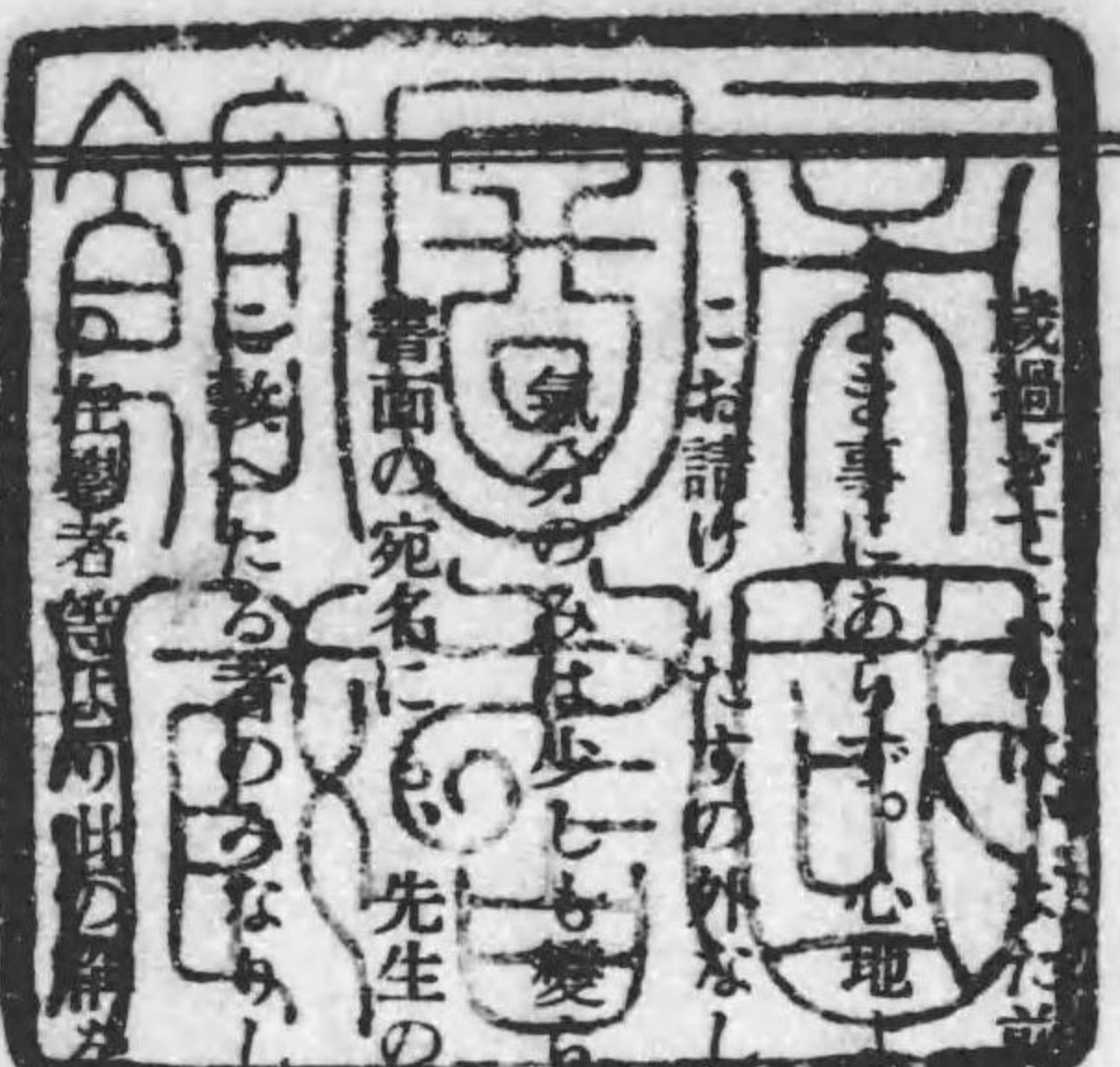
雜 信

愛媛縣の某氏へ……………	一四九
北海道のS氏へ……………	一五〇
山梨縣のM氏へ……………	一五一
アナウンサーとなる郷友へ……………	一五八
舊師におくれる……………	一六二

春 草 集

大正十四年歳晩の辭

今年も暮に近づけり。明くれば大正十五年。予も四十歳といふ年を迎へる事となれり。三十代もこゝ十數日を餘すに過ぎず。十七八歳の頃より三十歳近き頃まで、年の暮れ行く毎に、堪え難き寂寥を感じたるが、三十



歳過ぎても、心持の如く年齢に未練も起らざりし。さりとして、四十歳といふ聲を聞くは、あまり心地のまじりありず。心地のからざれど、これのみは天道公平にて、己れ一人除外例を願ふわけにも行かず、人並のお請けの外なし。自分には若きつもりにて居れど、世間はもはや若き者として扱はず、此のころは書面の宛名にも先生の文字を附したるもの目立ちて多くなれり。以前には己れを先生とよぶ者、小學校の時に對したる者のなりしが、近來は一面識なき地方の教育者や、郡縣視學や、または専門學校の卒業者、大學を返事を出して斷はることも出來ず、私かに冷汗を覺ゆること多し。されど、これも己れに對する尊稱と思はず、年齢に對する敬語と見れば大事なし。先生といはれる程の馬鹿にならざる覺悟なりしも、いつしか歲月は己れをして馬鹿の仲間入りをせしめたるものならんか。かく考ふれば、先生の尊稱は、太く己れを失望落膽せしむるものなれど、それも餘儀なし。俳人芭蕉の如き、もはや翁と云はれし年頃なるを思へば、先生と呼ばれ

て顔を赤くしたり、力を落したりするも愚かなり。男女の學生等のみな著しく若く見えるやうになりたるも、寄る年波の加減にや。中學生は更なり、角帽をかぶりたる學生までも稚氣を帯べること夥し。學生のみならず、軍人の如きも然り。時々電車内等にて、彼等の語るを聞き、彼等の動作を見て、其の子供らしきに驚くことあり。されどよくよく考ふれば、彼等別に若過ぎるにあらず、己れの老ひ過ぎたるのみ。學校にあれば、もはや専門學校長になりてもよく、軍隊にあれば、疾に旅團長位に昇進して居る年齢に己れが達せることを思へば、學生が若く見え、軍人が若く見えるも奇とするに足らず、學生と専門學校長、兵卒と旅團長、對照すれば懸隔あまりに甚だし。己れが彼等を子供らしく思へるが如く、彼等より見れば、己れは中古爺に過ぎざるべし。頃日屢、友人より、頭髮薄くなり、燭光の度加はれりと注意せらる。十燭ほどには輝かざれど、五燭位のところは確かなりと云ふ。さりとは悲觀すべき極みなり。頭髮も前青山の瀧澤、「學校衛生」の本圖諸先輩の如く、大悟徹底の境に達すれば、毛頭未練も起るまじけれど、なまなかに五燭位のところは娑婆氣を脱し難く、秦の始皇ならねど、確實有効なる毛生液もあらば、蓬萊のはてまで探索に出かけるの勞を厭はず。數年前、内外教育評論社に大島氏を訪問したる時、予云ふ。大島氏は、思想・意氣・顔色等、すべて青年の面影あれど、頭髮のみはこれに伴はず……と、大島氏云ふ。人を失望せしむる如き缺點を探し出すものにあらず……と。呵々大笑したることありき。身體髮膚これを父母に受く。自らなる毛髮の凋落を痛むも自然の情ならんか。されど、これとても亦天道公平にて、大した偏頗もなし。友の誰彼を見るに、時期と様式に多少の相違はあれ、殆ど一樣の格

率に支配せられ居るものの如し。前頭深く灣入したる者あり、後頭砂丘を生じたる者あり。何處にも同じく秋の夕暮を感じざるはなし。偶々例外の恩典に浴せる幸運者かと思れば、長く伸ばしたる髪を油にて分け、天理の自然を人爲的に糊塗せんとする不埒者に過ぎず。人爲は天理に反し難く、一列横隊に並べたる毛髮の間より、干瀉の散見する、これもあまり體裁のよきものにあらず。如何なる苦心を重ねるも、一度凋落の徴を萌せば、霜に逢へる木の葉の如く、何れかは梢を離れ散るものと觀念して可なり。米國に遊學せる一友あり。三年の後歸朝したるを見れば、頭髮殆ど脱落、前部に僅か數十本を餘すのみ、恰かもセルロイドのキユツビーの如し。予これを浦島太郎に譬へて笑ふ。友の曰く、笑ふ勿れ、君の頂上既に其の徴候を見る。二年を経ずして同じ徴を踏まんのみ……と。予は顧みて心を暗くしたり。其の後二年以上を経たるも、友の豫言、未だ適中せず、されど早晚は同じ運命に陥ること必定なり。たゞ日々己れの後頭を見る能はざるこそ幸なれ。人間を造れる神の惡戯か憫愍かこれを知らざれど、失望の度を減ずる效果多大なり。老衰の影は何人にも痛ましきものなれど、分けても平素より自ら好男子を以て任じ居る者に其の感深し。植物に譬ふれば恰かも罌粟の花の萎れたるに似たり。同じ草花の中にも、雞頭や日向葵の如き朴訥なる風情あるものは、實となりて朽ちはつるまで粗ほ同じ姿態を保てど、孱弱纖巧なる罌粟の凋落を萌したる後は、目も當てられぬみじめさを覺ゆ。昔の好男子、皺くちやの紙袋の如くなりたるを見れば、秋の團扇にあらねども、大概のところにて塵捨場に葬りたき心地す。思へば人生の春は短かし。過ぎ去れば洵に槿花一朝の夢よりも淡し。

四十歳を不惑とやら、昔の聖人は申されたれど、それは聖人のみに通用することか、または己れが人並外れし凡才にて、人並に通用する法則が、己れのみ當て嵌まらぬのか、今日此頃に至つても、不惑といふが如きものに行き當らず、昨日の是、今日の非となり、朝の快、夕の苦となること、昔も今も變りなし。此の分にては、生涯不惑に達する時もあるまじ。遠き昔は云はず、五年此のかたの心の動搖を反省すれば、うら耻しき限りなり。さればとて、心の安定を求めるため、面壁九年に尻を腐らす達磨の辛抱も出來ず、辛抱は出來るにしても、文明開化の世の中に生れ合せたるお蔭にて、生活難と云ふものを負はされたる吾等、九年はおろか十日も面壁すれば、尻の腐る前に、胃の腑の中の米粒が空になること受合なり。惑を可とし、動搖を是とするにあらねど、これが人の世の常かと思へば、如何にせんすべもなし。ありがたき聖人の言葉は、暫らく棚の上にしまひ置き、凡人は凡人相應に世路の間をてらす提灯の一張も持たねばならず、中々面倒くさきものなり。動搖、流轉、これが平々凡々たる人間の世の中の常なりとすれば、動搖の中に安住し、流轉の中に靜居することよけれ。これを凡人淨土といふべし。惑ひ動くが常なる凡夫と生れながら、不惑不動の境地に達せんとするが如き、これを譬ふれば、流れる水に逆ひて立つに似たり。逆ふ勿れ。寧ろ流れに従つて進むこと可なり。流動の世の中に、零標の如く立たんとするは枯淡にして味ひなし。流れに従つて浮標の如く漂ふは洋々として心やすけし。人の遣せる教に己れを殺すよりも、己れを生かすために人の教を利用すること、忘れてならぬ凡夫の常道なり。動搖の中に安住し、流轉の中に靜居すること、これ四十年の經驗が予に教へたる尊き悟道なり。悟道といへば、

必ずしも霞を吸ひ風に御するが如き仙人となることにもあらず、念佛三昧に浮世を外の世捨人となることにもあらず、紅塵の巷に止まり、俗務に疲れつゝ、動中に靜を觀じ、迷中に安を求めるも、これまた悟道にあらずるはなし。

轉々として定まらず、昨日のこと今日は變るほど頼みにならぬ我が心の中にも、數年此のかたや、落ちつきたるもの一つあり。世俗的名譽心の全く失せたることなり、世俗的名譽心、必ずしも非ならず。従つて予はこれなきことを誇らんとする者にあらず。たゞ正直に己れの心事を告ぐるに過ぎず。三十歳前までは滿々たる野心去らず、有望なる地位、有利なる職業、富、名譽、世俗的の功名心に驅られたることありき。かゝる雲を攫むが如き空想の自ら消え去りたるは、強ち年齢の加減とのみ云ふべからず。天賦の性格によること多し。予はもと大なる不精者なり。明治大正の物臭太郎といふ異名ふさはし。富を集積せんとすれば、巷に出で、奮闘せざるべからず。地位を獲んとすれば、權門富貴の前に叩頭せざるべからず。何れも物臭太郎には出來ぬ藝當なり。赤手空拳を振はんにも其の力出でず、叩頭稽首の曲藝に至りては、玉乗の太夫となるよりもむづかし。嘗て不心得にも文官試験を受けんと思ひしことあるも、思ひ直して中止したり。中止したるは己れを知れるもの、全くの阿呆にもあらずと知るべし。官吏の生活は、三日も勤まりさうに思はれず。教員の生活は十年も勤められたるに成功せず。成功せずといふは、今の世に迎合せざりしといふだけのことにして、格別悲觀するわけにてなけれど、物臭太郎に教員商賣の適せぬ教訓だけは體得したり。物臭太郎も明治大正と御代がかはりては、路

傍に菰を張りて住み、往來にころがり出したる團子を眺めて居るわけにも行かず、才能に相當したる職業を求めざるべからず、こゝに文筆生活といふ事をはじめたるも、これとて自力にて渡世するわけにあらず、寛大なる社會の被護を受け、漸く露命を繋ぎ止めつゝあるのみ。天祿なき人を生ぜずとは誠にこれを云ふべきか。

予は現在日々の生活の大半を讀書と思索と執筆とに費やしつゝあるも、別に求むる所なし。試験に合格して早く就職口にあつきたしと思ふにあらず。學者になりて名聲を高めんとするにもあらず、心の向くまゝに讀み、心の向くまゝに書くのみにて、何等の他意あるなし。動機の純正なる讀書家と云ふべし。今の世の學者と云へる者、一概には斷じ難きも、教授の地位を得るために、四十面さけて大學へ入學し、外國人の本の五六冊も讀み、コケおどしの論文を發表し、先輩の前に犬の如く尾をふるも辭せざる者多し。かくの如き者におどされるコケの今も昔も跡を絶たざれば、コケおどしも亦蔓る道理なり。學問は貴かるべきも、學問を專業とする學者は必ずしも貴からず。正宗は名刀なるも、名刀をふりかざす者必ずしも義人にあらざるが如し。予の讀書たる、たゞ讀書するのみ。予の思索たる、たゞ思索するのみ。讀みて學者たらんとするにもあらず、思索して思想家たらんとするにもあらず、強ひて云はゞたゞ全人としての人性を生長せしむるに過ぎず。筆を執りてものを書かんとするも、奇警なる思想を發表して、世の中を驚かし、自己の虛名を高めんとするにあらず、たゞ自分の知れることを卒直に記録して、知らざる人に教ふるのみ。知ることを知りとし、知らざることを知らずとし、知らざること多きを耻ぢず、知らざることは心を空しくして他の教へを受けんとするのみなり。記述に

誤りなきことのみは衷心より望む所なれど、人智は如何にしても絶対に完全なる能はず、況んや中等教育も受けたることなき者の知識の不完全なるは怪しむに足らず。誤謬の多きこと落葉のしけきに似たり。誤謬あればとて悲しまず、耻ぢず、誤謬を知りて改める心をもてばなり。人間のなせること、すべてかうしたものと悟れば、自重自重と云ひて沈黙して居るにも及ばず、世間的の地位に憧れる穢き心なければ、遠慮して歡心を買ふべき先輩もなし。數年前まではほゞ一生涯の計劃を立て、豫定通りに進行せんとしたれども、今日にてはかゝることの愚かなるを知れり。今日とも知らず、明日とも知らぬ身が、五年先きのこと、十年先きのことを考へてもせんすべなし。多年の歳月を要する仕事に着手するはよけれど、己れの立てたる計畫に己れの身を束縛するは、大空に飛遊することを許されたる小鳥が、好んで小さき籠の中に入らんとするに似て、愚かなる次第なり。予は明日のことを思ひ明年のことを思ひ、遠大の計劃もめぐらせど、それがために決して今日の生活を犠牲とせず、如何なる場合にも、今日の生活に意義あらしむることを忘れず。今日今時、定命を終りて瞑目するとも心残りのなきやうにしたき心願なり。一卷の著書も、數行の文字も、辭世と思ふ心、今日にては甚だ強し。外に求めず内に樂しむ者は幸なり。名の顯はれざるを歎ずる必要もなく、世間の輕侮冷笑も格別意に止まらず、他人の榮達を嫉視羨望することもいらす、悠々自適、心もやすく身もやすし。外に恐ろしきものとてもなければ、たゞ常に一つ脅かされるものあり。生活難の聲なり。生活に窮するといふこと、犬の仲間にはありとき、ざれど、人間の社會には珍らしからず。此の點のみ、犬は人間よりも恵まれたるものと云つて可なるべきか。

予生れて四十年、一日も生活難に脅かされぬ日とはなし。山間の水呑百姓の家に生れて、幼時より粗衣粗食、錢といふものは文久錢の外に見たることなく、長じて小學校を卒業し、代用教員となりて最初の月給二圓、一年勤めたる最後の月給十六圓、書物一冊も自由に買へず、藤澤利喜太郎の「初等代數學教科書」一冊を三箇月の月賦にて買ひたる思ひ出もあり。上京して雑誌の編輯に従事せる後とも同じことなり。一昨年、人の情けにて、此の郊外に茅屋を營むことを得、住居はや、落ちついたれど、衣服と食物とは依然として不足がちなり。衣食に窮すればとて、そこらあたりに多き手合の如く、惻巧に世を渡る術も心得ず、不正不義を顧みず私腹を肥すにはあまり潔癖過ぎ、權門富貴の勝手口に廻つて殘飯を頂戴するにはあまり氣位高し。不足がちの米櫃はいやでも自分の腕にて補はざるを得ず。自分の腕と云へば強さうなれど、此の瘦腕では荷揚人足も出來ず、箸よりも少し重いペンを動かすより外に方法もなし。箸は二本、筆は一本と或る人の云へるが如く、筆にて衣食すること中々容易ならず。大衆文藝の作家になり、講談そのけの物語を日に三十枚も書けば、原稿收入も侮り難きものと聞けど、倫理教育の著書を何巻出し、教育雑誌に何百枚のものを書きたりとして、其の收入は知れたものなり。剩へ心よからぬ書肆に逢へば、書物の賣れる間だけは問題も起らざれど、少しく不況と見るや、印税の割引を要求せられるのみか、丹精こめたる自己の著作に對してある甲斐もなき態度を示さる。其の苦痛實に堪え難し。經濟上の餘力あらば、書物は自費出版にしたしと常に思ふ。生活のために書くといふこと、辛きこととに感ずれども、耻づべきこととは考へず。少なくとも教壇上に於て學問の切實をする教師よりは罪輕し。教師

(9)

は同じ古ノートを再三使用するのみならず、言葉といふものが其の時限り消え行くものなるを幸とし、かなり無責任なる放言をなす。私立大學等に學べる學生より、往々其の學校の教師の講義を傳聞し、厚顔無耻の放言に驚くことあり。文筆生活は同じものを二度發表することも出來ず、一度發表したる文字は、いつまでも残りて責任を執筆者に負はしむ。生活のための賣文は、偉大なる藝術家も時々これを體驗する所、ドストエフスキー然り、曲亭馬琴然り。凡人凡夫にこれある、恥づべきことにあらず。恥づべきは己れの書くものに自愛の念と誠意の情を缺けることのみ。馬琴が生活のために三百餘種の長篇・短篇を書きたることは、決して馬琴を傷つけず。寧ろ生活難が馬琴をして古今に絶する多作を強制し、日本の文化史を豊富ならしめたることを喜ぶべきなり。予は生活のために書くことを恥とせざれど、たゞ書きたしと思ふものの書けざるを憾みとするのみ。自分の書きたしと思ふものには、多く賣れる見込なく、生活のために不向なるものあればなり。露の如く消え行く身は、明日をも定めがたけれど、一通り自分の思想をもまとめたく、二三特殊の研究も試みたく、年來の志望たる民衆藝術の研究創作にも進みたく。思ふことのみ多くして、時は空しく過ぎゆき、大正十四年は暮に近づき。三十代の殘骸を顧りみて、こゝに此の一篇を書き残す。

偶感 一 つ

人生五十年、六十年は假の世とか云ふ。五十年を定命とすれば、残すところ十年に過ぎず。假の世まで生き長らへても、二十年を餘すのみ。時刻を報ずるラヂオの合圖ならねど、二十年が十五年となり、十五年が十年となり、あと五年、あと四年、あと三年と縮まれば、早晚は諸行無常の鐘ひびくべし。稀に長壽を保つ者ありと雖も、五十歩、百歩。百歳を越ゆるは珍らし。老少不常とて、定年の來るも待たず、夜半の嵐に散りゆく例も少なしとせず、若くして逝ける者のことなど思へば、人間の命はラヂオの合圖よりも心細し。

五十年の一生、短かしといへば短かし。長しといへば長し。人間の一生は、五十年なりと云へど、寝る時、食ふ時、休む時を差引けば、正味の時間幾干なるか。恐らく其の三分の一にも過ぎざるべし。生れて五六十年間は、糞小便の世話まで親の手を煩はし、やつと乳房を離れたかと思へば、學校生活といふものがはじまり、小學校六年、中學校五年、高等學校三年、大學三四年、合せて十七八年も親の脛を嚙ることを、文明人種の常道とす。親にとりて子ほど返還期限のながき負債なし。子は三界の首枷の諺穿てりといふべし。學校教育を一通り終りたる時は、早くとも既に二十四五歳に達す。運悪く二三年の足踏みをすれば、三十歳近くして漸く世に出づる道理なり。學校を卒業したりとて、生存競争の烈しき今日、直に適當なる就職口も見付からず、あちらの會社に雇はれて外國電報を翻譯し、こちらの役所に胡麻を摺りて調査囑托を拜命して居る中に、早くも

人生は七分通り終りとなる。それが多くの者の辿る常道とあれば、是非もなき次第なれど、人生が七分通り終れるのに心づかず、十何年といふ長き間、親の脛を嚙りて學校生活をしたることを誇り、一かどの學者になりたるものと心得、さほどの學才も文才もなき身にてありながら、時々片假名交りの作文を活字にして見る者あるに至つては、あはれといふもおろかなり。縦から讀むも横から讀むも更に意味の通ぜざるヨタ文字も、學窓を離れたホヤホヤの文學士なれば、學資中毒病者の寢言と看過してよからむ。堂々たる博士の肩書を附しながら、かゝる輩の少なからざるは、怪しむべし。餘事はさて置き、學校生活のあまりに長きは、疑ひもなく、文明の世の痛弊なり。人生僅に五十年と云ひつゝ、三十歳近くまで學校生活に費やすは、不經濟の極なり。學校も道樂に考へるならば、四十の手習も遅しとせず、小野道風の轍に習ふも可、セシル・ロヅの範に従ふも可。如何なる晩學も嗤ふこと能はず。されど學問をして、何事をか爲さんと思ふ者が、四十の手習をして何になるべき。尤も我が祖國日本といふは、まことに恩惠の宏大なる國にて、學校を卒業し、二三箇國の言葉を覚え、二三十冊の書物を読み、沈香も焚かず、屁も放らずに、高く嘯き居れば、人みな仰いで一世の碩學となす。譯のわからない意味の通ぜざるものを發表すれば、以て學識深遠となす。如何に恩惠の宏大なる國に生れたればとて、學者を以て自任するからには、恩惠に忤れて世を欺くが、心地よき事にはあるまじ。山高きが故に貴からず、樹あるを以て貴しとなす。博士の學位、教授の地位、貴からず、學問上の功績あるを以て貴しとなす。徒に地位のみを目當とするならば、四十の手習も時にとつては效を奏すべし。學問上に於て何等かの研究を示

さんとするには、四十の手習少しおそし。如何なる方面にもせよ。やゝまとまりたる研究を試みんとするには、十年乃至十五年の歳月を豫定せざるべからず。日本人の身體、日本人の氣力等より見れば、五十歳を以て活動の限度と見ざるべからず。稀には七十歳以上に及んでも尙ほ壯なる者もあれど、一般の例と認めがたし。五十歳以上まで生命は保てるにしても、積極的の活動は五十歳に打ち切り、其の餘はたゞ既去の業績の清算位のことより外は出來ざる者多し。人生僅かに五十年といへること、日本人たる我等にとりては、全く無意味の諺辭にあらじ。人生を五十年とし、或る一の事業に費す年限を十五年とすれば、四十の手習は、日暮れて道遠き感あり。人間の事業、必ずしも一生涯の中に、序幕より大團圓までを示すにも及ばず、行き當りばつたりにて行ける所まで行き、出來ることだけ片付け、浮世に未練を残さず、お去らばを告げるも興味深し。さりながら、人間の才能は必ずしも晩年に至りて現はれるものにあらず、壯年の時のみに現はれ、一度び其の時期を過ぎ去れば、もはや永久に再生せざるもの渺なしとせず。十代の才子は早熟に過ぐるかなれど、二十代は徒に親の脛を噛りて、役にも立たぬ詰込學問に日を暮すべきにあらず、二十代に發揮すべき才能は、遺憾なくこれを發揮せざるべからず、人間として貴きことは、一日も長く學校の教室にて講義をきき、一冊も多くノートを製作することにあらず、大は大なりに、小は小なりに、持つて生れた天分を十二分に伸ばすことぞかし。學校の教育も大切なるべけれど、人間の生命に限りあることも知らず、大切な時期をうかうかとして居ること愚かの沙汰なり。近松門左衛門は大學の卒業生にもあらず、文學博士にもあられど、後の世に至れば、大學に入りて

近松を研究し、近松の戯曲を論文の種として文學博士となる者もあり。井原西鶴に至りては、尙ね一層學問には縁遠く、馬琴に無學を嗤はられし程なれど、今日では國文學界の碩學が、蚤取眼になりて其の一字一句を考證しつゝあり。彼の學びたる所は大學にもあらず、専門學校にもあらず、社會といふ生きた研究の材料に富める檜舞臺なり。社會といふよりも狹斜の巷といふは、尙は一層當れり。家となせるは遊里、友となせるは嫖客、早く云へば、彼は、女郎屋に入り浸り、好色本ばかり書き居たる放蕩者の不良老爺なり。文學の才、天分にありとは云へ、女郎屋にのみ入り浸れる放蕩者の書ける好色本を、小學校から中學校、中學校から高等學校と、十年以上も學校通ひしたる末に、國文學の獨參湯の如く、尊重して研究する者あるは、おかしき世の中といふべし。如何に熱心に研究し、論文に綴りて博士の學位を得たりとて、無學の放蕩者の書ける好色本の三行も書けず、學問といふもの、かうした類の事多し。今より二百年も経れば、幹彦の小説も、介山の大菩薩峠も、某々の大衆文藝も、文學博士の一ダース位を作る材料となるかも知れず。かく考ふれば、多年の間、學費を費やし、頭腦を痛め、學校通ひをするよりも、其の金を遊里に運び、好色本でも書き残した方が、氣のきいた仕事かも知れず。學校に通學する日の長きを誇るよりも、天才を思ひ切つて伸ばすことにつとめるがよし。一日も多く學校に通ひ、一冊も多く書物を読むをよしと思ふは以ての外の僻事なり。西鶴は馬琴のやうに長生きをせず、僅か五十二歳にて没したり。五十二年の生涯の仕事としては、偉大なる業績といふべし。人間はいつまで命の續く者にあらず。仕事に堪え得る勢力にも限りあり。五十年を一期と考へるがよし。法外の慾を出す

べからず。五十年以上、六十年、七十年に至りて、尙ほ仕事に堪え得る勢力あらば、天與の惠澤と悟るを可とす。クダラヌ虚榮心に憧れ、空名の高からんことのみを欲し、四十の手習、五十の手習をしても、地位を得、官等を高めることに腐心し、伸ばすべき時に自己の才能を伸ばさず、鬼の面を被りて世間を糊塗せんと欲するは、淺間しき根性にして、且つあまり惻巧なことにもあらず。

人生五十年、餘すところ十年となりて見れば、今まで氣のつかざりし事に氣のつく事も多く、書き續け居れば際限もなし。昔の人の云へる「人生朝露の如し。」の一語、此のころ味ひの深きを感じず。(大正十四年十二月記)

暮の一日

水の音さへせはしと「胸算用」にもいへり。暮は何となしに心せかる。されど、算盤に縁のなき渡世のありがたさ、澁面つくりて掛取に廻る用もなく、さりとして、債鬼門に迫るほどにもあらず、明くれば年改まるといふ大晦日に、暮の景氣を見て歩くなど、洒落れた真似する暇のあるだけ勿體なし。

淀の川瀬の川舟ならぬ都大路の電車の中には、元祿の昔と事變はり、世帯の苦勞ばなしも出ず、鍋釜まで質に入れて年越しをする程の者も、師走の風が何處を吹くかといふ顔、孔雀の羽根のやうに着かざりて、何某の令嬢かと思はれる粉装の若き女、九尺二間の長屋に住む女工とは思はれず。二十世紀の世相も亦面白し。されど、鼻汁と埃にて顔中を汚したる子を無造作に背負へる田舎者らしき女が、鮭を片手に提げながら、艶々したる高島田の下町娘と並びて腰かけたる、歳晚氣分といふべきものならんか。新宿にて買ひ求めたる「都新聞」を其處此處と拾ひ讀みしたる後、ふと窓外を眺むれば、電車は市ヶ谷見附の濠端を走れり。淺草行に乗れることにはじめて氣づきぬ。行く先きも知らず、電車に乗ること、其の暢氣さ愚に近けれど、いづこといふ目當もなき時には、行く先を考へるも無益なり。築地兩國行ならば銀ブラ、淺草行ならば観音詣、銀ブラもよし、観音詣もよし。決定は電車に任せて置くこそ面白けれ。九段坂下、神保町、駿河臺下、電車の通る道々、賣出しの廣告に考案をこらせる店の客も少なくひつそりとしたるは、不景氣の祟りにてもあらむ。滅茶々々の大安賣と

か何とか自暴自棄的の文句を掲けたるは、宣傳にしても痛ましく見ゆ。

終點にて下車、仲見世を通りて雷門をくゞり、観音堂の前に出づ。浅草に遊ぶこと月毎に數回なれど、二年此のかた観音堂に参拜したることなし。不信心の至りといふべし。自ら其の不信心を知れど、世の善男善女の如く、願がけて頼むことなければ、わざわざ賽錢を投げにも行かず、さりとして尻喰へ観音と惡體を吐く程の拗ね者にてもなし。江戸の昔から境内の裝飾となり居れる豆賣の婆や風船賣の爺の萎びた顔が、羽子板賣る店の間に圍まれたるも節季らし。階段をのほりて、堂の中に入れば、いつもながらの商賣繁昌、賑はしき三越の見切品賣場を凌駕す。商賣繁昌といふ不埒な言葉は、信者の怒を買ふならんも、蠟燭いくら、守札いくら、御詠歌の書物いくら、一から十まで金づくにて用の足る所、商賣以上の商賣なり。法燈の光りにて、末世末代、幾千人幾萬人の輩が、安穩に日を送りゆくこと、観音の利益も亦鴻大無邊なり。其の昔、宮戸川にて尊像を拾ひ上げたりといふ檜前の濱成・竹成も比類なき慈善者といふべし。善男善女ときけば、朴訥仁に近き老男老女のみかと思へばさにあらず、オールバックのハイカラ女、洋服姿にステツキなど持てる男などもあり。殊勝らしく合掌せるさま、神籤の札に小首をひねれるさま、全くのひやかし客とも見えす。日毎、夜毎、幾百件ともなき勝手氣儘の願ひ事をきく觀世音菩薩の苦勞、同情に堪えず。職業紹介所の主任よりも遙かに骨の折れる事なるべし。賽錢も捧げぬ代りに、願ひ事もせぬ不信心こそ、菩薩のために唯一の友といひて可ならむ。神や佛に苦勞をかけずして同情する程の心よき者、不信心者として神や佛も見すてまじ。祈らずとも神やまもらむと云へ

る、強ち歌人の氣休めのみにもあらず。正面にかゝれる額の畫を一枚々々に眺め行けど、畫を観る眼のなき者にはさまでの興味も起らず、たと暫し古き昔に想像を馳せ、乏しき知識の中より、浅草寺の縁起など思ひ起せるのみ。雑踏の中に閑寂を味はひ、神經の尖れる現代の空氣の中に、悠暢なる古代の生活を思ふ、楽しきもの一つなり。忽ちにしてガラランガランといふ聲す。神籤を振り出す音なり。志にてよしと貼札す。袂の中を探るに五錢の白銅貨あり。電車切符を買へる時の釣錢なり。試みにこれを投ずれば、ガラランガランといふ音して、忽ち箱の中より一枚の紙現はれ出づ。半紙四つ切の大ききなり。其の間僅に一秒、一秒の間に人間の運勢を占ふ。器用の至りなり。天下に器用なるもの多けれど、これに優れるものはあるまじ。其の紙を手に取りて讀み下せば、先づ上の方に「第一大吉」とあり。下に四行を書して註釋を附す。「七寶浮圖塔」(しつぼうはたから、ふほうにてつくりたるた)「高峰頂上安」(たがきみねによきたうをすゑてゆ)「衆人皆仰望」(ひとたこのたうを見て、まてもよりのいでたることし)「高塔」(たがきみねによきたうをすゑてゆ)「衆人皆仰望」(ひとたこのたうを見て、まてもよりのいでたることし)「莫作等閑看」(なほざりにみられまじ、大人)大吉といふからには、來年の運勢大によしといふならん。高塔の如く衆人に仰がるゝことは、凡の凡、俗の俗に、心やすく身も健かなる境地を發見せんとする者にとりて、無益なることなり。終りに大吉なる具體的の例數項を擧ぐ。第一に曰く、「ぐわんもう十分に叶ふべし。」と。これといふ願望もなければ叶ふ筈なし。第二に曰く、「待人來るべし。」と。待つ人なければ來る道理なし。「次に曰く、「うせもの出れどもおそし。」と。失せ物なければ、おそくも早くも出ることなし。次に曰く、「やづくり、てんたく、よめとり、むことり、たびだち、人を抱へる方よし。」と。家作や轉宅は二三年ありさうになし、嫁

取や婿取は二十年も先の事なり。旅立ちも人の雇入れも更に用なし。大吉なればとて、用なきものは縁なき衆生と異ならず。次に曰く、「萬事つゝしむべし。ゆだんあらばわざわいあるべし。」と。油断大敵といへること、小兒の時より聞けり。分別盛りの此の年齢にありて、觀世音の神籤を待つまでもなし。白銅一個の志もて大吉の神籤を振り出し呉れたる觀世音の親切を無にするわけでもなければ、全く自分には用なきものを如何にせん。鳩に豆を買ひて與へたる方が遙かに功德となりしならんを、惜しき事したりと思へり。

欄干に凭りて、冬ぐれの庭を見る。日は靜かに照りて枯木を揺がす風もなし。金龍山淺草寺、懐しき名なり。此の名の含める情趣は、人を陶醉せしむる力をもつ。淺草寺を中心として残れる種々の傳説、淺草寺を中心として活躍せる様々の人物、何一つとして面白からぬはなし。志道軒が事は、風來山人の筆に詳し。「こゝに、江戸淺草の地内に、志道軒といへる、えせ者あり。軍談を以て人を集め、木にて作りたる松籟の形したるをかききものを以て、節をうつて諸人の臍を宿がへさせる。猥雑滑稽、耳を擱んで尻のふほど、取つても付かぬ齒なしの口をくひしぱり、そこらだらけが皺だらけなる顔うち振り、或は、白眼にして、他の世上の人を、味噌八百のめつほう天八、九十に近き瘦せ親父にて、女形の身振聲色まで、其の趣を寫すこと誠に妙を得たりといふべし。」これ「風流志道軒傳」卷の一のはじめなり。鳩溪の才筆、比類罕なる名物親父の風采を描き出して餘す所なし。志道軒は淺草寺の空氣の中から生れ出でたる一異彩なり。淺草寺を背景として、其の天分をよく發揮したる者なり。淺草寺の外に志道軒の出づべき土地なく、淺草寺の境内に入れば、今も尙ほ志道軒の姿髣髴たり。

葛飾北齋も亦淺草寺には縁故深き人物なり。北齋の無愁と名人氣質とは、まことに慕はし。北齋の逸話と奇行とは擧げて數ふべからず。一篇の北齋傳を起草したく思ふこと屢あり。俗に徹し、貧に徹したる者こそ、羨ましき限りなれ。俗に徹したる者は俗を離る。志道軒は其の例なり。貧に徹したる者はもはや貧にあらず。北齋は其の例なり。俗も貧も徹底すれば聖に近し。俗に徹し、貧に徹する者は、幸なりと思へども、俗に徹し、貧に徹すること能はず。中途半端にて終る者多し。それが世の常道とあれば、またそこに安住の境地を求めざるべからず。

花屋敷の前より池をめぐれば、活動寫眞、芝居、浪花節等、一齊に初春興行の蓋を明く。こゝにはもはや一陽來復、全く新年の趣あり。夜雲座と觀音劇場は劍劇、春秋座と淺草劇場は喜劇、帝京座と大盛館は安來節、これにて大正十五年の淺草民衆娛樂の大勢も推測せらる。御園劇場が諸藝大會と看板を塗り換え、三幸劇場が生駒雷遊經營の活動寫眞常設館となりて、安來節はやゝ衰頹の氣味あれど、尙ほ其の勢ひ侮り難し。活動寫眞に乃木大將の映畫多きも面白し。三友館の日本海大海戦と乃木大將の文字大に目を惹く。近來、乃木大將の民衆化したること驚くべし。芝居の題材となり、映畫のストーリーとなれるのみならず、浪花節にもよまれ、安來節・博多節・米山甚句にまでうたはる。二十年後、三十年後に至れば、此の傾向は益々増大すべし。やがては乃木大將が興行師の米櫃たる時も來るべし。門松を立て、アーチを設け、新らしき看板を掲げ、各館、各座、聲張り上げて客を招けど、其の割合に人氣の沈み居るは、まだ年の明けざるためか、不景氣のせいなるか。

淺草は東京の心臓なりと誰か云へり。淺草に於ては、盲目的の信仰と極端なる官能的の快樂主義とが背中合せに並び立てり。盲目的の信仰にも入れず、官能的の快感に陶醉することも出來ざる者には、寂しき土地なれども、豊かなる情趣を含み、生きたる教訓を受けること多し。暮の一日を淺草に遊びて、觀世音の惡口など書き居るも、聖代に生れたる恩恵といふべけれ。罰の當らぬ中に筆を擱くことよろしかるべし。

(大正十四年十二月三十一日記)

春 淺 し

風凍^{こほ}りて寒けれど、正月といへば、長閑なる心地するも面白し。屠蘇の香の未だ残れる十五日、珍らしく袴を着けて外出す。御高話拜聴旁、粗餐差進度候間永田町の官舎へ御光來被成下度といふ殿めしき角封筒の案内狀を帝國教育會より附箋附にて廻送し來れるは三日程前なり。出席の有無速達にて返事せよと、切手まで貼附せるハガキを封入したれど、速達郵便の區域外に住める不便さ、見す見す六錢を損してポストの中に投じたり。損とは云へど、自分の懐の痛む譯にてもなく、文部省から出たるものなれば、政府が政府のものを費やすに等しく、速達といふ餘分な手數かけずに消印するも一得なり。久しく袴はきたる事なければ、何となく身體に調和せず。袴といふもの、窮屈袋とは誰が云ひし。はかすにすめばはきたくなし。袴はかざれば禮儀にかなはずとは、面倒なる禮儀を定めたるものなり。袴はかざれば、粗忽者が無作法に太股など出すことあるによるならんも、何とか都合よく衣服を改良する方法なきものか。袴はくことはまだしも、洋服に至りては尙ほ更に面倒なれば、既に十年近くも着たることなし。いつか郷友の集まれる時、一人戯れて云ふ。何かの機會ありて、記念會又は祝賀會のやうなるもの催すことあらば、一同贖金してフロックコート一着を君に送るべしと。結婚式の

時、たゞ一度着用したるのみのフロックコート一着を所持すと云へば、然らば、一同決議の上これを着用せしめて市中に出し、技師を雇ひて活動寫眞に映寫すべしといふ。事々しき次第なり。

新宿の終點より市電に乗らんとすれば、新聞賣子來りて無言のまゝ、「都新聞」を渡す。無言のまゝ、これを受取る。こゝへ出で來れる毎に、必ず「都新聞」を買ひ求むるにより、新聞賣子と顔馴染になり、もの云はざるもわが姿を見れば、來りて「都新聞」を渡す。もの言ふ世話なくてよろし。四谷鹽町あたりには、藪入の小僧詣詰こしつめの有様なり。前の釣革に下れる二人、懷中より蜜柑を出し、皮をむきて食ひながら、活動の話、曲馬の話に餘念なし。まだ小學校を終るか終らぬ年齢ごしころの者、如何なる店に雇はれ、如何なる主人に使はれ居るにや。籠を放れたる小鳥の如く嬉々たり。言葉の訛り、山出しをよく證據立つ。二人ともに、此の年齢ごろの少年のもてる無邪氣さなく、粗野にして不良の影のひそめるは、よからぬ家に生れたるならんか。棄て置かば正しき道を歩む者にはなるまじ。手離して東京などに出さず、今少しく兩親ふたをぢの手許に置きたきものを、これも人の子と思へばいとほし。

神保町下車、軒並に書店をのぞき歩くこと一時間半、例によつて例の如し。新刊書の多き今日、一々買ふて見るわけに行かず、また買ふて讀む程の價值ねいちはなきも、一寸見て置く必要あるもの少なしとせず、あれを二三頁、これを五六頁と抜讀みするに、最も便利なるものは店頭なり。圖書館のやうにカードを操る必要もく、貸出缺本等の憂ひもなし。輕便簡易、圖書館に優れり。書店のぞきは、圖書館通ひの代りなれば、神田へ出る毎

に、三十分乃至二時間ほどをこれに充つ。其の度毎に濫讀する書物二三十冊、必要なことは採りて知養を肥し、必要なことは全く見ず。重寶の至りといふべし。借覽料の一文も拂はざるは勿體なき心地す。書店のためには厄介なる客なれど、人間の群集せる大都市のこととて、田舎の如く、何村の何兵衛が來て、書物のロハ讀みをしたりなどといふそしりも受けず、損害賠償を起される面倒もなし。

永田町の官邸へ着きたるは、定刻の五時半少し前。記者生活十數年、何回かの招待を受けたるも、此の官邸に來れること前にたゞ一度あるのみ。不熱心の度も甚だし。これにては記者の職分も全うし難し。世に拗ねて殊更に顯官の招待を避ける程の愚かなる僻ひがみもたざれど、もつて生れし物臭性分、改まりたる會合となれば自ら溢り勝ちなり。また一つは、演説といふもの、まことに嫌ひにて、十分も聞けば頭痛を催す。癩癩てんかんに水癩癩・火癩癩・人出癩癩ありといへど、テーブルスピーチに頭痛を催すものとありと聞かされば、癩癩てんかんの類にはあらざれど、これも病氣の一種なるべし。物臭性分と演説嫌ひのため、會合といふ會合には、いつも出るを躊躇すれど、出て見れば全く利益なきこともなし。一隅に黙々たるの外、何等の藝當なき者には、枯木も山の賑はひと云ひたけれど、それほどの効能もありさうに思はれず、何が故の出席か、自ら其の意を解するに苦しめど、久しく逢はぬ人々の姿に接するだけでもよし。官界に生活する人、何處となく窮屈にて、野人の氣風と合はず、親しみ難きやうに思ひ居たれど、此の頃は、左様な差別を立て、見る心も薄らぎたり。勿論、今日とても官界の人々に交はりを求めやうといふ心なし。其の必要更になければなり。全く境遇を異にし、面談の機會も

容易になき舊知と一堂に會することそれをよしといふに過ぎず。畢竟、人生の行路は、一つの假相行列の如きものにて、官吏と云ひ、教員と云ひ、實業家と云ふも、職業と名づける假面を剥けば、同じ正體の人間あるのみ、假相行列に興味を失ひ、人間の正體に親しむをもつやうになれるも、年齢によれるものならんか。

招待會などいへるもの、多くは、主人側も客の方も、追従と巧言令色にて固め、狐狸の化し合ひに似たるもの多けれど、今日の會合にはさうした浮薄の風もなし。文相より一と通りの挨拶すめば、客は代る代る種々の意見や希望を披瀝す。曰く、教育費國庫負擔額の増加、曰く、文政審議會の廢止、曰く、師範教育の改善、曰く、何、曰く、何。次々に遠慮なく述べたつれども、禮を缺ける點なし。文相がまたそれに應じて意見を述べ辨解をなせるは正直なれど、肝心なる問題には觸れざること、中々伶俐なりといふべし。

九時半頃に散會、官邸を辭して外に出づれば、空や、曇りてくらし。赤坂見附の方へ歩み下れる五六人の者とある小さきカフェーに入りて、またしばらく四方山話に時をうつす。春宵の氣分豊かなり。酒の話と女の話大に賑はふ。男集まれば必ず女の話の出づること古代よりの習はしと見ゆ。古き書物にも其のこと尠ならず。大通の一人云ふ。君は耽溺の體驗なければ、小説を書くとも、女のことを書く能はざるべしと。他の一人云ふ。耽溺し過ぎたる者には却つて書けず、少し耽溺したる位のところがよくしと。大通は云ふ。大に耽溺したる後、悟りをひらきて正道に立ち返りたる者ならざるべからず山登りに譬ふれば、一旦頂上まで登りつめ、悟りをひらきたる後に下らざるべからずと。小説が實感のみを書くものならば、盜賊のことを書くには自ら盜賊となり、

殺人のことを書くには自ら殺人をなさざるべからず。實感によらざるも事實の真相を描き出すこと必ずしも不可能と思はれず。耽溺のことの書けざるわけはなき道理なれど、單なる想像といふものが體驗に及ばざるは明かなり。さりとて、今から酒色に耽溺して、體驗に基づく一大傑作を編み出すには、やゝ立ちおくれの氣味あり。日くれての山登りは愚かにして無益なり。裾野を一めぐりして下山口に廻り、頂上より下れるが如く装はんかなと云ひて笑ふ。偽悪者とならざれば、小説を書く資格なきが如く見らるゝも興味あり。また一人云ふ、屁の研究に於て、君は源内以上なりときく。眞なるかと。以ての外の冤罪なり。源内の「放屁論」が傑作たることは、これを斷言す。最も面白き書の一に數ふるを躊躇せず。屁を放つて笑ふことが、日本の國民性の現はれることは、芳賀矢一氏の「國民性十論」の中にあり。花咲爺の話も、もとは花を咲かせたるにはあらで、放屁して褒美を貰ひたるものらし。放屁は日本の國民性に關係あり、歴史的にも種々の話が傳はり居れど、源内ほどこれを面白く書き、且つ當時の學者を痛快に罵倒したる者なし。一代の才人が、文筆の才を十分に發揮したる此の傑作に、何者か及ぶものあらむ。源内以上の屁の研究者など云へば、源内地下に腹を立てることや必定、冤罪も甚だしといふべし。辨解の辭を費やすことも可笑しけれども、さりとて、これは賞められてあまり名譽なることにもあらず。など笑へるも春の宵めきてよし。風凍りて寒けれど、人間、世間、春は何となく長閑なり。

(大正十五年一月十五日夜)

有朋自遠方來

一日、舊友、三浦住二君、突然訪問す。一昨夜上京してハガキを出し置きたりといふ。ハガキはまだ着かず、ハガキよりも人先きに到る。珍客なり。君に逢へるは幾年ぶりか。しばし見ぬ間に、大兵肥満、別人の如く變はれり。餘りによく肥滿せることを心配すれば、酒は更に飲まず、酒肥りにあらざれば大丈夫なりといふ。君は今江州の彦根にありて、ラムネやサイダー等の飲料水製造業に従事す。遠縁に當る者にて、同じ小學校を卒業したる上、同じ小學校に奉職したることもあり。青年の頃より天才肌の男にして、畫を描くこと巧妙、文才また人に卓越す。天才的の性格に妨げられて教員にもなれず、實業界に入れど尻落ちつかず、商賣を換えること二三回、親戚の者の援助を受け、現在の所にて現在の業を始めしは七年の昔の話。今度だけは、どうやら尻が落ちつきたるも、年齢は争はれぬものなり。月々のサイダーの製造高から、其の賣捌きの方法など、聞いても参考にならぬことながら、舊友の生活を知るは親みあり。彦根はよき所なり。上方漫遊がてら必ず一度來れといふ。木曾川より西へ一步も出でたることなき身には、上方の話もいと珍らし。嵐山、法隆寺、須摩、明石、閑吟旅行を試みたく思へること年久し。されど、いつになれば出かけられるといふ心當りなし。貧乏暇な

しといへ、十日や二十日の汽車旅行をするほどの金と暇とが工面の出來ぬ筈もなければ、出かけぬ所を見れば、日頃の不精によるならん。多年かうした仕事を續け居るの餘慶か、全国各地に未見の友多く、時々書を寄せて招く。如何たるわけならんか。少壯の時より人前にて話すことを好まず、今日にても極端な講演嫌ひにて、招きに應ずる能はず。人招けば益、中にかくれる有様なり。これも一種の不具者なるべく、先の世にては、大方土龍か蚯蚓にてありけん。話嫌ひなれば話せずともよし、鶉飼を見に來よ、紅葉を見に來よ、栗餅を食ひに來よなどいふ者さへもあり。語りたく逢ひたき友人をたづねながら、一度は悠遊自適の旅行を試みたり。縁だにあらば彦根にも寄るべしと約す。

話は轉じて郷里のことに及べり。郷友の集まる時、必ず出づるものは郷里の噂にて、いく度聞くと聞き厭かず、聞く度毎に興味深し。何々商會が破産したるために、何某の家は如何なる災難を蒙りたり。何某は、飲まず食はず、爪にて灯をともし、何程の財産を殖したり。何村の村長は、評判よろしからず、何町の校長は、引退の意志ありなど、ありふれた話なれど、二度も三度も繰り返して語り、二度も三度も問ひ返して聞く。亡友を偲ぶはさびし。此の數年間に多くの友を失ひたるが、わけても思ひ出さるゝ者あり。石川榮八氏の如きは其の一人なり。郷友の集まれる時、君の話の出でざることなし。君逝きて既に十年、君よりも數年の弟たりし者も、今日にてははや三四年の兄となりたり。昨年未だに、君の傳記を書かんとて、誰彼に依頼し、君が生前の遺稿を搜索したれど、大半は失せてなし。満足なる傳をものするには、材料乏しければ、せめて感想を交へたる

評傳なりとも残さんと思へども、都會の生活の慌しさ、其の日の用事に追はれて、既に三箇月を経たるに、未だ僅かに三十枚ばかりを書きたるのみ。三月頃までに終りたしと思へども、此の様子にては覺束なし。拙き筆もて書く傳記を、次より次へと語り傳へて、多くの郷友の知れるは意外なり。十年の歳月は短かきやうなれど、人の世には種々の變化あり。有爲轉變の言葉に漏れず。石川氏の建碑に奔走したる安藤清一君も今は亡し。安藤君は、石川氏の秘藏弟子なり。師範學校へ入學する前、石川氏の宅に寄寓し居たることを記憶す。其の頃より知れる舊き友人なり。石川氏の霸氣は承け繼がず、たゞ根氣よく事務に没頭する一面のみを傳ふ。師範學校を卒業したる後、母校の訓導たること十數年、人の眼につく程の仕事もせず、啄木が木を啄く如く、精勵恪勤、所謂善良教師として、春秋ながき身を病魔のために斃る。かくの如き青年教師、天下に其の數の如何に多きことならん。神谷積次郎君の歿したること、誰かに聞きたるやうにも思へど明かならず、住二君の話によつて初耳の如く感じたり。此の人、中々の元氣者にて活動家なりし。才人オを特みて輕薄に流るゝこと世の常なり。神谷君も此の例に漏れず、輕薄なる男、陰險なる人間の如く思はれて、到る處評判わるし。二三の學校を轉々したる後の消息を知らず、訃報を聞くは痛まし。人間に死といふことあるを、人間が互に忘れざりせば、人間の世の中に憎惡あることなからん。住二君は、また同窓たりし一女の死を語る。此の女、田舎に稀なる美人にて、幼時より妖艶、人を魅するが如き所あり。今日の女優にふさはしき明るさをもてり。豊橋の女學校を卒業し、静岡岡あたりの豪家に嫁つきたれど、快活なお轉婆氣質は、到底古き家風と折り合はず、一年もたぬ中、自分の

方から逃げ出して、兄の家にかゝれる中、或る年下の男と結婚して、關西に住めりと聞けり。隣村なれど生家あまり隔たず、幼時より見知れるため、郷友の來りて種々の風評など傳ふるを聞きては、一としほ興味深く感じ居たれるに、これもはや一昨年の頃に歿したりと云ふ。己れの知らざる間に、一人二人と世を去る者の何ぞ數多き。住二君は、其の女が僅かに一晝夜病みたるのみにて逝きたること、最後に訪ねたる時のことなど細しく語れり。年若き人の死は哀し。若くして美しき女の死は、殊更に哀し。何のゆかりもなく、關係をもたぬものにて、其の早世を聞くは、路傍に咲ける撫子の花の萎るゝを見るが如く惜まる。されど美しき女は早世する方が、本人のためには幸福ならん。肉落ちて髪白く、化石のやうになるまで生き長へるは、美しき幻影を破るものなり。年老いゆくは何人にも心地よきものにはあらず。況して美しさを生命の如く思へる女にな痛ましき事實なり。己れの衰へを慨く者、必ずしもクレオパトラのみにはあらざるべし。未だ美しき容色の衰へぬ中に、水々しき夢を抱いて去りゆく者は、哀しけれどもまた羨まし。羨ましけれどもまた哀し。十數年の歲月、短かきやうなれど、人の世には様々の浮き沈みあり。早世せる友の近ごろ著しく多くなれるは寂し。誰も死せり、彼も死せりなど、數ふれば十指に餘る。桑田の滄海に變ずるよりも、生靈の一つが此の世より影を潜むるは、驚愕すべきことなれども、多くの人のさまで驚かざるは不思議なり。世の中を夢と見つゝも、尙ほ驚かぬことこそ、人の心の常ならん。偶々舊友相會して、亡友を偲ぶはよし。亡友のために此の上の供養はあるまじ。

神谷積次郎のことより、住二君は、しきりに當年の懷舊談に耽る。植ゑ置きたる樟樹くすのぎの、今日一抱ひさかえほどになれるは、何よりもよき記念なりといふ。君の如く樟樹も植ゑ置かざりし事として、われにはこれといふ記念も残らず。一年ほど四十餘人の兒童に國語や算術を教へたりといふのみ。今となりて見れば一夢に等し。當年の友や、如何にせし。神谷君の死さへも新らしく聞けり。殆どみな音信不通、住所も知らぬ者多し。君は昨年停車場にて偶然古木裁縫教師に邂逅したりといふ。古木裁縫教師の事、僅かに其の名を聞いて其の人を思ひ起す位に過ぎず。君はまた高松裁縫教師の薄命をあはれむ。此の人、二度も夫に先だたれ、七八歳にもなる子をつけて、裁縫教師をつとめつゝある中に、村の青年と兎角の噂を立てられたる末に夫婦となり、夫は汗水垂らし膝にまみれて米俵をひき出すに、妻は紫の袴をはきて學校へ通ひ、田舎の人々を驚かせしはよかりしも、數年たちてまた夫に死別し、しばらくは村に止まりしが、二三年前、一家を取り片づけて郷里に歸れりといふ。運命の惡戯、憎めど詮なし。成瀬老教師の消息を問ふに知らずと答ふ。此の人の印象甚だ深し。中々の頑固者にて、自ら信ずる所を枉げず、時々首席の神谷に楯つき、神谷より邪魔者扱ひせられたり。弱々しき身體の人なりしも、元氣旺盛にして、會合の時、若き者を相手にして、大議論をはじめたることも再三ありき。當時既に口髭等の半ば白かりし所より察すれば、五十歳前後にてありしならんか。今日尙ほ存命なりせば、六十七八歳にもなるべし。舊友の誰彼にきくも、たゞ静岡のあたりの郷家へ歸れりといふのみにて、生死の程も詳かならず。邪魔者にしたる神谷も既に亡く、邪魔者扱ひにせられたる老教師は、いづれのはてに如何なる日を送れるか

知る人もなし。還會離合、常とはいへど、奇しきは人の身の成行なり。同じ學校につとむれば、種々の小問題に拘泥し、互に憎み、互に傷つけ合ふが如きこともなしとせざれど、十年、十數年のあとより返へれば、すべては一夢と化し、恩怨を遙かに超越し、たゞ懷舊の情のみ残る。

此の世に生きてある限り、いづれの時、いづれの地にてか、また逢ふこともなしとせず、此の世を去りたる者には、再び相見る機會なし。前には親しかりし友も幾十里、幾百里、山河を遠く隔つれば、常には絶えて消息なく、年に一度の年賀状も怠り勝ちにて、日常の生活と全く交渉なけれど、此の世に存命せるを思へば心も安し。年賀状を虚禮と思へるは、人間の横着心なり。年々歳同じ形式的の文字を活版にしたるものにてもよし其の人を思ひ出して宛名を書くことに人間の情味あり。一日二日を費すこと無益にあらず。年賀廢止など宣傳する者を憎みながらも、其の日其の日の仕事に追はれて、今年も亦舊友に對して、禮を缺きたること多きを憾みとす。さはれ、此の世に生きてあればこそ、常に便りはなくとも、時には奇遇といふこともあり、時には遙々と訪ね來れることもあるなれ。友の遠方より來れるは樂し。聖人の言葉、必ずしもアンチヘブリンの類のみにはあらず。(大正十四年一月十一日)

天てらとぶ白か鷗か

例年のことなれど、春のはじめには、酒のむ會合のみ續きて、酒のまぬ者の苦痛此の上もなし。酒好は、何かと口實を設け、酒のむ機會を作りて樂しめど、酒の嫌ひなる者は、酒のむ會の案内状を受けるも恐ろし。酒のむ會にはなるべく遠ざかるやうにはすれど、三度に一度位づつ、辭退し難きことあり。辛つひきことなれど、浮世の義理とあれば是非もなし。酒のむ會に顔出さねばとて、會費を惜しむわけにてもなく、忙しくて出られぬといふ道理もなし。人間は、常に忙しけれど、如何に忙しとて、遊ぶ暇の出來ぬものにてあらず。酒は酔ふために呑むものなり。陶然として世事を忘れる所に酒の效能あり。憂の玉箒とか昔の人も云へり。酒のまぬ者が酒のむ會に顔出せるは、油の水に交れるが如く、一座の空氣を硬化し、酒のむ人々にも氣の毒なれど、酒のまぬ者自身も何となく窮痛を感ず。恰かも衣服着たるまゝ、風呂の中に浸り居れるが如し。酒を嫌ふ者も世には間々あれど、己れの如きは罕なるべし。酒とは全く敵たぐ同士にて、一滴のみても興奮して眠られず。強てのめば酒に生命いのちを奪はれることを直覺す。好めるものなれば、生命いのちを奪はれても、あきらめやうあれど、好まぬものために、定命を縮めては引き合はず、君子ならざるも、危きに近よらぬこそ賢けれ。性質全く酒に適せず、酒と敵たぐ

同士に生れたるお蔭には、禁酒の必要も更になく、禁酒運動に携はる資格もなし。全く酒ののめぬ者が、禁酒の必要などを説くは、八十歳近き出しや張り婆が、戀愛不用を喋々するに等し。禁酒せんとしても中々禁酒すること能はざる話、落語の中にあれど、禁酒のために少しの努力もいらす、酒のみの稽古をする方が、克己の徳に叶へるといふは、飄ひやう飄ひやう者しものに生れつきたりといふべし。煙草も酒と同じく縁なし。煙草に酔ふといふはおかしけれども、嘗て敷島二本のために、一晝夜苦しみたる經驗あり。一度に酒徳利三十何本をのみ倒したりと云ふ男の話など、アラビヤナイトの物語よりも不思議に聞え、一時間も對談する中に、火鉢を吸殻の林にする者を見れば、魔術の如く奇怪に思はる。酒のめず、煙草吸へず、話をする事も好まず、たゞ食物を通ずる用をなすのみの口は、文明が進みて、外より食物を取る工夫もつけば、全く邪魔ものとなりはつべし。

立春となりて間もなき如きよら月の六日、品川の田中屋にて、同郷の教育關係者、一夕の小宴を催す。心置きなき者數人だけの水入らずの會と、案内状にあり。場所の品川といふにも心ひかれて、酒のむ會の苦しさを忘れ、三時少し過ぐる頃家を出づ。品川停車場に着けば、四時にはまだ二十分ほどあり。風少し出で、寒けれど、あまり峻烈なる鋭さを覺えざるは、立春となれる爲めならん。氣のせいのみにてあらざるべし。宴會時間と云へば、一時間の懸かひ値ねのあるを常例とす。四時と云へば、五時頃行きて丁度よきものなるに、定刻より二十分も早し。一寸思案に暮れたれども、停車場の待合室に時計と腕め合をして居るわけにも行かず、材木を積める馬力や、肥桶を乗せたる牛車の間に交りて、電車通りを八ツ山の方へと徒歩す。此のあたり、二三年の間に全く

一變せり。去年の夏、羽田の海水浴に赴く時、橋の袂にて電車を降り、京濱線の出發驛の紛失に驚きたるは滑稽なりし。八ツ山の橋を渡りて約一丁、左側の軒燈に田中屋とある家なりと通知のハガキにあり。定刻までに間もあれば、品川の町を歩いて見たしと思ひ、田中屋の前を通り越すこと約五六町。風益、吹きて煙の如く砂塵を捲く。品川の町は、昔も今も變らず、平凡にして單調なり。家古く路穢し。十數年前、まだ牛込に下宿したる頃、二度ばかり此の町を通り抜け、鈴が森の濱邊を傳ひて、羽田の邊まで歩きたることあり。一度は數人にて、一度はたゞひとりにて——。數人の友、一々記憶せざれど、松永材君も其の一人、甘蔗生規矩君も其の一人、みな半ば苦學の書生にて、省線電車に乗る電車賃にも小首をひねれる時なりしを思へば、時勢も遷りたれど、人も變りたるものなり。たゞ一人にて鈴が森に出で來れるは、海濁りて白く、濤聲に哀音こもれる晩秋の頃なりし、何がための散策か、思ひ起すに難けれど、厭世悲觀のはての投身自殺が目的にてもなく、平井權八の昔語を偲ぶためにもなきやうなれば、大方例の氣まぐれより出でたるものなるべし。品川は、東海道五十三次のはじめにて、宿場女郎に衣朝の名残を惜むといふやうな浮世繪めいた想像を逞しふせずとも、深き興味味の起る土地なり。——朽本草鞋の足もと軽く、千里膏のたくはへは、何貝となく、蛤のむきみゑほりに、對のゆかたを吹きおくる、神風や伊勢參宮より、足引の大和めぐりして、花の都に梅の浪花へと、心ざして出で行くほどに、はやくも高輪の町へ來かゝり、川柳點の前句集を思ひ出せば、(高なはへ來て忘れたることばかり)とよみたれば、我々は何一つ心が、りの事もなく、獨り身の氣散じは、鼠の店賃出すも費と、身上残らず

風呂敷包となしたるも心やすし。」これは十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の初編にあるものなり。江戸を旅立つ者、品川に來ては、思ひ出すことも多かりしなるべし。品川には寺多し。海晏寺・妙國寺・本光寺・品川寺等聞ゆ。「武藏風土記」等に其の由緒を記す。如何なる寺か見たることなけれど、寺多きために、品川は著しく懐古的の情趣に富めり。されど、品川の町は、たゞ一本調子に亂雑不揃の家が並べるのみにて、何の奇もなく、何の變化もなし。海といふも甚だ没趣味なり。白砂青松の渚などは影さへもなく、高く積み上げたる石垣の下には、満潮の齎らせる塵芥山積す。「上總房州を向ふに眺め、六尺小高い上にと乗せられ——」などと、幼少の時より浪花節やデロン祭文にて聞き覺えたる鈴が森も來て見れば、悉く幻滅を感ず。かつては、鈴が森のあたり、尙ほ家まばらにして、小さき松林など、其處此處に残り、畑の間を電車の通へるもよく見えたれど、今は如何になりしならんか。品川の町まで來て、往時を追懐しながら、其處まで歩いて見る氣の起らざるも、青年の客氣の衰へたる證據なるべし。氣まぐれの心は、昔と少しも變はらざれども——。

四時になりても五時になりても出席者なし。二階の室に待つこと一時間半、日は西に傾きて、殘光遙かに臺場の一角を染む。小さき家なれど、硝子扉越しに海を瞰下せる室は心地よし。潮は干上りて、河尻に繋ぎし舟、轍の跡の如く、半底を露出す。窓の下なる海邊の空地には、鐵筋コンクリート建築の装置らしきもの見ゆ。汽車や電車の軋りは、絶えず耳に響き、灣頭をめぐれる工場の煙突は、盛んに黒き煙を吐く。人間の群集せる大都會の排泄物は、近海の風光をして荒寥に歸せしめ、殆ど見るかけもなきものに化したれど、海といふ名はな

つかし。殘光に照らされし波のいろは美し。波の上に飛べるは何の鳥か。鷗なるべし。鷗にあらざるも、鷗として考へん。波に鷗は調和よし。天と鷗、郷里の海村に、温き夕べの潮風を呼吸しつゝ、眺めたる日は古りたれど、其のかみの思ひは新らし。天と鷗がもの云へばとて、便りをきくべき人もなく、便りをすべき人もなけれど、波に羽ばたく小さき白き鳥はよし。

廣き二階の一室に、ほつねんとして座せること、退痛なるに似たれども、明けても暮れても忙しき都會の生活には、時々かゝる日のありてよし。天は忙しく暮せとて、人を此の世に送れるにあらず、多忙と云へるは、人間が自ら作り出せる言葉なり。多忙に暮すは、僅かなる人生を更に短縮する所以にして、甚だ愚かなることといふべし。太公望が河畔に糸を垂れし故事を學び、時には悠々閑々として、與へられたる日をながく暮さざれば、人間の生活、鳥にも獸にも劣る。

五時半頃より人漸く集まれり。高師の訓導たる者、市内小學校の訓導たる者、校長たる者、市視學たる者、教育界より實業界に轉じたる者等、合せて七名。同郷人にして、東京の教育界に有力なる地位を占める者、多くなれることを痛感す。教員の紹介より、恩給年限、監督者に對する不平、教育上の抱負等、次々に口を吐いて出づれど、浪人者には用なきことのみなり。さりながら、全く世界の異なる珍らしき話をきくは、興味なしとせず。かく種類の變はれる浪人者たゞ一人を、此の仲間に加へたる郷友の厚意感謝の念深し。日くれては海も見えず。酒宴に入りてはまた記すべきこともなし。(大正十五年二月九日)

時は過ぎ行く

名古屋の小學校長伊與田幾次氏、一夕突如として來り、對談二時間、また突如として去る。弟なる人、慈惠會醫院大學を卒業し、衆議院關係の醫師を勤めあれば、議會の傍聴がてら、上京したりと云ふ。東京に住むこと十餘年、まだ一度も議會といふもの見たることなし。見たしと思ひたることもなし。一度位は見えて置きたる方がよきやうに思へども、見たしと思ふ心の起らざるを如何にせん。もとよりの出不精が、年とともに昂じ、此の頃は、先輩や友人を訪問することも、極めて罕になれり。今年は、年賀廻りなども全く廢し、正月の三箇日を朝より居眠り暮したり。世渡りの上に損と思へど是非もなし。遙々と遠方より旅費を使ひて傍聴に來れる者さへあるに、多年市申に生活して居ながら、議院の門が三角か四角かを知らざるは、淺常識の譏りを免れじ。出不精とは云へど、年が年中書齋にこもりて、門外へ一步も出でざるわけにてはなし。嘗て富山房主人坂本嘉治馬氏にきく。大槻文彦博士、言海の改版に着手してより十四年、全く文字通りに門外へ一步も出でず、早朝より夜半に至るまで、一室に座して執筆に餘念なく、僅かに晝食後の三十分ほどを休めるのみなりと。根氣の強きこと驚くべし。懶惰にして倦みやすき者には、眞似も出來ざる話なり。性の懶惰か、體質の虛弱か、一時

間續けて讀書する根氣も續かず、一、二日ほど籠居すれば、腦の疲勞を感じる度の夥しきが故に、三日目か四日目に一度の休日を作り、休日には、何處といふ目當もなく、市中と云はず、郊外と云はず、遊び歩くこと、既に久しき習慣なり。遊ぶ日のみは、思ひ切つて面白く遊ぶをよしと思へど、さほど面白きこともなく、活動寫眞を見たり、喜劇を見たり、浪花節や義太夫を聴く位が關の山なり。活動寫眞も何百度となく見れば、一向興味を惹かず、喜劇に至つては、尙ほ更に單調、數回見れば他は大同小異なり。浪花節・義太夫の類は、いく度繰り返して聞くもよき道理なれど、下手の長談義に流れて辛抱の出來ざるもの多し。面白きものとあれば、八百八町の隅々より、横濱のあたりまで、たづね歩くことを辭せざるに、人の訪問や議會の傍聴にのみ出不精なりといふは、顰の早耳と同じく、少し筋道の立たぬ話なれど、我儘者にありさうな事なり。上野の動物園を見たと思ふことはあれど、議會を傍聴したと思ふ心の一度も起らざるは、脱俗し過ぎて人間離れをしたるものか。議會の方が動物園よりも興味なきほど俗化したるものか。

伊與田氏は、舊き郷友の一人なり。嘗て君が或る海岸の小驛の小學校長たりし時、其の下に代用教員たりしことあり。思ひ出づれば、十有三年の昔となれり。君は中々霸氣ある人、壯年の時支那の天津に赴きて、其の地の教育界に活動したることあり。性質剛直にして言辭を飾らず、元氣ありて氣分若し。去る者は日に疎しと云ひ、境遇は人間の交誼を次第に隔てゆくものなるに、君の心、君の態度、十年一日の如し。久しく他郷に放浪せる一匹の熊、郷里に歸りて多くの舊友を集め、習ひ覺えたる踊を見せたるに、多くの友は却つてこれを喜ば

ず、熊の分際にて踊を知れるが如き、甚だ不都合なりと罵倒し、これを冷遇して追放したりいふ話、イソツブ物語にあり。多年、都會生活をしてあれば、もと小學校に於て同僚たりし舊友は次第に離れ、恰かも種類の變はれる人間となれるが如く毛嫌ひし、偶々歸郷して面會すれど、碌々話もせざる者多きに、君は決して然らず、上京すれば、如何に忙しき時にても、必ず訪問して、數刻を閑談に費すを惜しみます。人間味の豊かなること甚だ珍らし。人間味の豊かなることは、人間として貴し。如何に學問あり、才能ありと云ひても、人間味のなき者は、大切なる人間の要素を缺けるが故に、所謂點睛せざる畫龍と同じ。

豊橋市の助役となれる田部井氏の事、名古屋師範學校の川島君の事、君と會見する時、話題に上る人々は、いつも大方は定まり居れど、手紙のたよりよりも親しみ多く、間々意外の消息を知ることなしとせず。縣下の小學校長の中にも、古株に數へられるやうになりしのみならず、昨今は、書物を一冊讀まず、雜誌を一頁讀まず、學校へ新聞を見に行くのみにて、教員紹介のブローカー位が仕事なれば、かゝる日を暮すも全く無意味なるを感じつゝありと云ふ。此の間まで、新進氣鋭の教師にてありし君が、もはや小學校長中古參となりしかと思へば、歲月の經過の迅速なること、我が身の上のみにはあらざりし。まことに人間はいつともなく齡を重ね行くものにて、四季の移り變はれるが如く、春かと思へば夏、夏かと思へば秋、秋かと思へば冬、過ぎ去りたる後のことを偲べば、恰かも陽炎の夢に等し。はじめて上京したる頃は、未だ人も青年と思ひ、自らも青年と信じ居たるに、數年後に歸郷して見れば、自分のみが青年と信じ居る心は變はらざれど、既に他の人々は青年と

思はず、偶々或る小學校長の宅に遊べるに、土地の有力者來りて、其の校長の前任地たる村會議員なりと評價す。村長にしては尙ほ少し若く、貫録足らずといふなり。三年を経たる後に、また或る小學校の應接室に友人を待てるに、附近の者恭しく一禮し、新任の小學校長にあらざるかと問ふ。其の學校の校長は缺員なりしなり。前日の村會議員は、校長まで昇格したるかと思ひて苦笑したることあり。其の後更に三四年を経たれば、今日にては、村長か縣會議員位の貫録も生じたることなるべし。人は境遇につれて、次第に其の氣分の變りゆくものなり。逆境にある多くの青年の例に漏れず、准教員にて轉々と縣下の小學校を放浪しつゝ、ありし時は、小學校長と郡視學を憎惡すること甚だしく、退職して上京せし際の如き、校長と視學とは、不具戴天の仇の如く思はれ、生涯好感をもつことあるまじと誓ひしも、數年たちて、同じ年輩の者が校長となり視學となりて見れば、いつまで校長や視學を怨み居るわけにも行かず、いつとはなく彼等に好意を寄せ同情をもつやうになれるもおかし。今日に至れば、校長も視學も若年の者多くなり、辭を厚ふせる書面を受けたり、屢々講演・講習等の交渉を受けたりして見れば、昔日の憎惡は全く消え去りてあと方もなし。嘗ては、世を呪ひ、人を憎みし心も、年と共に和らぎて、大風一過の静けさに似たる感謝の念、今日此のごろの心を支配す。若き者より、年齢に敬意を拂はれて見れば、性質の如何に偏狹なる者にてても、少しは度量も大きくなるが自然の道理なり。人を咎める心の鈍くなれるも著じるし。抱月が須摩子と問題を惹き起せしころ、年甲斐もなき醜態と思ひしも、自らが當時の抱月と同じ年齢恰好になりて見れば、一概にこれを非難する氣にもなれず、却つて同情の心湧き出づ。さりとして、

比翼塚建立の發起人になる程の熱もなし。人間甚だ勝手氣儘なるものにて、人の惡口を云ふは面白く、人に惡口を云はれるは心地よきものにあらざれど、人に惡口を云はれたりとして、前ほどは氣にかゝらず。若輩の頃より世の中に突き出され、碌々教育も受けず、自ら働らいて、自ら食ひ、自ら學び來れる者、小學校卒業後、父母の手許より一錢の合力をも乞はず、人の家に一日の食客をしたることなき者が、如何に力めはけみたりとして、此の上のことが出来る筈はなく、天命の定分に從つて、昨日の一日、今日の一日を暮し居れる者、人は惡口をいふとも、神のみは必ず惡口は云はじ、愚にもつかぬ意見を發表し、人に笑はれてはなど、嘗て思ひしことあるも、さる虚榮心、今は全く失せてなし。徳富蘇峯氏の如く、文章報國を標榜するにもあらず、原稿を賣つて遊蕩の費とするにもあらず。文章は糞に等し。生きて居る間は、據るなき排泄物なり。糞も時には肥料となりて世の中のために役立てば、文章も社會を益すること全くなしとせざれど、拙き文字に大したる自信もたず。日毎に三枚五枚と書けるもの、積りて世に出づるとも、讀む人も甚だ少なく、讀みて利益を受くることもなかるべし。採るべきは、内容にあらず、修辭にあらず、此の心なり。

日常の生活が無意味に思はれるは、小學校長のみにあらず、人間の生涯、よく考へて見れば、何の意義あることかわからず、意義なきことも意義あるやうに思ふ所に人生の意義あり。意義なきことを感ずるは、人生の倦怠なり。意義なきを感ずればとて、華嚴の瀧に走る程の客氣なし。時は過ぎゆくものにして、過ぎゆく時につれて、人の心もうつり變はるものなるかな。(大正十五年二月二十日)

丸の内

新瀉縣選出の代議士にして、實業界に活動しつゝ、傍ら教育書肆南光社を經營する加藤知正氏は、雑誌「教材集録」の十五週年祝賀の意味を以て、二月二十日午後五時、關係者を帝國ホテルに招待したり。予は「教材集録」と深き縁故あるものにあらず。僅かに二三回依頼を受けて駄作雜文を寄せたることあるのみ。加藤知正といへる名は、榊原文右衛門君に聞けること久し。榊原は舊友、十五六歳の頃親交あり。農林學校を卒業して早稻田の商科に學び、現在は實業界に活動す。一別以來、音信不通二十年。別れし日の少年は、再會せる時に中年の紳士たり。運命不可思議の感を一入深ふせしは、數年前の事なりき。此の舊友が、如何なる事情にてか、在學中に加藤氏の恩顧を受けしことを、或る機會に聞きしかば、其の人を知らざる前に、其の名のみは知れるなり。二三年此のかたは、種々の會合にて、時々其の人に接すれども、物言ひたることなし。人にも言はぬは予が天性にて、今も昔と相同じ。興味あることには、雄辯滔々、徹宵して語るも話つきざれど、興味なきことには嘔の如く、數分の話するものうし。用もなき時、人に話をしかけたることなどは曾てなし。田舎に在りし頃なりき。朝夕、逢ふ人毎に挨拶するがいやさに、人の顔見る毎に傍道に入り、あの教師は横柄なりとい

ふ悪評を受け、校長に注告せられたることありしも、其の性僻は今も尙ほ改まらず。改めて改まらぬこともあらず。改まらぬ所を見れば、改める心なきによるべし。人にも言はねばとて、決して傲り高ぶれるにあらず。たゞ面倒臭きのみ。世渡りに損なる性分といふべし。此の性分が崇りて、十數年も雑誌記者といふ人間と世間とを相手の職業に従事してあれど、人に知られず、人を知らざることも甚だし。世渡り拙なれど、世辭、追従、型に依れる修辭なく、同じ内容も二度目には表現いたく異なるが故に、生涯を通じて、日常の一言一語を悉く速記したりとて、大した重複もなく、趣味ある一大叢書となるべきを自信す。雑誌に時々ものを書きたる位にて、社にも社主にも縁故頗る薄き者が、招待を受けたりとて推參するは厚かましきに似たれど、前にも其の例あれば、度々の好意を無にするに忍びず、出席の決心のつきたるは、近ごろ珍らしき事なりし。帝國ホテルの所在地を知らずと云へば、あまりに沒常識なるかに似たれど、今日まで帝國ホテルといふものを見たることなし。日比谷のあたりにありたるやうにも思へど、明かならず。帝國ホテルに於て、會合も度々催されたれども、一度も出席したることなければ、其の所在地も知らざるなり。丸の内ならば、東京驛を距ること遠からじ。丸の内を歩みて薄暮の都會情趣を味はふも面白しと思ひ、中野驛より省線電車に乗る。五時十分東京驛着。丸ビル、海上ビル等の巨大なる建物には燈影既に淡し。雑沓の間をくゞり、自動車に追はれ、自轉車に脅されて、漸く丸ビルの角に出で、二錢を投じ夕刊一枚を求め、帝國ホテルの所在地を問ふ。日比谷公園の前なりと云ふ。濠端に添ひて歩く。生計の上から云へば、大同小異、葱一束、澤庵一本、別に値段も變は

らず、電話一つを通すれば、日本橋・京橋の真中から二時間とたぬ中に品物が届く程の便利あれど、郊外の生活と云へば、市中の生活よりも、何となく悠暢に聞ゆ。それかあらぬか、本郷に住める頃よりも、中野に移りて後、丸の内や銀座の空気に、一層深き都會の味ひを感じるやうになりたり。東京見物に来れる田舎者の如き気分もて、濠の水を眺め、帝劇の繪看板など覗き歩くも面白し。淺草を東京の心臓なりといふ者あれど、若し東京を人の身體に譬ふれば、丸の内は頭部ならんか。彼方此方に亭々と並べる建物は頭蓋骨に當る。頭蓋骨の中に潜める脳髓の機能によりて、東京の活動は支配せらる。初めて上京したる頃には、まだ東京驛といふものなく、海上ビルディングの如き建物もなく、馬場先門のあたり、家もまばらに、人影も稀に、三菱ヶ原の面影残り。帝劇も開場日尙ほ淺くして、女優といふもの、太く世間の好奇心を惹ける時なりし。大正元年十一月の「讀賣新聞」に、帝劇の第一期・第二期・第三期の女優三十名の姓名・年齢・出身學校等の一覽表を掲げ、附記して云ふ。「虚榮の權化と云ひ、時代の犠牲者といはる、果敢なき其の顔觸を見ずや。」と。森律子、二十三歳、初瀬浪子、二十五歳等あるも面白し。また有樂座の女優十八名の中に、栗島すみ子の十一歳とあるも興味深し。大正の改元も此の頃の事のやうに思へど、既に十四年を経たり。十年一と昔とすれば、一と昔半といふ勘定なり。元年に生れたる嬰兒も、今年、中學校の二三年に進級して居るわけなれば、理窟から推して何の不思議もなければ、大正初年の世態人情、回想する毎に、多少の感慨なき能はず。東京驛の開設により、電車に乗るも、汽車に乗るも、甚だ都合よくなりたれど、其の昔の新橋驛ほど親しみなきは何故か。夜行列車にて歸郷する時、

未明に着京せる時、新橋驛に淡き一つの温情を覚えしは、青春の感傷的氣分の残りしにもよるならん。新橋驛を發車すれば、次は品川、次は大森と云へるが如く、直ちに東京を離れて田舎に出でても、田舎の生活を喜ぶ者には、無上の樂しみなりし。今日にては、東京驛より品川驛に至るまでの間に、無趣味なる町の名の小驛多くつゞけり。品川驛も昔ほどの趣なし。昔の品川驛は海に近く、プラットホームの下に打ち寄る浪の響きも車窓に聞えたり。今の位置に品川驛が移轉して、東京は慥かに名所の一つを失へるものなり。

五時半、帝國ホテル着。來會者三十餘名、見知れる人尠なし。しばらく餘興の浪花節をきく。東家小樂遊の「大石東下り」なり。浪花節もきけば面白き所なきにあらねど、あまり度々ききては、話の筋から文句まで記憶してしまひ、興味殆んどなし。大石の東下りを浪花節又は講談にて聽き、芝居又は映畫にて見たること、凡そ十五六回、まことの内藏助が眼前に現はれ來るとも、さほど珍らしとも思はざるほど、刺戟の鈍麻したる話なれども、民話として棄て難き所あるだけに、下手な演説聽くよりも衛生上よし。浪花節通といへる者、來會者の中に二人三人はありしならんも、芝居に、映畫に、講談に、度々此の話の内容を反覆せるもの、予の如きはなかりしなるべし。大石の東下りのみならず、如何なる話も再三再四讀み、聽き、講談・落語・劇の内容大方知らざるなし。知ればとて何の役にも立たず。無益に時間を空費したりと云ふに過ぎず。教育のことなど固苦しく論じ居るよりも、面白き物語にても書く方が、世渡りする上に都合よく、世間のためにもなるべしと思へども、乞食も三日すればやめられずの譬に漏れず。思ひ切つて局面を一轉するだけの決心もつかず。浪花節の赤穂義

士の話は聞き古りたれど、年齢につれて、感興の變はりゆくも面白し。大石は器量人なりと云へど、何程の器量人か更に見分も出来ざりしが、昨今に至りて漸く大石の器量人なることもわかるやうになりたり。今迄は、大石といへば、非常に老成の人の如く思ひ居りしが、大石が自刃せし時、行年四十五歳と人名辭書にあれば、今の己れよりも僅かに四五歳の年長に過ぎず。現在生きてある人ならば、大石君と呼んでもさほど不自然に聞えざる年頃となりて見れば、其の苦節も特に深く思ひやらる。四十餘歳にして大石程の思慮と膽力と勇氣と度量とを示せるもの、器量人にあらずれば不可能なり。平々凡々の者に至りては、小學校長・中學校長となりて數人乃至數十人の職員の統御さへも出来ざる年齢なり。されど、人間は、境遇の支配を受けること多く、貧すれば鈍するといふこともあり。境遇のよからぬところに生長すれば、自然に伸びる才能も伸びずして萎縮すること多し。バイブルの中にも此の話あり。これに反し、善良なる境遇の下に置けば、才能は十分に伸び、凡才と思はれし者も、偉大なる事業を成すことなしとせず。五萬三千石の國老の家に生れ、幼少の時より、多くの者にかしづかれ、満足な教育を受けて成人すれば、よし、本當の晝行燈にても、いくらかの光りは發するものぞかし。時代を遠く距つるに従ひ、人間は次第に偶像化し、善人は殊更に善人となり、悪人は殊更に悪人の如く見ゆるものなれど、善人絶對の善人にあらず、悪人絶對の悪人ならざると同じく、大石内藏助といへども、今の人間とくらべて、天と地ほど離れたる人物にあらず、大石と同じ家老の世子と生れ、幼時より其の訓練を受けたれば、かくいふ予といへども、城明け渡しの際に、さまで狼狽せざる分別も出たるべし。大石ほどの器

量はなくとも、東下りの逸話位は残したること受合なり。酒は一滴も飲めざれば、祇園や島原に耽溺する眞似は出来ざれど、外に敵を欺く工夫は考へたるならん。敵を欺く手段は、荒淫漁色の遊治郎となるのみにはあらず。人間の腹の底まで淫蕩遊惰の空氣が滲み込める元祿の世の中にあつては、よき思案かと思へども、遊里に足を踏み入れて金錢を湯水の如く費すなど、手段のために目的を選ばざるの類といふべし。實際の大石が如何ほどの人物なりしかといふことは別問題なれど、浪花節の大石には、偶像の下より尻尾の現はれたる所もなきにあらず。されど一味徒黨の信頼をつなぎ止め、僅かの間に復讐の大事を成し遂げしは、器量人といはれる世評を空しふせじ。

實未だ終らざる中に退出す。主人に挨拶せずして去るは無作法なれど、己れの特色をよく現はしたるところありて微笑せざるを得ず。時計を見れば八時を過ぎる數分なり。夜風甚だ冷たし。日比谷の夜は、美しき灯に輝やけど、行き交ふ人の稀なるは、風尙ほ寒くして、花未だ笑はず、春宵の氣分薄きによるならんか。月光と見れば月あり。都會生活の没趣味なることを、月ある夜には必々と感ず。地上に輝やく電燈や瓦斯燈の光りに妨げられ、空に月の照り渡れることさへも氣づかざる事多し。偶々心を止めて空を仰けど、眞に美しき月光を見る能はず。月の夜毎に、田舎を思ひ、田舎の山と海を思ふ。十五年も都會に住みながら、都會に化すること能はず、折にふれては田舎の空氣をなつかしむ。田舎に生れて、田舎の土に歸りゆくべき我が身か。雜感雜想湧き出で、繁し。(二月二十五日)

長崎ばなし

未見の一友、西海のはてより訪ね來りて、春宵の一刻を四方山の話に費やしける時、談偶々長崎のことに及ぶ。予、長崎繪のことを問ふ。知らずと答ふ。予、更に丸山遊女のことを問ふ。また知らずと答ふ。予、語るに、長崎繪のことを以てし、丸山遊女のことを以てす。長崎に近き所にありて、長崎のことを知らざるに、長崎を遠く離れし東京に在りて、長崎のことをよく知れるを奇とし、且つ驚く。予は地理學者にもあらず、旅行家にもならず、長崎といふところ、夢にも見たることなけれど、古き様々の書物などを繕く度毎に面白く感ず。懐古趣味の豊かなる土地なり。長崎及び平戸には、早くより外國との交通あり。大村純忠の勸請により、當時口ノ津に淹留せる伴天連が、長崎に教會堂を建立したるは、永祿十一年のこととあれば、今を距る三百五十餘年の昔なり。以來、南蠻船と唐人船とは、續々として此の港に集まり、西人の來泊するもの少なからず。其中には、葡萄牙人あり、西班牙人あり、伊太利人あり、更に慶長の頃に至りては、和蘭陀人・英吉利人・柬埔寨人・暹羅人等も來れり。かくの如く、夙に、世界各國の人々集まれるため、所謂異國情調とも名づくべきもの此の土地に生じ、他の地方には全くなき風俗などの残れる、今尙ほ甚だ多しと聞く。

長崎關係の文献を探りて、予の常に興味深く思へるは、出島の和蘭陀屋敷と、丸山の遊女街なり。異國人の雜居する所に、いつも起れる問題は、男女の關係にして、長崎も亦例に漏れず。はじめ、長崎人は、自由に唐人及び紅毛人と結婚したり。然るに、寛永十六年、南蠻人の通商禁止後、唐人と和蘭陀人のみ、來泊を許されてよりは、男女の關係も頗る嚴密になり、異國人間の結婚を差止めらるゝに至れり。此の時に當り、唐人及び紅毛人は、たゞ丸山の遊女街にのみ出入することを許されたれば、此の一廓に於て、纏綿たる異國人間の情話を多く残したり。當時の規則によれば、唐人及び紅毛人と丸山遊女との間に生れし混血兒は、日本人と認められ、父たる外國人がこれを本國に伴ひ歸ることを得ざりし故、こゝにさまざまの悲劇を醸したるなり。丸山遊女街に起れる情話の數々、混血兒を中心とせる悲劇の數々、書きつくれば、戯曲小説の題材として可なるもの頗る多きが中に、何時も先づ浮び來れるものは、彼のシーボルトが事なり。シーボルトの名、日本の文化史や教育史に興味をもてる者、一人として知らざるはなかるべし。文政六年、和蘭の醫官として長崎に來り、出島蘭館に居留し、幕府の許可を得て、町醫の宅に於て、一般患者の診療をなし、郊外鳴瀧に私塾を設けて講筵を開き、其の門下より多くの秀才を出したり。洋醫の日本に渡來せる者、シーボルトを以てはじめとせず、慶長の頃、既に、葡萄牙人クリストファン・フェレイラ日本名を澤野忠庵と稱する者來朝して、外國の醫術を傳へたること、長崎醫學専門學校の沿革に見ゆ。以來、蘭醫の渡來頗る多かりし中にも、安永五年に來れるツウンベルグとこゝに述べるシーボルトとは、特に我が幕末の醫界に貢献したること多し。

我が文明の恩人としてのシーボルトを知れる者も、シーボルトが長崎に滞在中、丸山の遊女其扇を寵愛して、其の間に二人までも女子を設けしことを知らざる者あり。其扇は、寄合町引田屋鐵之助の抱へにて、本名を楠本タキと稱す。シーボルト程の科學者も、三十歳を超えて間もなき壯年なりしかば、故郷を遠く離れて、異郷の空に日を送る心のさびしさを紛はすためにや、いつとはなしに丸山の遊女町に足を踏み入れ、其扇の楠本タキと馴染を重ねたるなり。人間の所業として珍らしきことにはあらず。科學者も哲學者も人間なり。人間の陥るべき良にかゝりて苦しみ悩む所に、人間の弱さありて人生に對する味ひ深し。科學者が遊女に耽溺したること、感心すべきものにもなければ、咎むるは少し酷なるを感ず。俳聖芭蕉と云へば、枯枝に烏のとまりたるが如き人間の如く思へど、芭蕉とても青年の時より血の氣なき枯淡たる男にあらず。嘗ては、壽貞尼といふ妾ありしといふ。事實らし。またはじめて江戸へ來れる頃、水道工事の役人となり、官金を使ひ込み、奉行所の處分を受けしことありといへど、これは確かなることとも思はれず。支考は云ふ。「むかし西行・宗祇など、兼行も、長明も、今日の芭蕉も、酒色の間に身を觀じて、風雅の道心とはなり給へり。」と芭蕉に果して遊蕩の經驗ありや否やは明かならねど、彼は、元祿の世に生れたる者なり。時代の空氣を全く知らざる程の朴訥漢にもあらざりし。「藝者をとむる明月の間に」に「面白の遊女の秋の夜すがらや」と附句し、「うぐひすを魂に眠るか嬌柳」とよめる彼なり。勿論、脂粉の香にみてる句の二三あるがために、彼を放蕩者の如く思へるは當らず。戀愛小説を書く者、必ずしも戀愛の實行者にあらず、惡魔主義の作品を發表する者、惡魔の如き心の所有者とは限ら

ず。人間は、時に己れの性格に反するものを藝術として生み出すこと往々あり。されど、芭蕉は、枯枝の句によつて想像するが如き枯淡なる一生を送りたる人にあらず、時代の背景と調和せる通人の一面もありしこと明かなり。芭蕉にして然り。蘭醫シーボルトが遊女を寵愛したりとて、物珍らしく語る程のことにもなし。されど、幕末に於ける長崎の空氣を察するには、甚だ興味深き話材と云はざるを得ず。シーボルトは、文政十二年の秋に至り、長崎奉行より歸國を命ぜられ、且つ再渡の禁示を申渡されたり。これ有名なるシーボルト事件に禍されたるものなり。シーボルト事件と云へるは、彼が篤學の餘り、國禁の地圖を蒐集したる爲め、嚴重なる取調を受けたることにて、一時世を騒がせたるものなりし。歸國することになりたるシーボルトは、此の國の掟により、妻と契りし女と愛子とを伴ひ歸るを得ず、こゝに悲しき生別の幕は開かれぬ。シーボルトは、親子の生計を安定せしむるため、鳴瀧に約三千坪の地所を求めて愛子の所有とし、信頼せる門弟二宮敬作に後事を托して歸國したり。まさに長崎を出帆せんとする時、シーボルトは、親子の繪像を現はせる漆の香合一個と親子の毛髪とをかたみとして持ち歸れりといふ。人情に變はりなしとは云へ、涙を誘はるゝ話なり。然るに、其の後其扇の楠本タキは、俵屋時次郎なる者の妻となりしが、嘉永四年に夫を喪ひて寡婦となれり。二十年の星霜は、空しく過ぎて、楠本タキが五十三歳となりし安政六年の七月に、シーボルトは、六十四歳の老軀をもつて再び長崎に渡來したり。時に、シーボルトとタキとの間に擧げたる長女イネは、三十三歳となり、イネの子は八歳となり居たり。一日、タキは、子と孫とを伴ひて、出島の和蘭陀屋敷にシーボルトを訪ひしが、共に

往時を追想して深き感慨にうたれたりと云へるも道理なり。その時に、シーボルトは、三十年の昔、かたみとして持ち帰りし香合と毛髪とをタキ親子に手渡ししたりといふ。

異國人が丸山の遊女との間に設けし子の愛にひかされし話は、外にも例多し。享保の頃、長崎に來りし南京の船主黃哲卿の話は、更に一層あはれ深し。彼は、岩田屋與兵衛抱への遊女八雲と馴染みて金八と名づくる男子を擧げしが、唐土に子のなかりしたためか、殊の外に金八を愛し、歸國しても日本に残せし子どもの事を案じくらし、再び渡航を急ぐといふ有様なりし。やがて月日はたちて、彼も老齡渡海に苦しむやうになりしが、尙ほ子の愛にひかされては、屢、日本へ渡り來れり。享保八年に、彼が長崎奉行石河土佐守に差出したる願書の如きは涙なくして讀むこと能はざる文字なり。「其の身當年七十一歳に罷成、渡海も殊の外難儀に候得共、右の男子を不便に存じ、此の度も渡海仕候。」と云ひ、「餘命の程難計候に付、何卒來辰年之牌被仰付被下候は、明年早々渡海仕り、右の男子一生渡世に可罷成品も相與へ置き申度之由御願ひ申上げ候處」云々と云ふ。親子の情愛の根強さを適切に語れるものなり。山が焼けるに、たゞぬか雉子キナ子——の俚語を思ひ起さざるを得ず。

長崎話に興じて、丸山遊女のことより、シーボルトの情話に移り、親子の愛に終る。話の道筋、平凡なるが如くして平凡にあらず。よく味へば味はふ程味はひあり。友しきりに長崎來遊をすむ。機會あらば史料を探しに行くことを約す。丸山街の實地調査は如何といふ。絶対に興味なしと答ふ。玉の盃に底なしと笑ふ。底はなくとも玉の盃ならば可。生臭坊主の贅言われに何程の權威もたずと高嘯す。(大正十五年三月)

名 と 功

虎は死して皮を止め、人は死して名を止むと云ふ。虎の皮も、新らしき間こそ雷公の禪の用にも立つべけれ、古びてはまた雑巾の代用にもならず。人間の名に至りても、虎の皮と大同小異、時には虎の皮ほどの效能もなきことあり。殊に死しての後の名など、生きて居る者に取りては、十圓の債券にて、三千圓を當てんとするよりも尙ほ一層たよりなし。未來永劫に其の名を残すため、此の世の歡樂をすべて抛ち、たゞ忍苦の生活をすべしといふならば。空名を重んじて現實の生活を犠牲にせよといふ意味にも聞ゆ。空名に釣らるゝは、愚かなる虚榮心なり。虚榮心のために、生涯を束縛せらるゝは、正しき處世の道とも考へられず、一言にして名といへど、名にも様々あり、美名もあれば悪名もあり。名を千載に止めよと云ふは、美名を後世に残せの意味なるべく、悪名にてもよしといふ教訓はなかるべし。されど、美名といひ、悪名といふ、其の區別甚だ明かならず、時には美名と思はれるものが悪名となり、悪名と思はれるものが美名となることあり。美名と悪名とが時勢に伴つて交替する例もなしとせず。また世に美名を誣はれつゝある者、必ずしも眞の善人にてなく、悪名を傳へらるゝ者、必ずしも眞の悪人にてはなし。これを現代の世に見るも、美名の陰にかくれて、頗る惡辣なる振舞をな

せる者あり。またさほど悪心もなき者が、惡逆非道の人非人の如く誤解せらるゝことあり。古代のことに至りては、尙ほ更に然り。歴史上の善人と惡人ほど信用の出來ざるものなし。善人と知られし者が、思つた程の善人ならず、惡人と聞えし者が、それ程の惡人ならざりしといふ位のことなれば可なるも、中には、善惡の位置全く顛倒せる事もあり。美名を残すことが、人間最高の目的なれば、時には偽善的の行爲も必要なるべく、時には自己廣告もなさざるべからず。善行を積みばとて、後世より必ず善人と仰がるゝとも限らず、惡業をなせばとて、必ず未來に惡名を残すわけにてはなし。惡辣三昧にて巨萬の富を蓄積したる者、老後に至りて多少の慈善をなしたる爲め、生前より銅像を立てらる例あり。陋巷にかくれ、貧苦と戦ひ、百の善行を積み、千の美蹟をたつるも、銅像はおろか、其の名の世間に顯はれずして終る者數多し。長者の萬燈より貧者の一燈とか云へることあるも、一燈の光りは二燈の用をなさず、況んや、萬燈をや。正しき者却つて世に認められず、心よからぬ者に貴ばれることありとすれば、美名を残すにも一思案なかるべからず。鐘詰の中に石を入れても、暴利を貪ること、やがて美名を傳ふる最良の道なれ。教育社會にも同じ例多し。誠心誠意、献身的に働らくも一個の村夫子として其の名の更に聞えざる者なり。輕薄虛飾、人間として取柄なき程の者にては、嗚物入りの自己吹聴をなし、新思想家の如く思はれ、教育界の新人の如く傳へらるゝことあり。近く接觸せる者は、みな蛇蝎の如く忌み嫌へど、遠く離れたる土地の者には、其の真相を知らずして誇大に買ひ被られ居る人も少なしとせず。かくしても尙ほ人間は美名に憧れることを可とすべきか。人間の名を虎の皮に比較したる金言も、少し

腑に落ちぬ所あり。

名よりも重んずべきは功なり。功をたつれば名は自ら顯はる。名のみ憧れるはよろしからず、専ら功をたて、名の現はれるを待つべしといふ者あり。されど、功とは、果して何のことなるか、これまた考へて見れば見る程わからず。戰國の武士には、國を掠め人を斬ること、功の中の功なりしならんも、今日の世の中となりて見れば、時勢は全く一變して、國を掠めることも、人を斬ることも許られず。巨大なる體軀も強き腕力も、大功を立てる資格とならず、活動寫眞のスポーツ俳優に雇はれる位のものなり。今の世に功といへるは何ごとなるか。富を積むも功、學術上の發見をなすも功、藝術上の傑作を示すも功、功は多けれども、何が眞の功なるかに至りては、容易に判定し難し。富を積むことも、功と云へば功なれど、たゞ徒らに金ためるのみにては、世を益すること更になく、却つて、人を苦しめ社會に害毒を流すことなすとせず。學者は、金錢を卑しみて、學問のみを貴しとすれど、學問果して貴きか。學問に中にも種々あり。如何ほどこれを研究するとも、一向世の中のため人のためにならぬものも多し。献身的の研究など云へば、甚だ世間體はよろしきも、一家を犠牲にし、妻子を飢渴に苦しめ、世のため人のためにならぬものを研究したりとて、何れに貴きところあるか疑はざるを得ず。興味のある所に没頭するを貴しとすれば、圍碁に耽る者、將棋に凝る者、遊蕩に身もち崩す者、みな同じく貴き道理なり。研究の材料となれるものが價值なきものなればとて、其の研究も價值なしとは一概に云はれず、價值なき材料を研究するが故に、これを研究する人間も亦價值なしといふは當らず。フアーブル

は、昆虫の生活を観察することに生涯を捧げたり。さればとて、フアーブルの研究を無價値なりと云ふべからず。フアーブルの生涯を無意義なりとは云ふべからず。浮世繪を研究する者、江戸の幫間繪師よりも劣等の人間かといふに然らず。研究する者、研究せられる者よりも、其の品質劣れりとするならば、俗論や民論の研究者は、寄席藝人に及ばず、六百六號の發見者は、梅毒よりも價値なしと云ひて可なり。研究の題材は、價値の乏しきものにて、研究の方法によりて、瓦礫の間より眞珠を發見し來れることなしとせず。フアーブルの生涯の貴きは、蜘蛛の生活を根氣よく觀察したることにはあらで、虚心平氣の態度を以て、蜘蛛の生活を觀察し、自然の神秘を發見し、生存の意義を深めたる點にあり。されど、無益なる材料を徒らに鑿穿考證して、人にも物識りと云はれ、己れもこれを自負する者に至りては、學問其のものにも疑ひ生じ、學者其の人をも尊敬する心起らず。而かも、今日の世の中には、かゝる學者の甚だ多きを見る。藝術といへど同じことなり。小説家は、小説を書く事のみを貴く思ふならんも、小説を書くこと必ずしも誇るに足らず。殊更に人の好奇心を惹く性慾の問題などを露骨に書き、世間の人氣に投じたりとて、所詮は、不良少年養成讀本の編纂者たるに過ぎず。舞臺上に於ける俳優の演技に至りては、尙ほ更に其の感深し。婦女子に喜ばれたり、肖像入りの記事が新聞を賑はせたりすればとて、白髮禿頭の身を脂粉にやつし、八重垣姫や中山安兵衛にてもあるまじ。餘程の低能にあらざれば出來かねる藝當なり。人間のために眞の意義ある仕事が何なるか、決定するは容易ならず。人はみな我が佛尊しと思ひて、家業を庇護する。心を有す或る高利貸の云へることあり。高利貸は、金の貸手なき人に

も、無擔保にて金を貸し、危急の場合を救ふ佛の如く情ある者なるに、鬼の如く云ふ、咽元過ぎてあつさを忘るゝ者の方が人非人なり——と。盜賊にも三分の理窟ありとやらの類なるべし。それぞれ我が佛尊しとして、學者は、學問のみを過重し、藝術家は、藝術に至上の價値を認むるが故に、世の中のこと、却つて無事平穩に進むものかと思へど、人間の生存といふ高處から見れば、我が佛を尊しとして、學者が實業家を笑ひ、藝術家が商人を排斥するは、甚だしき我田引水たるを免れず。

名と功とはまた常に伴ふものにあらず。大功を立てたる者、其の名必ず大に顯はれるとは限らず。さまでの功とも思はれざるに、其の名一世に遍き者あり。北條時宗と鼠小僧次郎吉と、其の名の顯はれたる點より云へば何れが優れるか。有名無名の一點より云へば、三十何年間も勤續せる女流教育家は、蒲田の女優の足もとにも寄りつけず。然らば、三十何年間の功績、活動女優に及ばざるかといふに然らず。長野縣には、主家のために悲壯な死を遂けたる義人あれど、其の人の名、世間に聞えず、程遠からぬ所にある「江島」の墓には參拜者多く、「江島」の名を知らざる者少なし。江島の行、士君子の眉を擧むる所、而かも其の名の顯はれたる點より云へば、鬼神を泣かしむる義人に優る。出齒龜の名と桂太郎の名と何れがよく顯はれたるかの問にも即答し難し。出齒龜といふは惡名にして、桂太郎の名に比較するは當を得ずといふ者あらんも、桂太郎の名とて、美名なりとも思はれず、美名と惡名の區別既に明かならず。惡名なりとて後世に心酔者なしとせざれば、名のみを重んずる者、何れに就くも同じことなるべし。名と功とを欲することの愚かなる、それかくの如し。(三月三十日夜)

菰野浴泉記

名古屋の一友を訪ねけるに、明日は祭日、明後日は日曜、二日續きの休暇なれば、菰野湯の山温泉に案内すべしと云ふ。急ぐ旅にもあらざれば、同行を諾したり。菰野と云へるは、三重縣の四日市を距る西方約十哩許りの所にあり。二十年程前、師範學校の生徒たりし時、植物採集に趣きたることあれど、近郷に罕なる絶景の地なりと友は云ふ。はじめて、木曾川を越ゆる事、甚だ興味あり。遠足運動に出かける子供の如き心起れり。明くれば雨、絹糸の如く細き水滴、霏々として芽ぐめる楓の若葉に煙れり。如何にすべきかと友の問ふ。雨中の旅も亦趣あれば、出發したしと答ふ。何時の列車にすべきかとまた問ふ。何時にてもよしと答ふ。發車の時間表を借り來るべしと云ふ。時間表を見る必要はなきことを説く。旅は心のまゝなる程よし。時間の拘束を受けるは面白からず。時計を見るも無用なり。空腹を感じたる時に食ひ、日暮れたる時に宿れば可。かくてこそ悠々自適、旅行の快樂も十分に味はれるものなれ。發車の時間を調べ、慌て、停車場に駆けつけるが如きは、愚かなることといふべし。乗りおくれたりとして、一時間か一時間半を待つのみなり。待合室に入りて、老若男女の混合せる小さき社會の縮圖を眺むるもよし。たゞにそは興味深き事柄たるに止まらず、時には大なる學問をすることもあり。退席すれば、また其の時に考へて差支へなし。必ずしも旅行の場合には限らざれど、時計とい

ふもの發明せられて、人間の忙しくなれることは争はれず。忙しき日を暮すことは、人間の生命を縮める所以にて、天理に反するものといふべし。小供は大人の如く仕事に追はれず、悠々として、終日を遊びに耽る。故に、少年の日は長くして楽しみ多し。大人も時々小供の心に歸るがよし。これ長命の秘訣なるべきか。時計を持ち歩けば、何となく忙しきやうに感ずることの面白からず、此の二三年は、時計を持ちて外出したる日なし。時間の定まれる會合等に出席する場合の外は、家にある時計さへも殆ど見ず。彼の無帽主義等に對すれば、これは無時計主義とも云ふべきものか。されど、主義といふほど嚴密に考へて居るわけにてもなし。友も我が説を容れ、時間表も調べず、時計も見ずして家を出づ。名古屋驛に到れば、關西線の發車には僅かに十數分を餘すのみ、時計を見て駆け付けたるに等しと友は云ふ。蟹江を通過する頃、雨漸く霽れて、青き空雲の間より現はれたり。花未だ開かず。樹の芽に新緑の趣きなけれど、麥の葉の遠く沃野を彩れるありて、田園の春の長閑なるを感ずるには十分なり。彌富を過ぎて大川の鐵橋にかゝれば、青空の間より輝やく日光、木曾の清流に映じて甚だ美し、木曾川の下流は、四分五裂して海に注げるが故に、河口の状態頗る變化に富む。車窓より眺むれば、河中の三角洲、小さき村をなして、農家の點在するあり。大川端の風物も、關東平野の間を流れるものに比すれば、稍、明るさを含めど、寂寥の色を湛えたることは同じ。三重縣に入れば、桑名・長島・富田等の小驛あり。富田の濱は、海水浴場として名ある所、旅館らしきもの多し。七・八月の書き入れ時を思はしめる浴場の跡など、遠く青松の間に見ゆ。四日市にて湯の山行電車に乗替、諏訪・堀木・松本村・川島村・高角・櫻村・神

森等の停留所を経て菰野に着く。菰野の次が湯の山終點なり。沿線は、平野にして甚だ單調、僅か數哩の奥にさる絶勝の地ありとも思はれず。此の電車、時々牛の鳴くが如き聲を發す。春の氣分に調和して面白し。四日市より乗り込める青年團員七八名、元氣よく談笑す。手に修養袋と記せるものを提けたるもあり。櫻村の停留所に着きたる時、其の中の一人車窓より顔を出して、次は梅村かといふ。他の一人また續いて、梅村蓉子かと私語す。數人共に笑ふ。青年の日は幸福なり。菰野に下車したる一同は、打ち揃ひて町の方に歩み行けり。菰野は、山麓の小驛にて、町といふ程の町にてもなし。昔よりこゝには遊廓ありと聞くも、容易に信じ難し。友人は彼の青年團體の後姿を見送りて、遊廓の登樓者と判定したり。まさかにさる事あるべしとも思はれざれば、一笑に附したりしが、翌日に至り、偶然にも再び此の青年等と乗り合せ、彼等の語れる所を聞き、友人の言の適中せるに驚きたり。旅行は活きたる學問なりの言、洵に人を欺かず、青年の團體登樓も奇拔なれど、修養袋を提けての登樓は甚だ意表の外に出づ。

菰野より湯の山終點までは二哩餘、乗客の大半は、菰野にて下車し、車内は殆ど空席となれり。電車の終點より温泉までは二十餘町、中途まで自動車の便ありと云へど、自動車に乗る程のこともなければ、四日市驛にて買ひ求めたる案内圖を頼りに歩くこととしたり。構内を出づること二三町にして、早くも谿谷の勝景は現はれ来る。三瀧川の谿谷は、奇巖怪石の聳ゆるもの比較的尠なし。されど、谿水のために磨かれたる大小様々の岩石、累々として横はれる間を、透明なる清流、潺湲としてめぐり、かゝりては飛瀑となり、淀みては淵となり、

り、神氣甚だ爽やかなるを覺ゆ。道は、谿流を横ぎりて、或は右岸に出で、或は左岸に出で、漸次幽邃の境に進む。谿流を横ぎる所には橋を架す。神明橋・清氣橋・香氣橋・板橋・蒼瀧橋等の名あり。神明橋に近き繪野は、鴈の名所にして、也有の句「誰が捨てし扇の繪野か花づくし」によつて知らる。菰野富士近く聳ゆ。清氣橋より香雲橋に至れる間には、寢覺の淵及び三の瀧の勝地あり。三の瀧は、櫻の名所と云へど、花未だ咲かず、樹蔭の茶店に休息する人もなし。香氣橋を超ゆれば、左に羅漢岩現はる。五百羅漢の並べるが如き奇岩、山の中腹に露出するを以て此の名あり。潜門くわんもんの瀧も遠からず。また右の山腹には蛙石といふものあり。蛙の如き形をなせる巨巖なり。板橋、一名を涙橋と稱す。往昔、温泉場の湯女、遊客を送りてこゝに名残を惜しみ、又の逢瀬を約したるが故に、此の名生じたりと云ふ。何れの遊覽地にもある例なれど、涙橋と聞けば、淡き情趣しきりに湧き來れるもおかし。昔の人々は、宣傳も中々堂に入れるものといふべく、たゞたゞ感心の外なし。涙橋を渡れば、二三町にして温泉場に達す。旅館には、壽亭・杉屋等あり。何れも別館數棟を有し、多數の遊覽者を收容する設備あり。壽亭に入りて、別館望城閣の一室に旅装を解く。日は暮に近く、空は再び曇り、山の冷氣、秋の如く身に滲む。

二日續きの休暇を幸とし、遙々と四日市・名古屋又は上方邊より來れる客甚だ多く、壽亭のみにも百人以上の宿泊者ありとて、女中の手不足し、幾度催促すれども、食事の仕度出來ず、空腹を忍ぶこと二時間、散々の目に逢へるも思ひ出の種なり。食事を終りて入浴す。共同湯と内湯とあり。共同湯は混雜し、内湯は靜かなり

と聞きて、内湯を選べり。手拭を持ちて外に出づれば、山の夜は暗し。遙かに遠く燈影の空に映するは、名古屋ならんか。額に冷たくかゝれるものあり。雨か。雨にあらず。片々として舞ふ。霧か、霧にあらず。水滴の點々として残れるを感ず。雪にしては重く、霰にしては輕し。石段を下り、浴室の戸を排して入れば、内には人の影も見えず。電燈のみ明るく煌々と照れり。案内記によれば、湯の山の温泉は、養老二年に、淨薫沙門の發見したるもの、其の効能を認めらるゝこと既に久しかりしが、最近に至り、帝國大學に於ける鑛泉調査の結果、ラヂウム・エマナチオンを多量に包含すること明かになりといふ。遺憾なるは、天然に湧出する温湯に浴し難きことなり。湯元に於ては、華氏八十六度の温度を有するものなりと云へど、長き桶を通りてこゝまで來れる間に全く水と化し去り、火力を加へて沸騰せしめざれば、入浴の用をなさざるなり。温泉は、天然泉にあらざれば、興味甚だ薄し。大地の下より熱湯の滾々として迸り出づる所に、温泉の特徴あり。冷水を湯に沸かして浴槽に充たしたるものは、通常の風呂と異ならず。たゞ山の上の湯屋に來れると等し。皮膚病者が何十人となく其の身を洗へる汚水に浸り居るかと思へば甚だ心地悪し。天然泉の清淨なるには到底及ばず。或る年の夏なりき。曾根松太郎氏と共に、上林温泉の澤柳博士を訪問したる時、關屋と稱する家の裏庭に半日を過したることあり。今は如何になりしか知らねども、其の頃、此の家煙草・燐寸・齒磨粉等の如き日用品を賣り、避暑客の爲めに二階の室を貸せり。主人を關宇太郎といひ、まことに對談するも心地よき程の純朴なる好々爺なり。裏庭には多くの樹木を植ゑて、其の間に小さき泉水を湛へ、鯉・鮒などを飼へり。浴槽は泉水に接して、庭

の片隅にあり。桶の口より湯氣の上れる熱湯絶えず流れ落ちて槽中に充つ。日光明るく照り輝やきて、槽内はやゝ綠青を帯ぶ。湯に浸りては、樹蔭に仰臥すること數回、前夜宿泊せる湯田中の温泉宿の不愉快なる印象も一洗して、長き夏の日の暮れゆくも知らずに遊びたり。關屋の湯を想ひ起せば、此の浴室の無趣味なる、同日の談にあらず。さりながら、山上の浴槽に、梢を鳴らす風の音など聞きつゝ、瞑目沈思するは快し。

翌朝起き出で、見れば、風もなくよく晴れし日なり。窓より瞰下すれば、四方の山々霞を帯びて笑めるが如し。羅漢岩・蛙石等、甚だ近く見ゆ。再び入浴して、仕度もそこそこに宿を立ち出で、三嶽寺の前を通りて溪邊に出づ。冠峯山三嶽寺は、傳教大師の作と傳ふる藥師如來を本尊とす。これより水源を溯るに従つて、谿谷の美は次第に加はる。往くこと三丁にして大石といふものあり。此の石地上に突起する部分二十萬六千貫餘に上るといへり。「共寝して猿と月見ん石の上」といふ也有の句あり。更に往くこと三四町にして長石といふものあり。大牛の如き形をして屹立す。此のあたり道といふ道なく、石の上を傳ひゆくが如き有様なり。御在所ヶ嶽は高く右に聳ゆ。頂上に御嶽神社あり。温泉場より約五十町、登山には往復三時間を要すといふ。御在所ヶ嶽に並びて國見嶽あり。錢浪ヶ淵、馬の背、三本杉、ゆるぎ石、地藏石、恵比須岩、百間瀧、藤内壁、蒼瀧、湯女守谷等、勝地一々擧げて數へ難けれども、長石より引き返へして下阪の途に就くこととしたり。

湯の山の美觀は、櫻と紅葉にありと聞けり。櫻も紅葉もなき早春の湯の山は最も寂し。今十日おそかりせば花は樹間に笑ふべく、今一月おそかりせば、新緑は満山を蔽へるなりしならんも、時期の早かりしを如何とも

し難し。されど、暑さも知らず寒さも知らざる風なき春の日を、谿流の響に交れる藪鶯の聲など聞きながら、下山するは甚だ愉快なりし。

湯の山驛に到りて見れば、電車は今發したるばかりなり。次の發車までには、三十分程も時間あれば、孤野の町まで歩くことに決したり。道は平坦にして兩側に小松林あり。小松林を出づれば麥畑遠く開け、薄く霞める山々平野の彼方に見ゆ。一きは高く聳えたるは、伊吹山ならんといふ。湯の山より道づれとなりし土地の農夫らしき男、朴訥の化身なるかの如き顔して、孤野・四日市の事など、問ふにまかせて語る。

孤野の町に着けば、生花の大會ありとて、羽織袴の男、盛装したる女、そこそこ集へり。會場と貼札したる寺もあり。來賓休息所と記したる旗亭もあり。全く祭禮の氣分なり。忙しき都會などには見られぬ所ありて面白し。道づれとなりし農夫の話によれば、孤野には、今も尙ほ女郎屋の數八軒ありと云へり。何々樓、何々屋など軒燈に記せる家、町の中にあるがそれなるべし。駄菓子屋・鯉鮎屋・荒物屋等の間に、娼家が軒を並べつゝあること不體裁の極なり。たゞ一筋の單調なる町なれば、通り抜けてしまへば外に見るものもなし。停車場に出で、湯の山より來る電車を待つ。構内の櫻樹一株、花まさに開かんとしつゝあり。此の邊に於ける櫻花の魁なり。來て見れば、春の旅路、見るもの聞くものみな趣あり。(四月十日記)

舊師の追慕

岡崎市に小田庄三郎氏を訪ねける時、偶、加藤司馬治といへる人小田氏に用事ありて來れり。小田氏は其の地方の新聞を主宰すること既に久し。地方の新聞記者と云へば、今日にても尙ほ甚だ如何はしき人物多く、常に衆人より嫌忌せられ勝ちなり。然るに、小田氏は、全く其の列を脱し、郷黨の信用頗る篤し。新聞記者としての小田氏に最も敬服すべき點は、非常に讀書好なることと、健筆なることなり。小田氏の如く、讀書する人は甚だ珍らし。田舎にありては、書物を買ひ求める便宜も比較的尠なく、兎角書物と縁薄くなり易きものなるに、小田氏の讀書の分量の多きこと、到底及ばざるの感あり。健筆に至りては、尙ほ一層著るし。此の數年來毎日の新聞に二段以上の文字を見ざることなし。分量の上より云へば、徳富蘇峯氏を凌駕す。予も亦毎日文字を書かぬ日とてはなけれど、小田氏に比すれば、分量に於て遙かに少なし。小田氏をして徳富蘇峯氏と同じ境遇に置けば、必ず同じ程度の業績を示したるならん。加藤司馬治氏は、師範學校卒業後、多年小學校に職を奉ぜしが、數年前に辭職して、今日は、實業界に驥足を伸ばしつゝある人、師範學校以來、石川榮八氏と親交あり。故人の追憶談しばらく賑はふ。加藤氏は、また幼時光石小學校に學べることを語りて、明朝、當時の恩師山本末

吉氏を沼津に訪問する約束なりと云ふ。光石小學校には、予も一年程學びたることありて、山本末吉といへる名もなつかしく記憶に残れり。予が幼少なりし頃、未だ村に高等小學校の設けなかりし爲め、尋常小學の四箇年を卒業すれば、一里半も距りたる組合立の光石小學校に學ばざるべからず、僅か十二歳の幼童に一里半の道を通學せしむること、今日より思へば甚だ亂暴なり。而かも、其の間には山一つありて、朝に夕べに、これを超えざるべからず、雪の日、雨の日などの難澁想像以上なり。一年間在學して、高等科の第二學年に進みし時、隣村の新設高等小學校に轉學したるが故に、光石小學校とは甚だ關係薄けれど、當時の記憶今尙ほ鮮かに残れり。山本末吉氏は、間もなく、東京高等師範學校に入り、卒業後、沼津の中學校に就任せられしやうに聞きしことあるも、確かなる消息に接する機會なく、十數星霜を終て、偶然にも加藤氏より此の舊師の安否を耳にす。なつかしき極みなり。加藤氏は語る。頃日、ふと山本氏のことを思ひ出し、多年の疏遠に對する謝罪やら、一身上の動靜などを細々と認めし書面を差出せしに、折り返し山本氏よりの書信あり。中に種々これまでの追憶等の記されあるを見て、急に老師を訪ふ心起り、明朝出發することに決したりといふ。絶えて久しく頼りもなき幼時の恩師を、ふと思ひ出して、急に訪問したき心の起ることは往々あるものにて、予も亦其の經驗あり。教育の業の尊き所なるべし。加藤氏の談によりて、山本氏が沼津の中學校に勤續十七年に及べることをはじめ知れり。予が光石小學校を去りしは、十一二歳の頃なれば、やがて三十年に近き歲月が過ぎ去れる譯なり。我が年齢より推算すれば、師は、もはや六十歳に近かるべきか。加藤氏はまた語る。沼津の停車場にて老師の

出迎を受け、共に附近の勝地を探りつゝ、往時を追想する豫定なりと。幾年を距て、偶然の機會に相見ゆる師弟の胸中に湧き來る感懷、想像するだに涙あり。予が光石小學校に學べるは、僅か一箇年に過ぎず。而かも、山本氏は、擔任教師にあらず、學科受持にて地理か何かの教授を受けたるのみ。突然に訪問したりとて恐らく老師にはわかるまじ。されど我が印象は尙ほ極めて鮮明なり。小學校の教師が兒童に對して、如何に大なる責任あるものなるかを思はざるを得ず。

小學校の教師は、兒童に最も永く記憶せらるゝものなり。如何なる健忘性の者と云へども、我が親と我が師を忘れることは罕なるべし。常には便りもせざる者多けれど、全く忘れはてしにあらず、先年或る田舎道を歩める時、突然うしろより我が名を呼べる者あり。立ち止まりて見れば、一人の青年、自轉車より降りて、馴々しく一禮す。其の青年は、嘗て予が小學校に在りし時の擔任兒童なりしが、既に十數年を経たることなれば、全く我が記憶より遠ざかり、其の名を聞くまでは、思ひ浮ぶることを得ざりしなり。幼時は、學校の成績もよき方にあらず、寧ろもて餘し者に屬せし兒童が、立派なる青年となりて、世の中に活動しつゝあるを聞くこと既に喜ばし。幼時の舊師なるが故に、いつまでも忘れず、我が姿を認めて自轉車より降り、身の上を語りて往事をなつかしむ。教師にあざれば、味はひがたき楽しみなり。一度び人の師となりし者が、永く自重の心を保つ必要もこゝにあり。小學校の教師、中學校の教師は、知識の上に於て、いつまでも其の子弟の上位に立たんとするの要なし。現に片假名や平假名を教へつゝある兒童は、十數年後に大學を卒業し、専門學校を卒業す

る者なり。知識の上に於て、嘗て教へし子弟に追ひ越されること、決して耻づるに足らず。教師の品位を保てといふは、總べての點に於て、いつまでも子弟より優れたる者たれといふにあらず。たゞ道德上に於てのみ、永久に彼等の師たる品位を失ふべからず。人の師たりし者、悖徳の行をなして、世の非難を受けるが如きことあらば、嘗て教を受けし幾百人乃至幾千人の子弟は、幼き頭腦に強く刻みつけられし美しき幻影を破壊し去らるべし。幼時に神の如く尊敬せし學校の教師が、實は社會の風上にも置けぬ人間なりしを知るに至らば、如何ばかりか人生の頼りなさを感ずることならん。己れ一人が世間より葬り去られるのみならず、多くの子弟に最も深き幻滅の悲哀を味はしむる、これより大なる罪はなかるべし。一度び教を受けし者、成人の後、其の舊師の知識が低ければとて、決して輕侮の念を抱く者にあらず。無學文盲の親なればとて、親に對する尊敬の心を失はざると同じ。知識の程度は如何に低くとも、其の人格が高潔にして親しみあれば、敬慕の念は却つて高まり、幼き時の心に歸りて師に接するを樂しみとするが弟子の情なり。然るに、其の師が最も恥づべき不正不徳の人間にてありしならんには、たゞ敬慕の念起らざるのみならず、長き年月の間欺かれて居たるが如くに感ずべし。人間時に過失なき能はず、善良なる心をもてる者にてても、思はぬ誘惑を受けて罪に陥ることあり。また無實の罪を解くに由なく、世間より惡名を與へらるゝこともあり。道德上の品位を保つことも中々に困難なり。されど、十分に自重して、人の師たる品位を保たんとする心がけを肝要とす。人格にして高潔なれば、子弟の中より如何なる大學者・大政治家が輩出するとも、それ等の者に對して師たる品位を失はざることを得べし。ま

た人の師たりし者は、其の子弟の地位及び境遇に對し、理解と同情とをもつだけの教養もなかるべからず、嘗て教授せし兒童の中には、實業に従事する者もあるべし。學者となりし者もあるべし、畫家となりし者もあるべし。種々雑多の職業に従へる者に對し、よく其の地位を理解し、境遇に對する同情をもつこと肝要なり。地位を理解すると云ふも、多方面に亘る職業上の知識を一々修得するには及ばず。新聞雜誌等にて、社會各般の常識を養ひ、偶々訪ね來れる者をして心置きなく語らしむるだけの用意あれば十分なり。自分の子弟が議員となりて活動しつゝあるに、議會の事情も知らず、また作家を生徒の中より出して居りながら、其の者が如何なる作を世に公にし、文壇に如何なる地位を占めつゝあるかも知らざる程迂濶にては、子弟をして舊師に對する親しみを失はしめ易し。予嘗て二十年來一度も相見ざりし舊師を訪れし事あり。幼時の記憶により、非常に進歩的なる教師を想像して、其の人に面會したるに、我が想像は全く裏切られ、未だ老人の列にも入らざる年輩にてありながら、其の人は、全く世事を辨へざる一個の老朽教師に過ぎざりき。一時間の會見中、たゞ話題となりしものは、自己の體験による病氣の治療法と恩給の計算のみに止まれり。此の時ほど異様の感を起して歸りしことなし。また一人の舊師を訪ねし事あり。師は齡既に八十歳に近し。もはや老耄會話も通ぜざる人を想像したるに、思ひきや、元氣尙は頗る旺盛にして壯者を凌ぎ、侃々愕々として内閣の批評をなし、時弊を痛罵して止まず。殊に驚きたるは、我が日常生活をもよく理解し、著書の名までも記憶し、種々の質問等を發せられしことなり。予は深き敬慕の念にうたれ、師の健康を祝して歸り、爾來、其の地を過ぐる毎に、必ず訪ねて安否

を問ふを例としたり。一度び人の師となりて、ながく敬慕せられる者、非凡なる人物といふべし。加藤氏より多年疏遠に暮し居たる舊師を、態々沼津に訪ねんとする心、急に起れる話を聞き、師弟の情誼に就いて思ひ起せしこと多きが中にも、特に深く感じたるは此の事なり。

加藤氏よりは、其の後消息を聞く機会なけれども、小田氏の主宰せる新聞のハガキ便りを見れば、「沼津の停車場にて山本先生に逢ひしに、先生は先づ涙ぐまれ……」云々とあり。當年の小學兒童は、四十五六歳になりて、頭髮既に白きを交へ、昔日壯年なりし教師は、六十歳の老人となりて、久しぶりにて邂逅する、純情にみてる一幅の畫題にて、其の境地を想像するも亦涙の下るを覺ゆ。(大正十五年四月十二日)

春霞

四月一日の早朝、蒲郡驛に下車したり。歸省する毎に必ず此の驛に下車すること多年の例なり。昨年遂に歸省する機会を失ひし爲め、今年は二年ぶりの歸省なり。大正十一年の秋に、約一箇月間病軀をこゝに養ひてより、星霜移り變はること既に四度び、當時の日記を取り出して見れば、轉た無量の感に堪えざるものあり。

空よく晴れて風もなし。日光麗らかに照りて、山々には薄く霞たなびけり。全くの春日和なり。春は昔の春なれど、人は昔の人ならず、人の世には有爲轉變の悲しみあり。四年前に靜養せし家の老父が三週間ほど前に歿しけることを聞いて先づ驚きたり。老父は聾者なりしが、身體頗る頑健、いつ歸省しても元氣よく働らき居たりしに、今年、其の姿を見ること能はざりしこそ淋しけれ。齡既に七十九歳なりと云へば、短命の方にはあらず。定命とあれば是非なきも、老人が歿したる五六日目に、二十歳になる孫娘が相次いで他界したりといふは、悲しみても尙ほ餘りあり。十日ほどたてば、女學校を卒業する身にてありながら、卒業を待たで逝きしは、痛ましき話なり。會葬したる同窓の女生徒が、柩を圍みて名残を惜しみ、我等を残して何故一人先立ちしやと、純情溢れし哀別の言葉をきき、貰ひ泣きしたりと老婆の話。此の孫娘、予が此の地を去る時、未だ小學校へ入學

せざる者なりしに、もはや女學校を卒業する頃となりしなり。三年たてば三歳になること當然にて、十二三年たてば、幼女が妙齡に達するは、不思議にあらざれど、不思議に思はるゝもおかし。

此の地は、予にとりて最も親しみ深き土地なり。されど、年を経る毎に、友人等も次第に減じ、今は知れる者幾許もあらず。學校の教師は、もとみな友人なりしが、一人去り二人去りて、其の度毎に新らしき者加はり、十餘年後の今日となりて見れば、殆ど全部交替し、残れるもの、たゞ南部小學校の四橋君あるのみ。四橋君と小學校の時の學友たる東部小學校の稻熊君との外には、訪ねて語るべき人もなくなれり。田舎の小學校を思ふ時に、予はいつも人生といふものの縮圖を見るが如き心地す。十數人の教師、數百人の兒童、集まりて團體生活をなせば、其處には、總べての團體生活に隨伴する人生の種々相現はれ來る。田舎の小學校と云へば、平和なる樂天地の如く見ゆれど、内を覗けば、小さき處には小さき風吹き、絶えず様々の葛藤を繰り返して止まず。校長の排斥、教師間の軋轢等、何れの學校にもあることなり。人間の住める所、必ず騒動ありと云へる言葉一理あり。幾多の波瀾、幾多の動搖を繰返へしつゝ、時は次第に移りゆき、人は次第に變はりゆくものなり。過ぎ去りて見れば、往事はまことに夢の如し。

四橋君を南部の學校に訪へば、まだ登校せる者なく、庭内寂として靜かなり。門前の文房具店にて聞けば、昨夜宿直にて、數分前に歸宅せられたりと云ふ。更に東町の宅を訪れて二時間を閑談に過したり。學校の近況を聞きて、今日の如く知れる人なくなりては、甚だ興味薄し。四橋君は、同じ學校に勤続すること既に二十餘

年、轉々交迭の頻繁なる此の地方の小學校には甚だ珍らし。今日よりは、第三子も小學校へ入學することになりと語る。十時半頃辭して、東部の小學校に稻熊君を訪ふ。忙はしき學校へ訪問するも如何かと、やゝ躊躇したりしが、あまりによき天氣なれば、田舎道をしばらく歩みて見たく思ひしなり。

坦々として白く續ける街道には、日光遍く充ちわたれり。砥神の翠巒、薄く霞みて微笑するが如し。田畑の間に赤き白き小幟の翻れるも野趣横溢して甚だなつかし。近頃舊城下内の三十三箇所觀世音とやらを復興し、御詠歌をうたひながら、參拜して歩くこと流行しつゝありと後に聞けり。東部の小學校に着けば、入學式もすみ、兒童を連れて歸れる人々の門内より來れるに逢ひぬ。職員室に入りて稻熊君と語ること一時間半、こゝの學校にも亦外に知れる人なし。數年前に來れる時とは變はり、校舎も整頓し、運動場の面積も廣くなり、全く新らしき學校を見るが如き心地したり。稻熊君より聞く舊友の話は、いつも粗ほ同じことなれど、時に多少の轉變なしとせず。郡内の小學校長大淘汰の噂など、在京中より仄聞したることなれど、珍らしき消息たるを失はず。郡長より辭職をすゝめられしといふ教員の中には、かつて予が同じ學校に奉職したることある者もあり、年齢に於て予と大差なし。小學校教師の短命を歎ぜざる能はず、淘汰せられんとする者に對し、一般の同情殆どなきも亦あはれなり。久しく小學校を參觀したることなれば、校内の空氣に親しみ多く、あらゆるものみな往事を追懷せしめざるはなし。

十二時を過ぎたれば、去りて府相の海岸に向へり。牧山より小さき流れに添ひて眞直に南行すれば、十數町

にして東府相に出づ。堤の芒は、未だ芽ぐまざれど、路傍の草既に青み、蒲公英の花そこそこ、に咲けり。天氣甚だ朗かなり。空には一點の雲なし。時々歩みを止めてふり返へれば、砥神は次第に遠ざかりゆけり。一歩々々と遠ざかるに従つて、峯を蔽へる霞は益々濃し。東府相の別荘より、三味線の音の漏るゝも長閑なり。椿の花眞紅に咲けるも美し。海岸をめぐりて、常磐館の下より竹島神社の鳥居前に出づれば、流汗の額を濕ほすを覚えたり。樹の下蔭に腰かけて休めば、吹き来る風甚だ心地よし。干潮なり。鳥居前より竹島まで陸つゞきとなり居れり。干潟には、潮干の人数多群がり、沖には、汽船黒き煙を吐きて横はる。白き帆かけし舟も、霞の中に眠れり。

渚をつたひて歩む。潮の香り強く、波の音かすかなり。日はやゝ西に傾きて、砂上に輝やく光まぶし。小江の松原に來れば、砥神にこむる霞の色益々濃し。

閑居雜筆

夏

夏が来た。また夏が来た。
x

夏——と思ふだけでも、私の心は暗くなる。五六年此のかた、膈を痛めてから、夏ほど私のために辛い時はない。
x

夏三箇月、私は何も出来ない。全く廢人である。
x

梅雨があがつて、急に暑くなる頃から、いつも私の膈は悪くなる。食事は進まず、元氣は失せ、あたま頭腦は呆ける。文字を書くことも、書物を読むことも出来ない。書いたり讀んだりする興味も氣力も盡きてしまふ。
x

夏休を待ちかねては旅行に出かけたり、濱邊の家に歸つて、海の水に浸り、潮風に吹かれながら、大に讀み大に書いた昔がなつかしい。

x

夏、健康な人を見ると、羨ましくなる。滿一箇月、一日も休まず、講習などをして歩く人を見る度毎に、さうした強壯な身體が欲しいと思ふ。

x

私は旅行が非常に好きである。併し、夏の旅行は出来ない。風土が變はると、腸に痛みを生ずることがある。一度、銚子へ出かけて、散々な目にあつた。それ以來、夏は出ないことにして居る。

x

春や秋には出る暇がなし、夏は病氣のために出ることが出来ない。やむを得ず、年中引つ込んで居る。まだ私は京都や大阪も見ない。木曾川以西は全然未到の地である。關西の友人が、時々奈良へ案内するといふ。また北海道からも沖繩からも、毎年遊びに來いとすゝめて呉れる者がある。奈良や、北海道や、沖繩や、私はそれ等の土地に久しく憧れて居る。二三年の中にはどうかして一巡したいものだと思ふ。長崎へも行つて見たい。瀬戸内海の渚をも歩いて見たい。北陸道から山陰道のはづれまで、日本海の海岸を行脚して見たい。

x

外へも出られず、讀書も出来ない夏、三箇月、毎年私は自分で自分の身をもてあます。其の間の仕事といへば、偶々狭い庭へ出て、草むしりをする位のことである。それも十五分間は續かない。長い夏の日を全く無聊に苦しまなければならぬ。蛙は冬になると土の中にはいつて眠る。蛙の冬眠と同じやうに、夏になると、私は無爲の日を送らなければならぬ。かくして私には一年が九箇月しかないのである。

x

私は一體理論的なものは嫌ひである。理屈をいふことは私のがらでない。私は時々雑誌へ理屈っぽいことを書いたり、また理論的な著書を出したりする。併し、どうもさうしたものは自分の性質に適しない。あとに妙な感じが残る。苦い藥をのんだあのやうな氣がする。

x

私は學者になりたいなどと思つたことは一度もない。ほんたうの學者でも、學者になるのが意義のあることかどうかを疑つて居る。況んや、そこらにいくらも轉がつて居る自稱學者の偽學者に至つては、たゞ輕侮の念が湧くのみである。私には所謂學才などといふものはない。然るに、私の性質を誤解せる先輩や友人は、これまでに幾回となく、學問で立つことをすゝめてくれた。大學へはいつて或る學科を専攻するやうにといふ勸告を、かなり有力な人々から受けた。此の五六年は、漸くさうした勸告をする人がなくなつた。年齢とつたせいであらう。或は私に多少の學才があつたと假定しても、私はそれを伸ばして學者にならうといふ氣が全然なか

つた。今も同じである。緑の野原に居て枯草を食ふのは辛い。寧ろ大空の下に清らかな空気を呼吸することを望む私である。

x

何か面白いことはないかと、私は常に思つて居る。享樂的の欲求が私は非常に強い。夏になると、それが一層甚だしくなる。無聊な日が續けば續くほど、心は享樂のかけを追ふてやまない。

x

私には酒が飲めない。一滴の酒も近頃は私に苦痛を與へる。世間の人々は、享樂といへば直に酒を思ひ、紅燈の巷を想像する。併し、私にはさうしたものが享樂を與へず、却つて苦痛を與へる。私は時々酒の好きな人を羨しく思ふことがある。酒を飲む位のこと、陶然とした気分になれるなら、如何に幸福であらうかと思ふ。

x

併し、私は酒に酔つた人間を好まない。見るも不快である。醉人のクダ、醉人の氣焔、醉人の手前味噌、此の世に於ける最も醜いもの一つと思ふ。私は少年の頃から視力に缺陷を生じた爲めか、聴覺と嗅覺が特別に發達した。聴覺上の快と不快とはかなり敏感である。耳に訴へるものはみな好きである。俗語なども嫌ひではない。が、酒飲の唄だけは聞く氣になれぬ。調律が正しく、洗練された音でなければ聴きたくない。酔ひどれが聲自慢であつた唄は不快である。且つ調律などもいゝ加減に、強ひて調和させて行く職業婦人の三味線を

きくと、あくどい印象があとまで残る。恰かも掃き清められた庭の上に糞尿をまき散らされたと同じである。

x

レコードはいゝ。私のやうな金のない者が、正しい調律の名曲をきく唯一の道は、レコードあるのみ。ラヂオはまだよく知らない、レコードと活動寫眞は、近世文明の賜である。レコード通なら、大がいに或る程度まで耳は發達して居る。

x

夏が来た。ながい三箇月をどうして暮さうか。昨年の夏は、朝の間だけ、少しづつ、近松の世話物を読んだ。外の書物は讀めないが、面白いものならいくら讀める。今年は何をしやうか。早く夏が過ぎ去ればよい。

(大正十四年七月十日)

近郊の水郷

x

夏になると水を思ふ。私は旅行が非常に好きでありながら、此の數年間、旅行らしい旅行をしたことがないので、水郷とか水郷とかいふ言葉だけでも快くひびく。その文字のひびきが含んで居る魅力にひかされて行く心地がする。此の頃私は好んで人の書いた旅行記を読むが、水に縁故のある土地の情趣を寫したものが最も興味をそよる。

x

水郷の名にふさはしい土地は、全國到る處にあることと思ふが、特に其の實が其の名とびつたりして居るのは關東の平野である。私は水郷ときく時に、いつも利根川べりのさびしい村を心に描く。私はまだ利根川べりを歩いたこともない。一度行つて見たいと思つて居るが、今日までその機會を得ないのである。かつて、田舎に居た頃、私たちは七八人で歌の回覧雑誌をつくり、自作の歌を發表して、お互に批評し合つたことがある。其の仲間に下總の男が一人居た。その男がいつも利根川を歌つた。利根川べりの町や村を歌つた。その一首に次

のやうな意味のものがあつた。文句ははつきりと云へない。

ともし灯のくらい、

利根川べりの小さい町につけば、

額にかゝる微雨にも、

おのづから涙が流れる――。

私は其の友人の歌を非常に愛誦した。さうしてまだ見ぬ大利根の流れや、關東の水郷に生れ、ひとり詩作に耽つて居る小詩人を慕はしく思つた。

私は其の頃濃尾の平野になやましい日を送つて居た。その濃尾平野には關東平野のやうな水郷の面影はなかつた。濃尾平野にも水は流れて居た。木曾川のやうな大きな流れもあつた。川の兩側には田畑があり、田畑の間には農家があり、村が出来て居た。併し、水の流れははやく、野邊の緑は明るく輝やいて居た。利根川べりのやうな暗い沈鬱な色はどこにも漂つて居なかつた。また同じ仲間の一人が、かつて木曾川の沿岸にある亡友の墓に詣で、

まひる、君が墓べに立てば、

木曾川の水、白くひかつて、

青山のかけに、

山ざくら、あかく咲く。

と歌つたことがある。此の歌がよく濃尾平野の特色を現はして居る。前の利根川の歌とくらべて見ても、全然感じが違ふ。

x

東京へ来てから、私は好んで近郊を歩いた。今でも暇さへあれば歩きまはつて居る。

本郷の下宿に居た時は、よく道灌山から田端の停車場を横切り、三河島の田圃中へ出た。かれこれ五六年もあの邊へ行つて見ないが、今では家が澤山立ち續いたことであらう。其の頃はまだ静かな田舎の空氣が漂つて居た。田端の驛から少し歩くと、道は田圃の間へ出てしまふ。田圃には稻の葉が青々と波うち、溝には小魚のかけが浮んで居た。私はさうした田圃の間に出て、蝗を取つたり、草を摘んだりして遊ぶ子どもなどを見るのが、最大の慰安であつた。其の時だけ、孤獨の姿を、自分が立つて居る世界に、はつきりと寫して見ることが出来た。自分の生きて居る天地と、天地の間に生きて居る自分とを、深く反省することが出来た。

x

東京ばかりではあるまいが、郊外へ出て見ると、都市の膨脹といふことを痛切に感ずる。上野から飛鳥山へかけての高臺も、年々膨脹して行く都市の力を食ひ止めることは出来なかつた。根岸あたりは全く喧噪の地と化して居た。根岸も昔は静かであつたらう。夜半に水鶏の聲をきくといふやうな歌を、何かの本で讀んだこと

がある。私は昔の物語などから想像して、ロマンティックな夢を抱き、わざわざお行の松を見に行つたことがある。漸くたづねあてたそれが、餘りに甚だしい幻滅を私に與へたことを記憶して居る。根津の逢初川なども半世紀前には神秘的な傳説に彩られた夢幻の境であつたが、文明といふものはさうした夢を盡く打ち壊し、四方から汚い下水を流し込んで、其の名の通りの藍染にしてしまつた。此の頃或る人の書いた、淺草の奥山の記事を読んで、私は非常に深い興味を感じた。淺草に生れた者が淺草をなつかしがるのも道理であると思つた。縁故の薄い私等が、たゞ江戸時代の淺草を想ひ浮べて見るだけでも、一種の懷舊的感興が湧いて来る。

私がよく散歩に出かけた頃の根岸には、もはや水雞の居さうな藪壘もなく、茶の水を汲むによい流れもなかつた。つい近所の坂本町には電車が姦しい響をたて、往來し、千住の方の空へかけて、彼方にも此方にも、工場の煙突から吐き出される黒い煙が渦巻いて居た。三河島の田圃の中に、僅かばかり田舎の空氣が残つて居たが、青い稻の葉の上を王子から三の輪へ通ふ電車が一時間に二三回づつ往復し、田端の驛のはづれには、小さい貸長屋が軒を並べ、尾久の方へ曲りくねつて走る道路には、華美な風をした都會の若い男女が連れ立つて歩き、肥料車をひいてゆく若者や、畑の草を撈つて居る農家の娘に、或る刺戟を與へつゝあつた。殊に、田舎の空氣にふさはしくないのは、田圃の真中に立つた變電所か何かの白い建物であつた。尾久の町にははじめて一二軒のラジウム温泉宿といふものが出来た。私は都市と田圃の空氣の混和して行く姿をこゝに強く感じた。

x

度々三河島の田圃中を歩いて居る中に、私はいつか荒川の岸に出た。荒川の岸へ出るつもりで出たのではない。こゝに荒川が流れて居ることも私はよく知らなかつた。林の間を通つたり、農家の垣根に添つて歩いたり、右へ曲つたり、左へ折れたりして居る中に、小笹の茂つた堤の上に出たら、そこには、どろんどろんと浚んだ川の水が明るい日光にかゞやいて居た。それが荒川であることを、あとで聞いて知つたのである。

はじめには其の川堤を下へ下へと歩いた。時は初夏の頃であつた。堤には大きな樹木もなく、また家もなかつた。額を流れる汗をふきながら、此の單調な堤をかなり長く歩いた。私は、へどへどに疲れてしまつた。どこか休むところはないかと思つて、ふと見ると、川岸の竹藪の中に、低い家の屋根が見える。私は緩い勾配の堤を降りて行つた。すると、其の家はかうした淋しい所には珍らしい、物を賣る店であつた。店の前には駄菓子やが少しばかり並べてあつた。側の桶にはラムネやサイダーが冷やしてあつた。私はいきなりそこに置いてあつた粗末な椽臺に腰を下ろし、少し休ませて貰ふことにした。サイダーに渴いた咽を潤してから、私は椽臺の上に仰臥した。葭簀を透して笹の葉が動く。暗い緑の奥に青い空が凝視して居る。涼しい風に吹かれたので、汗は忽ちひいて行つた。

私は千住へ出る道をきいた。こゝから船に乗つて向ふへ渡つたがよいと、二十歳ばかりの娘と話して居た老婆が教へて呉れた。こゝが船着場であることに漸く気がついた。東京から少しばかり離れた所に、かうした静かな淋しい家があり、こゝに毎日同じやうな生活を繰り返して居る人のあるといふことが、私には何となく不

思議な事實のやうに思はれた。私はしばらく世間話などをしながら、船の來るのを待つて居た。老婆はもうこゝに十年も住んで居るといふ、人里を離れた大川端の一軒家に居て、夜さびしくはないかと私はきいた。慣れて見れば何ともないと云ふ。老婆はまたもう東京へは二十年も出ないといふ話をした。並々と湛えた水の上を走る船の音や、モーターボートの響や、それも止んでしまへば、あとは葦の間から飛び立つ水鳥の羽音のそれより外には、何一つとして聲もない大川端の夜の静寂を、私は心の中に描き、其の静寂の夜のいく夜かを、こゝに明かして見たいやうな夢を夢みた。

x

其の中に舟が來たので、私はそれに乗つた。凡そ二時間ほど待つて居たであらう。舟にはたつた三人ぎり、一人は棹を取る者、一人は後ればせに駆けつけて來た農夫の若者、棹さす男とは平素から懇意にして居る者らしく、慣々しげに吉原や洲崎や向島あたりの怪しげな家の話をはじめた。

舟が岸邊を離れ、流れの真中に出た時、私の心にもふと浮んだのは水郷の感じであつた。兩側の竹藪は低く、竹藪の上に展けた關東の平野は廣かつた。私は郷里に居る時から、友人の歌によつて憧れて居た大利根の風物を、鮮かに思ひ浮べた。今、眼の前に溢れて居る水、今、眼の前に展けて居る野、それは其の時の私にとつて常に憧れて居な大利根の風物、否、なつかしき夢の國、水郷の縮圖に外ならぬものであつた。上野・道灌山の高臺から、三河島の田圃中へ出た時、直覺的に私の胸を衝いたものがあつた。それは其の坦々として曲折のない

自然の中に潜める寂寥である。さびれた傷ましい気分を、見るもの聞くものがみな私に與へた。路傍の草の葉にも、農家の庭の樹木の幹にもどこかに暗いかけがさして居た。白晝の路上に煙る砂塵の中にも、私は重苦しい陰気な色の漂つて居ることを感じた。荒川の流れに浮び出た時、荒川を渡つて對岸へ上陸した時に、私は尙ほ一層それを強く感じた。荒川を境界にして、東京の郊外——大きく云へば、關東の平野が二つに別れて居ることを、其の後私は種々の事情によつて知つた。荒川——下流は隅田川——を東に渡つて、そこに關東の水郷は其の特色を發揮して來るのである。都市が膨脹して、家が軒を並べるやうになつても、本所や深川は尙ほ水郷の名残を止めて居る。私は深川の學校に居た頃、よく深川の町を歩きながら、牛込や小石川の所謂山の手には全くない一種の情調を味はつた。小名木川の縁などを東へ東へと歩いて居ると、黒ずんだ水の面や、水の面に浮いて居る埃や芥が、美しい想像や幻影を片端から破壊してゆくにも拘はらず、尙ほ水の都といふ感じを與へて止まない。隅田川を隔てた彼方の町は、同じ東京の市の一部でも、全然情調を異にする別世界である。

×

はじめて荒川を渡つてから、しばらくたつた後、私は小臺の渡を越えて、櫻の並木を千住まで歩き、千住から吾妻橋まで小さい蒸汽船に乗つたことがある。蒸汽船が千住の大橋を出た時には、もう夕ぐれの薄霧がほんのりとあたりを包んで居た。乗つて居た人のことはおぼえて居ないが、たぶん七八人の客があつたやうに思ふ。鐘が淵まで來ると、兩岸の灯が水の上に搖曳して居た。今までゆるやかに走つて來た船が、こゝで尙ほ一層ゆ

やかになつたので、水は油のやうによどんだ。其の水面を夕べの霧が重々しく壓し、霧の中に灯があかあかと遠く近く輝やき出したので、私は鐘が淵の傳説などを思ひ出し、架空の物語を現實の背景の中に蘇生せしめた。空想と現實との境はかういふ場合に自ら消え去り、陶然とした夢幻の世界に、自分の生命を意識することが出来る。

×

船が止まつた時に、二三十人の男女が一度に乗り込んだ。そこは鐘が淵の小さな船着場であつた。船はまた直に出た。狭い船室は急に騒がしくなつた。川下へ流れてゆくに従つて、行き交ふ船の數も次第に多くなり、兩岸の眺めも漸く特色を失つた。まだ櫻の並木が續いて居た頃、二三度逍遙したことのある向島の堤を、水上から見るのが面白かつたのみである。

×

關東の水郷は、荒川・隅田川を東へ遠ざかるに従つて、益々其の特色を發揮して來るかと思ふ。私はかつて洲崎から中川の堤へ出たことがある。

東京の地圖を見て居ると、深川のはづれに砂村といふ所がある。洲崎の養魚場や、石島町や、千田町や、龜戸町の方を嘗て歩いたことのある私は、地圖を見て居る中に、砂村を通つて中川の岸へ出て見たいと思ひついたのである。平井町や千田町の町はづれのものさびしい情景から想像した砂村の空氣が、私には非常になつかし

く思はれた。隅田川と中川に挟まれた村、それだけでも私の心には種々の幻想が描かれた。大川の海に注ぐ所の村の静けさ、私はそれを最も好む。舊い雑詠の中に、

船の灯の、消えて、しづかに、千どりなく、

河口の夜の、しめやかさかな。

といふのがある、旅行中の即吟である。今でも時々其の時の情趣が浮んで来る。私はいく度か大川口の小村をたづねて、其處に汲めども盡きない寂寥の情趣を味はつた。砂村に興味を感じたのも、私としては當然のことである。地圖の上で見ると、砂村は深川の南端と似た所がある。深川は東西に南北に水が通じて居る。砂村は深川ほどに水運の便がない。深川、砂村の名稱の由来なども考へられる。併し、私は砂村の地圖を見て、家の立ち並んで居ない田圃ばかりの深川を想像した。地圖の上から見るだけでも、砂村は如何にもさびしさである。何々新田の間を縦横に通じて居る道路を見てもさうした感じが起る。殊に私をして一層其の感じを深くさせたのは、廣い新田の間に小さな文字で記してある「せんきのいなり」といふ名であつた。

想像は殆ど實際に近かつた。私は砂村の田圃道を歩いて居る中に、東京市に接近した所にかうした村落の残つて居るのをなつかしく思つた。その砂村も今では大分都會化したことであらう。砂町と改名されたことが、既にすべての幻影を破壊してしまふのである。

「せんきのいなり」がどこにあるか私は知らない。田圃の真中に赤い鳥居の立つて居る小さい祠のあるのを見

かけた。大かたそれが「せんきのいなり」であつたらう。中川の岸へ出やうと思つて急いだ。中々遠かつた。地圖の上の想像は全く裏切られた。實際の里程はそれほど遠くないかも知れない。はじめて此の單調な田間道を歩く私には大變、遠いやうに思はれた。歩き疲れてもう引き返さうかと思つて、ひよいと前方を見ると、七八間しか離れて居ない低い堤の上を、白い帆が下つてゆく。船は見えない。堤の青草の中を白い帆だけが滑つてゆくやうに見える。私は急いでその堤に駆けのほつた。水は満々と流れて居る。岸には近く葦の葉が茂つて居る。私は水郷といふことを、此の時に最も深く感じた。

x

市川や柴又の方へは二三回出かけた。一と夏私はまた關東の水郷を慕つて、銚子の方まで遊びに行つた。犬吠岬の旅館で急に下痢を起し、大利根の風光を探ることが出来なかつた。それから、今日まで、大洗、潮來、香取、鹿島など、一めぐりして見たいと思ひながら、まだ其の機會を得ない。(大正十四年八月)

或る旅行記

x
 昨年、或る新聞の漫書を見たら、簡易避暑法として、瀑布の軸を懸け、其の前で水浴の眞似をして居る所が描いてあつた。それが私には非常に面白かつた。

私は非常に旅行が好きである。殊に、夏になると、田舎の空氣が慕はしくなるが、健康が許さないために、何處へも出られない。そこで、今年の夏はいろいろな旅行記を読んで見た。芭蕉の「奥の細道」のやうなものから、「東關紀行」「五十夜日記」等の古い所から、田山花袋氏の旅行記など、手當り次第に亂讀した。

x
 旅行の文章には、よく個性が現はれるものだ。よく個性の現はれた旅行記でなければ面白くない。

旅行の文章は淡泊なあつさりしたものが多い。むづかしい文字を澤山使つたのは感心しない。

趣味を中心にした記事の多いほど、讀む者には興味がある。「奥の細道」などは、いつまでも絶品である。

事務的の記事が多かつたり、自己宣傳の文字の目につく旅行記は讀む氣になれぬ。何處と何處で講演をしたなどといふやうなことがはいると、全體の興味を破壊してしまふ。旅行記の中からは、厭味のある垢を抜い

てしまつて、洒脱なものにしたい。

センチメンタルなものも悪くない。殊に、青年の書いたセンチメンタルな旅行記には、ひきつけられるものがある。

x
 今年の夏讀んだ旅行記の中、誰も知らないものに、一つ非常に面白く感じたのがある。それは、同郷の友人山本貞司君が書いた「放浪兒の歌へる」と題する一篇である。大正十二年一月の「濟美」に出て居る。「濟美」といふのは、筆者や私の出身小學校の機關誌である。此の旅行記は筆者が神經衰弱で郷里に靜養して居た時のもの、大正十一年十月二十四日稿と終りに附記してある。

(病の苦しさとし生來の放浪癖とから、過ぐる夏念に思ひ立つて、たゞ一人、尾張・美濃・飛騨・信濃・三河の五ヶ國に旅の杖を曳き、其の折々に詠んだ歌を手帳に書きとめ、または携へて行つた短冊にも書いて、人にも興へ、泊つた宿屋にもおいて來た。今其の中の一部を抜いて、同好の士の前に呈する。)

と先づはじめに書いてある。

旅行記は尾張の知多郡からはじまつて居る。知多郡には新四國八十八個所の弘法様がある。私もかつて同じ道を歩き、篠島へ渡つたことがある。當時の日記が斷片的に残つて居る。

知多中島は何處もよく開けて居る。新四國八十八箇所の弘法様は、餘り多いので、一々參詣するだけの信仰が私にはまだない。皆で若い無名の畫家と一緒に居る。彼は描き、私は歌ふ。豆蒸汽に乗つて、篠島・日間賀島に渡つた。船の振動が

激しいため、僅かな船路にも酔ひ、同船の人々の厄介になり、随分苦しい思ひもした。

花摘めば微かに寂し逢ふ事もなき人愛づる心地せられて

わつと言つて一時に泣いて見まほしき心押へて旅す終日

新四國弘法様の慈悲なれば我が悲しみを聞き召すらん

二首の歌はあまり優れた作とも思はれない。併し、囚はれて居ない自由な歌ひぶり、青春の情調といふやうなものが、文字の中に滲み出て居るのをよいと思つた。

次には長良川の紀行が記してある。

美濃の長良川に沿ふた道を溯つて、一人連日歩く。水が美しくよくすんで居る事に驚く。下長の方には、鵜飼に使用するらしい舟が所々岸に繋いであつた。溯るに随つて、兩岸の鬱樹線遠く、流れは急に、底はあらはに、諸所に青すんだ深い淵があり、大きな岩の上や淺瀬の中には、土地の人等が編笠を傾けながら、熱心に鮎釣りの糸をたれて居る。

丘の上に長良の川を見渡せば夏の陽炎みて目に涙しぬ

岸の邊に鵜飼の舟の篝火の消えず残りて朝の淋しき

沙原に輾びてありぬ子供等の帽子に夏の陽炎結く燃えつ

子供等よ遊び疲れし子供等よ我が顔見れば慰まんとか

長良の川堤を一人溯つて行く若い旅人の姿が目に見える。少しも修飾のない簡単な記述の中に、河岸の風景が躍如として居る。

x

其の次にある郡上郡八幡町の記事は、此の旅行記の中で、一番深い感興をそゝる文字である。

郡上郡八幡の町は小さいが、山峽にあるひっそりとした懐しみの多い町だ。町はづれの高臺の上に建つて居る寺の庭より、一時に町を見下しながら、身邊に集まつて来た八九人の子供等に、西洋のお伽話を聞かせ、またブランコを揺つて遊ぶ。中に、私の知つて居る少女と瓜二つ程よく似て居る可愛らしい少女が居た。子供等に一枚づゝ短冊を與へる。子供等は非常に喜んで、私を町の大通りまで送り出し、口々に「さよなら」を告げる。

山峽の八幡の町陽に焼けて、慵々疲れ喘がざる午後

八幡の町のはづれの寺庭にブランコ揺れば心たのしむ

わが少女文子の如く愛くるし淋しき唇と涼しき瞳子と

此の歌もまたあまり感心しない、前の二首は平凡、あとの一首は少し厭味がある。知らぬ他郷に旅して、子どもに話をしてやつたり、ブランコを揺つて遊んだりするのが面白い、かういふ純な心になつて、私も淋しい山間の町をひとり旅して見たくなつた。併し、私には出来さうにも思はれなかつた。かゝる純な心になり得るのも、若き日なればこそ——である。

國境山脈を、山峰に追はれ夕立に降られながら、漸くに横切ると、疎らに立つた茅葺の家が、樹の間に見え出す。紫色の煙が屋根の上に緩やかにたち昇つてゐる。飛彈の國だ。私は故知らず嬉しさと懐しさとで心が踊つた。もう川は北へ向つて、日本海へ注ぐ。柿の木程もありそうな大きな桑の木が、道端に澤山たつて居てイチゴの様な赤黒い實が零れる程熱れてゐる。

山越えば飛驒の山里家近し母見る如く懐しみて見る

こつそりと桑の實詰め味へば唇赤く染み消えんさもせず
 アユ多く手足に纏ひはれ上り血もにじみたり山は恐ろし
 アユとなり空を飛んでも見んとしぬあこがれ多き旅の日暮れに
 と次に記してある。桑の實の一首は印象が深い。

x

白川村の記事はやゝ詳しい。昔から聞いて居る所である。私にとつては未見の山河であるが、何となく興味を誘はれる。

白川に沿ふて下る。白川の峡谷に散ばつてゐる二十三の小部落の塊りが、所謂白川村だ。この村は本州の一番山奥の村で、今でもまだ上古の風が遺つてゐる。北は越中、南は美濃、西は加賀、越前等に境して居る大村で、四方高い険しい山脈に圍繞せられてゐるため、外界との交通關係が非常に薄く、住人は、丁度袋の中の鼠と云つた格好である。殆んど汽車などを見たものはなく、女などは、恐らく一生涯白川村以外へ一步も踏み出さないといふ事である。御母衣あたりの家は三階乃至四階建の大きな茅屋が多く、一人の戸主を戴き血族一統が皆一軒の家の中に住んでゐる。併し、近年急に開けて、今では御母衣の遠山さんと云ふ家が一番大きく、私の聞いた處に據れば、二十八九人の家族だ相である。遠山さんの家の近くに休んでみる。川沿ひの小屋の前で、女許り六七人何か仕事をしてゐたが、それが晩方皆遠山さんの家へ這入つて入つたには少々驚いた。平瀬の宿に泊る。宿の娘に案内せられて最上の部屋へ通さる。白川の流れに向いて居て、景色も云ひ、部屋の奇麗な事と云ひ、申分はない。宿帳を繰つて見れば、鑛山の技師・學生・教師・新聞記者・畫家と云ふ様な、遙々此の村を見に来たらしい人の名が多い。來る道で前日會つた大阪毎日新聞の記者、松本高等學校の三人の學生も皆載つて

居る。察するところ白川村訪問者のために作られた様な宿屋であつた。

山風と川瀬の音と共鳴りて眞晝明るき白川の道

あなわびし陽の色白く輝やきて夏の山道人にも逢はず

星の夜を縫ひて流るゝ白川や平瀬の宿に水音はげし

星の夜の歌はやゝ型にはまつては居るが、調子の高い作である。なだらかな文字の中に、旅情が餘韻深く現はれて居る。

x

高山街道から高山の町へつくまでの叙述は平凡である。たゞ砂埃が多いといふだけのこと。

古川あたりから高山へ通ずる高山街道の眞晝は實に暑い。日に焼けた眞白い砂埃が、足跡から煙の様にたち昇つて、通行人の衣服は何れも肩のあたりまで黄粉をかけたやうになる。高山通ひの自動車は駈け抜けると、暫くの間は砂煙で道が見えない様だ。街道と共に流れて居る宮川の水も亦黄色く濁つてゐる。全く「黄河」の名を冠せたい様な川だ。高山町へ着く。飛彈の首府だ。そうして私の旅行の中心地點だ。割合に奇麗で賑やかである。中學校や女學校を見、照蓮寺・國分寺に詣でる。

桃色の雲山の端に湧き出でゝ高山街道白く焼けたり

自動車の駈け抜け抜けしあまの砂煙砂ちやりちやりま口に音のす

高山や何に焦れて來たるならん爲す事もなく町を歩けり

三首の歌にも、特に感興をそゝられるものはない。

高山から朝日村まで三里の山道を、信州峠とかいふ。辛じて駄馬車も通るが、可成り長い。山腹から後を振り返つて見ると、大小の連山が波濤の様に波打つてゐる。さうして、一番近く、高山の町がぼつちりその波間に浮んでゐる。入日がその上に赫々流れてゐる。山の眺めも茲に至れば海の眺めさ少しも變はらない。飛彈は何といつても本州の一の山國だ。今まで大小幾つの山を乗り越して来たか知れない。眞に「遙けくも來つる哉」の嘆聲を禁じ得なかつた。

大山や小山の波のその隙に漂ひて見ゆ高山の町

ひよつこりと忘れ居し歌思ひ出し歌ひて見ては一人淋しむ

此の日暮此の静けさに浸りつゝ我れに悲しみを遁れんともせず

「遙けくも來つる哉」の嘆、ひとり旅の寂しさを思はしめる。忘れて居た歌を思ひ出して歌つて見るのも、歌を愛する青年らしい所である。

x

朝日村滞在中の記には、歌が多い。よい歌もある。滞在せる家の附近の空氣もよく文中に出て居る。

信州峠で日を暮らし、夜九時頃、朝日村のある家（私の隣の家の親戚）を尋ね當てた。一先その家に旅装を解き、勤めらるまゝに途一週間餘り泊る。益田郡の堤になつてゐる萬屋で、外に豆腐を作つてゐる。毎日近所の子供等を相手に、川に水を浴びたり、すぐ近くの小學校へ遊びに行つたりした。もう學校は夏休みになつてゐた。前の道通りの人が、一寸一服といつては店先に腰をかけて休んで行く。大抵は一二時間位録でもない事を饒舌つて行くが、中には暮れるのも忘れて晝寝をしてゆくものがある、山家の人間は、お話にならぬ程呑氣者ばかりだ。毎日よく夕立がやつて来た。まだ梅のみの大梅さ云ふか桃位大きいのがなつて居り、夜は聲が飛んでゐる。

山里の校舎の窓に陽の燃えて女教員の帯の赤きも

この夕べ忘れ居たりし人に宛て文書く窓に螢の飛べる

梅の實を食みつゝ思ふ我が命などて斯く迄酸からんものと

父母の居ます方へに祈りつゝ山里遠く雷を聞く

雷よ我が旅舎に居て倒れるさもいのち嘆かじ鳴れよ光れよ

馬車馬も雷を怖ぢ震を振りて嘶く山の夕立

震に尾に脚に脊に夕立の注ぎて瀧す山宿の前

次には朝日村近在の青年に加はつて、乗鞍岳に登山し、暴風雨に逢つたことが出て居る。

飛彈朝日村近在の青年五六十人の團體に加はつて、日本アルプスの高峰乗鞍岳（約一萬尺）に登山した。頂上へ今一里位といふ所より山が非常に荒れ出し、霧はふかく、風雨が強いので、一行は道にゆきなやみ、岩を積み上げて暫くその蔭に避難した。併し、一向晴れる様子もなく、日は暮れかゝり、寒さは益々加はるので、私等同志七人一塊りとなつて、意を決し、風雨を衝いて頂上の險を犯して攀ち昇つた。さうして命からがら、頂上を信州へ下る約二十町程の處に立つてゐる籠臺へ辿りついた。殊に防寒の用意を持合せなかつた私は、疲労と風邪のために非常に發熱して、一夜難癒した。

恐しく蒼ざめにきと人の言ふ雨風霧に汚れし我が顔

祈れども祈れども悲しみは消えず心にわだかまり居り

さめし額汗と枕に押しあてゝ祈りつゝ巖の山上の窓

x

信州の白骨温泉に遊んだ記事も、あまり特色のあるものでない。たゞ正直に書いてあるだけである。

信州へ入り白骨温泉に遊ぶ。山の中腹の谿間のやうな所に數軒の家が凝集つてゐる。それが皆温泉宿だ。冬は雪に埋つて了ふので、人間は居られないといふ話だ。不便な地だから夏だつて淋しい。カーキ色の狩服を着た二十一二の貴公子が書生や女中らしい二三人のお供を伴れて湯治に來たのが人目をひく。二三日前、社會主義者の一味三四人が茲に泊りおはせて衆議を凝したと宿の三助の話。その中に舟橋一壽といふ名前を見出す。名前は初耳だったが、人の話の様子から今西浦の端田ヶ鼻に住んで居る男であることを知つた。彼も我もお互に名は知らんで居たが、頗も知つて居り、一寸話をした事もある。

山の端にたゆさふ雲を懐しむ湯でりの朝の静かなる哉

もの皆に懐しきかな吾が吹ける煙草の烟を追ひて見る朝

森ぬちに小鳥の聲のこだまして夏の山の湯春をしぞ思ふ

x

寢覺の床の記事は、前よりもやゝ印象的に書いてある。歌も多く出て居る。最も感興の深かつた所かと思はれる。

白骨温泉の宿の男衆、茲には餘りいゝ儲がないで、木曾福島へいつて、御嶽參詣者の荷擔ぎでもやらうかといふ。寢覺の床へお出でならば、福島迄おともしませうと言ふ。彼に道案内させ、アルプス山麓を道に迷ひながら三日近く歩いて、福島に出、それから一人寢覺に向つた。着いたのは午後の四時頃、巖の上の浦島御堂の前に腰を下して、夕暗くなるまで四邊の景色を眺めて居た。御堂の扉には、旅人の姓名がすきのない程一ぱい書いたりほり込んだりしてある。我も紀念の

に下の方の隅に、小刀で小さく自分の名をほり込んだ。

戀のごと一人寢覺を尋れしに我が悲しみは消えず残りぬ

かなかなと酒を隔て、鳴しむる虫の音悲し秋立ちにしか

三日月は寢覺の床の森の上に淡く光りて夏の日の暮る

堂の扉に我が名を留めん小刀の刃に蒼白く震ふ背月

故知らず命さびしくすみ渡り上松の灯を慕ひ行く我

何故に我は淋しく生れしか明るき扉に女はなやぐ

六首みな同じやうな哀調を含んで居る。森の上に光る三日月、淵を隔て、鳴く虫、初秋に近き日の山路の旅を思はしめるものである。

x

上松の驛で汽車に乗りおくれ、木曾川の岸を星あかりに歩いて下る情景もまた簡單にして印象深く書けて居る。

上松の驛に汽車を待つたけれども、もうでないのだと後できいた。宿を取らうと思つたがもう遅い。遂に徹宵歩いて見やうと決心した。木曾川に沿つた街道を星を仰ぎながら下つた。左手は山の崖で、中央線路が道にくつついたり離れたりして走つてゐる。對岸には處々發電所らしいものがあつて、電燈の灯影が流れに浮んで夢の様に搖れて居る。人家は霧で淋しく且つうすら寒い。

夜を籠めてその涙の淋しさを受けて流るゝ木曾川の水

木曾川やわが魂を見る如し淀みに浮ぶ灯影の顛

長野の平野は私も一度歩いたことがある。次に記す所も、私には面白く讀まれた。

飯田峠を越え切つて、遙か下伊那郡の盆地を一時に見下した景色は、眞に山國に於てのみ見られる一大奇觀であつた。斑點になつて點々にはげて見える山脈が、丁度摺鉢の縁の縁になつて圓く天空に聳えて居り、この眞中に飯田の町が一握ほどに横はつて見え、その向ふには天龍川が白い虎白の様に、うれうれと流れて居る。而うして是等のもの、格好が、皆仰向になつて深い青空を睨みあつておる様に見える。飯田の露店を冷かし、天龍峽を賞し、十數里の同じ様な澤の間の道を通つて三河に入る。

さんさんと伊那の盆地に陽の降りて透けく境の山脈を見る

梳きたての髪を夜露に濡しつゝ見知らぬ町の緑日を歩く

天龍の雲橋の上に佇めば瀨の音遠く地下にひびきす

子等の群天龍峽に泳げども浮ぶ瀨もなく流されにけり

天龍の橋の上に川瀨の音をきく歌などは、壯嚴な響を含んで居る。

x

旅行記は次の一章で終つて居る。長い旅行を終つて、三河の國境に達した時の感じが、短かい文字の中に出て居る。

信州と三河の國境に立つた時は、もう自分の家へ歸つた様な氣になつて、やれやれと思つた。段戸山が右手の前方に高く聳えて居る。併し、三河に這入れば飛騨や信濃に較べて、山も皆小さく山國氣分も非常に薄らいで来る。さうして急に

暑さが甚だしくなる。旅の始めの頃と終りの頃とは、時日の相違もあるが、確かに土地の關係によつて三河は暑い。風來寺山に登り、長篠古戰場を訪れる。

綿雲の風來寺山に影落しゆるゆる谷間を傳ひ行く見ゆ

風來寺假寝しつゝ眺めたり旅に疲れし眞晝の木蔭

寂しさに口笛吹けば里の子等眞似して後につき来るぞ憂き

長篠の城趾寂びて草生えて只一本の碑のみぞ残れり

仄暗き長篠の驛の姿見に旅の汚れし姿をいとむ

x

此の旅行記は私の最もよく知れる友人の書いたものである。旅行の地は尾張・美濃・飛騨・信濃等の如き、最も親しみを感じる郷里に近い國々である。

また此の旅行記は、最も純な心で書いてある。さうして、最も簡明な筆で叙述してある。執筆者の心にも筆にも全然修飾がない。純な心で見たことを、少しも飾らず、正直に記したものである。いろいろな點に於て、私に最も大きな慰安を與へた。

私は此の旅行記の一節について感想を書かうと思つて筆を執つたが、書きかけて見ると一部分だけを抄出し、他をすてるのが惜しかつた。小學校の機關誌の如き範圍の狭い雑誌に出たので、早く湮滅する運命を有して居る。そこで、私はこゝに全文を寫し取り、一節毎に所感を記して置くことにした。(大正十四年九月十二日記)

秋の夜に

月見れば

千々にものこそかなしけれ

わが身一つの

秋にはあらねど

秋の聲を聞く毎に、此の古歌が思ひ起される。嘗ては月並な歌として斥けたが、今では心の底へ深く沁み込んで行くのである。

月を見て悲しむこと、如何にもそれは月並歌人が屢々歌ひ古した詩材である。月並歌人によつて月並な歌によまれた爲めに、月は新らしい詩人からよい感じを以て迎へられない。併し、私は月並な詩題として月を捨てない。

月ほど美しいものはない。月の外にも美しいものはある。花も美しい。紅葉も美しい。が、月の美しさとは違ふ。月は玲瓏の光りを以て、世界のあらゆるものを美化する。一の特珠な世界を描き出す。月の光りに照された世界は明暗の世界の外に立つ。明が覺、暗が睡ならば、月の描く世界は夢の世界である。これほどロマンチックな世界はない。ロマンチックな世界に憧れ、夢の世界を求めて止まぬ心、それは自ら月の讚美者たらしむを得ない。私は月の美しさを特に深く感ずる夢の世界の憧憬者である。

九月一日の月は美しかった。夜の更けて行くのを忘れて、青白い光りを浴びながら、啼く蟲の音に耳を傾けた。

月に啼く蟲、平凡にして何の奇もない。月並な情景である。年々歳々、秋になれば、必ず月は輝やき、蟲は啼く。併し、此の月の光り、蟲の音、これほどよく秋を象徴するものはない。

庭の草木は露を含んで居る。青白い光りが滑らかに流れてゆく緑の葉は、濡れた玻璃盤のやうに輝やく。叢の中から聞える蟲の音は、大地の底から、遠い世界の呟きを傳へるかの如き恍惚の響を帯んで居る。

静かな月夜に啼く唧々の蟲の音は、佗しい秋の聲である。此の聲をきく時、此の聲が空虚な心を浸してゆく時、いつしか身邊に静寂な世界がひらけ、其の世界の中に全我の没入して居ることを意識する。その意識こそ私にとつては生命の意識である。

x

年々、夏の間、廢人同様な日を送つて居る私は、秋の聲を聞く時に、蘇生の感が胸にひらめく。私はまだ生きて居た——といふ意識が浮んで来る。

x

澄み渡る空に輝やく玲瓏の光りを眺めて、私はふと西行の歌を思ひ出した。それは、

願はくば

花のもとにて われ死なん

そのきさらぎのもち月のころ

といふのである。西行はさびしい詩人である。彼の歩いた道はさびしかつた。さびしい道を歩いた、さびしい詩人の西行も、月光讚美者の一人である。併し、彼は春の月夜を愛で、そこに安らかな死を願つて居る。咲き亂れた花に煙る月、春の月の瑞々しさを思ひ起して、寂しみの底から湧いた樂天的な境地に、深い趣を見出す。が、私は春の月よりも秋の月を好む。秋の月の美しく輝やく宵、ひとり静かなもの思ひに耽りながら、玲

瓏の光りの中に、安らかな死を望む。死と云はず、生と云はず、生死の世界を超越した彼岸に到達したい。さうして、夜もすがら、松風の吹く、波の音の聞えて来る、海近き丘陵に眠りたい。私は少年の頃から度々さういふ境地をうたつたが、今日になつても、其のロマンチックな夢は、まだ少しも褪色しない。私は月が好きである。海が好きである。月と海とは私にとつて最もよい自然の伴侶である。

x

秋の月はいろいろのことを思はせる。特に深く思ひ起されるものは、死んだ友人のことである。忙しく騒がしい都會の生活をして居ると、靜かに亡友を偲ぶといふやうな機會が少ない。月の光りをじつと眺めて居ると、孤獨な自分の影が映する。孤獨な自分の影の背後に立つ寂寥な人生の姿が自ら現はれて来る。其の時に思ひ出されるものは亡友のことである。

x

十年間をふり返つて見ると、私は多くの友人を失つて居る。中には豊かな才能や優れた天分をもちながら、その才能や天分を伸ばすことも出来ず、空しく一片の茶毘と消えてしまつたものも尠くない。亡友の中でも特に深い印象を止めて居る者は、さうした青年たちである。或る機會に思ひ出しては、往事を偲ぶこと、それはそれ等の人々に對する心からの供養である。

x

私の記録には亡友のことを書いたものが多い。秋に書いた古い文章を取り出して見ると、必ずどこかに亡友を偲ぶ記事がある。

多くの亡友の中には、私と同じ道を通つた者もある。一しよに勉強した者もある。最も信頼して居た者もある。

人の世の榮枯盛衰を外にして、天上界の月は、永却の光りを放つて居る。多くの友人は、空しく此の世から消えて行つた。されど、月は尙ほ昔も今も變はりなく輝やいて居る。今、天界を仰いで静座せる私は、いつ此の世から消え失せてしまふかも知れない。私が消え失せた後にも、月は依然として輝やいて居ることであらう。

一人二人の友人が、梢を離れる病葉の如く、空しく消えてゆくのみでない。二年前の今日、九月一日には、不意に起つた天變地異によつて、忽ち此の大都市は焦土に歸し、幾萬の生靈は猛火の中に焼死した。かゝる悲惨な事實も、たゞ人の世の事實であるに過ぎない。月は同じやうに輝やいて居る。

同じ月同じ日に起つた悲惨な事實を回想して居ると、青白い夢の世界に憂鬱なかけがさして來る。秋の月は寂しい。今年のみには限らず、我が身のみには限らないが、千々に悲しいもの思ひが湧く。

(大正十四年九月一日夜)

蟋蟀

蟋蟀が鳴いて居る。山の秋が思ひ出される。

私は十九歳の時に歸郷した。三年ばかりの間、三里半ほど隔つて居た所の親戚にあづけられて居たのである。

他郷に在る間、幼ない私は、どれだけ郷里の家を戀しがつたことであらう。

土曜日になるのを待ち兼ねた。

土曜日が來ると、必ず歸省することにきめて居た。三里半の田舎道には、汽車もなかつた。どうしても歩かなければならなかつた。

途中には山があつた。あまり高い山ではなかつた。

日の短かい冬になると、その山へかゝる頃には日がくれた。

暗くなつてから山を越すのは淋しかつた。

何かの都合で、歸ることの出来ない時には、遠くから其の山の峰を眺めて、
「山のあなたに母います。」
といふやうな哀愁を感じた。

x

歸村した時のうれしさ。

私は古い畳の上にくたゝ寝をして居た。

眼をさまして見ると、夕日があかく輝いて居る。

私はかつと明るくなつた障子の文字を読んだ。小學校の時の清書が貼つてあつた。

風が吹いて、はたはたと破れた紙の端をゆるがした。

さうしたことにさへ、心やすさを感じた。

x

私の家は偏僻な山の中にある。

僅かに二十七八戸の家があるばかりの谷の底見たいな所である。

村の人はみな單調な生活をして居た。

私の家にも變化のない日が續いた。

併し、家の中はいつも賑やかであつた。私の家には子どもが多かつた。十九歳の私を頭に、みなで七人の子どもがあつた。両親の外に、七十歳近い老祖父もたつしやであつたから、夜などの賑やかさ、山の中の家とも思はれないほどであつた。

x

私が歸村してから、一箇月ほどたつてからであつた。

子どもが多くて騒がしく、勉強が出来ないからといふので、私のために室を一つ作る事になつた。

今まで物置になつて居た所を掃除して、壁を塗り直し、椽板を張り、手入をしたのである。

父と老祖父とが十日も働らいた。山から木を伐り出して来るやら、壁土を運ぶやら――。

やつと粗末な四畳半の室が出来上つた。

私は其の室で毎夜おそくまで書を読んだ。

x

室は竹藪に接して居た。

母屋とは全く離れて居るので、小さい弟や妹がいくら騒いでも、殆ど聲は聞えなかつた。

夜は静かであつた。ひつそりとしても音もしない。

竹藪を通る風が、時々笹の葉を揺がした。

梟の鳴く夜もあつた。

x

蟋蟀が多かつた。

雨の降るやうに鳴いた。

ランプのひかりで、讀書して居る机の上に飛んで來ることがあつた。

月の明るい夜には、戸をあけて外を眺めた。東の方へ向いて幅のせまい椽側が出來て居た。

月の傾いて行くまで、其の椽側に腰かけて、山の秋のさびしみを味つた。

更けてゆくに從つて、川瀬の音が近く耳にひびいた。

x

それは二十年の昔である。

蟋蟀の鳴く聲をきくと、私はいつも山の秋を思ふ。毎夜おそくまで讀書した其の室を思ふ。

x

子どもは成人した。

成人した子どもたちは、みな他郷の人となつた。

老祖父はなくなつた。今年でもう十年以上になる。

今では父と母と末の妹が残つて居るのみとなつた。

x

主人を失つた室は、廢坑のやうに荒れはてた。今では物置同様になつて居るであらう。埃は推く、椽の上にも、書物は油蠱の糞で黒くなつて居ることであらう。

「うちに置いて整理や手入が出來ないから、その中に機會を見て、全部書物は送る。」

と一人の弟がつい此の間も手紙の末に書いて來た。

x

放浪の癖がついてから、私は前ほど故郷のことを思はないやうになつた。否、時には故郷を呪はしく感ずることさへもある。我儘な心ではあらうが――。

併し、私は蟋蟀の聲をきくと、懷舊の情に堪へられぬ。

埃が堆く積つた中で、今年もまた二十年前と同じやうに蟋蟀は鳴いて居るであらう。

長い間、月の光りもささない、濕つほいかび臭い室の中に、飛んで居る蟋蟀もあることであらう。

x

蟋蟀が鳴くと、山の秋が思ひ出される。

山の家が思ひ出される。

(大正十四年九月十二日夜)

人間世間

人間に生れて来たことは、喜ばしいことであり、さうして、また悲しい事である。

人間は、神でもなく、また獣でもない、神と獣との中間性をもつ生物である。中間性は中性とは違ふ。人間の中には、神性と獣性とが、或る程度まではつきりと別れて居る。

神にもなれなければ、獣にもなれない。こゝに人間の煩悶がある。こゝに人生の波瀾が起る。

神になつてしまへば、世の中に罪惡といふものはなくなる。人生の中からすべての波瀾は消えてしまふ。獸となつてしまへば、世の中に徳義といふものはなくなる。人生は争鬭の巷と化するであらうが、そこには人間の煩悶といふものもなくなる。

神性と獣性との橋梁、そこに人間の真相を見出した者は少なくない。ドストエブスキーは其の一人だ。カントも其の一人だ。

高德を萬人から仰がれた長老も死んだら身體から蛆がわいた。何十人も何百人も惨殺した悪黨も、窓の下に遊んで居る子どもを見て愛を感じた。それがドストエブスキーの人間観である。

カントは、人間性の奥に人格性といふもの、存在を認めた。人間性と人格性とを對立せしめたのがカントの道徳論の根柢である。

カントの哲學と、ドストエブスキーの藝術とは、人間觀に於て一致して居る。

ドストエブスキーは、人間の獸性を露骨に發き出した。が、勿論これを讚美しなかつた。あはれみの眼を以て見た。彼の藝術は、カントの哲學をキリストに結びつけたやうな立場にある。

ドストエブスキーは、或る時、自分の子を殺した婦人を辯護したことがあつた。人非人として誰も相手にしなかつた其の婦人のために、世間の妄を破つた。彼の藝術の上に現はれて居る思想は、かなり彼の實生活の上に徹底して居たやうに思はれる。

x
彼は、また或る時に、自分の病児の生命を取りとめることが出来るなら、十字架の苦しみも、厭はぬと云つて居る。大藝術家たるドストエブスキーよりも、此の人道的な温かい心をもつドストエブスキーの方がなつかしい。

x
自分の虚名を高めるために、家族を犠牲にしたり、友情を無視したりする者が澤山ある。これは感心の出来ないことだと思ふ。

x
或る學者は、家のことを少しもかまはずに、書物ばかり読んで居たので、其の妻がヒステリーになつてしまつた。それでも文學博士になつたが、こんな學位に何の價値があるだらう。學問といふものが、さうした犠牲を拂つてもなすべきものであるならば、學問は下等な人間のやる仕事だ。

x
世間から鬼のやうに云はれて居ても、家族には非常にやさしい者がある。恐喝的なことをして私腹を肥す人

間が不思議に部下を可愛がるといふ例もきいて居る。

x
此の間世間を驗がしたピストル強盗が、親や妻に宛てた手紙を新聞で讀んだ。少しも悪人らしいところはな

x
い。却つて溢れるやうな眞情をもつて居る。
お初殺しの無慈悲な親が、川の中へ死骸を投げ込んだあとから、日頃お初の好んだあんパンを落してやつたといふことをこれも新聞で讀んだ。涙の出るやうな話である。

x
世間から悪の權化のやうに思はれて居る者、必ずしも絶對の悪人でなく、學者とか藝術家とかいふ美名の下に、かなりひどい利己的な残忍性が蔽はれて居ることを時々感ずる。

x
人間は結局あはれむべきものである。

(大正十五年二月)

永久動力

私は、此の話を非常に面白く感じて居る。併し、外の人々には、さう面白くないかも知れない。

人生といふものが一つの夢に等しい。その夢の中に、また夢を見て居る者がある。

夢の中に夢を見て居るのが、幸福であるか不幸であるかといふことは別に考へなければならぬ問題であるが、夢の中に夢を見て居る者を、外から見て居るのは、劇中の劇を見るの観がある、

文明といふものは、人間の夢を破つた。文明は幻滅であると、私はこれまで思つて居た。が、さうではなかつた。文明は古い人間の夢を破つて、新しい夢の中に人間を陥れた。文明は人間の夢を食ふ獲であり。人間を陶醉せしめる魔睡薬である。

人間は、文明から暗示を受けて、いろいろな夢を見て居る。これから述べる永久動力の夢などは、如何にも

物質文明の進んだ今日の人間がかゝりさうな夢である。

一昨年の夏頃であつたかと思ふ。私は武蔵野の森の中の家で、非常に面白い人に逢つた。それは世の中によくある發明狂とでもいふべき型の人物であつた。明けても暮れても一室の中に閉ぢこもり、機械の發明に腐心して居るといふ變はり者であつた。家には若干の財産もあつて、生計に窮するといふ程でもないらしかつたが、何しろ二十年以上も、家業のことなどは顧みないといふのである。今では實子が成長して立派な青年となり、家事一切の取締をして居るので、別に後顧の憂ひもなくなつたが、一時は随分困つたこともあつたと、其の弟といふ人から聞いた。

私がどうしてさうした人を見出したかといふことから先づ述べて行きたい。中野の郊外に移つてから、私は武蔵野の森といふものに深い興味を感じた。武蔵野も鐵道の沿線は盡く俗化して居る。高圓寺や荻窪は勿論、吉祥寺から國分寺邊まで、新しい所謂文化住宅と名のつく家が畑の間に建つて居る。併し、其の線路から十町もはいると、まだ往々古代の武蔵野を思はせるやうな森が、そこ、に續いて居る。私は、其の森を見る度に、何か神秘なものが其の中にかくれて居るやうな氣がしてならなかつた。かういふと、私自身が如何にロマンチックな心をもつた人間であるか、これを讀む者には想像がつくであらう。私自身も夢の世の中に夢を見

て居る者、否、夢を見やうとして居る者である。古代の姿を思はせる暗緑の森の中から、何かの神秘を見出さうとして歩いて居る中に、計らずも探し當てたのは、此の大きな人間の夢であつた。其の夢は、私等の想像もして居ないものであつた。

x

私は、熱心なかくれた發明家と數時間も對談した。濃厚篤實の文字を其のまゝ人間化したやうな好々爺であつた。話をきいて居ても、何となく穩やかなよい感じがした。私は、理學上の知識が非常に乏しい。機械のことはまるでわからない。併し、此のかくれた發明家が、永久動力の完成といふことに、二十年の間も心を碎いて居るといふことを辛うじて知つた。永久動力といふのは、一度び起せば、永久に続く動力の意味である。此の動力が發明せられるならば、吾人が、或る一つの齒車に力を加へて、それを廻轉せしめると、其の回轉が永久に消えないことになるのである。一度廻轉せしめた車の運動が止まるのは、空氣の摩擦や、其他種々の原因から來る。故に、其の原因を除けば、動力は當然永久に続く筈である——といふのが其の人の説明であつた。理論の上では確かに成功して居る。併し、實際がそれに伴はない。理論上の缺點はないつもりであるのに、實驗して見ると、車がよく廻轉しない。直に廻轉が止まつてしまふ。どこに間違ひがあるか、自分にはわからなくなつたけれども、もう一息で此の發明は成功すると、其の人は、確信のあるらしい斷言をした。

x

其の發明家は、私に數十枚の圖面を見せた。實に綿密なものである。數學の知識や、物理學の知識の乏しい私は、説明をきいてもわからなかつた。小學校も満足に卒業して居ないといふ人が、これだけのものを書き上げるやうになつた其の努力に感じ入つた。私自身が獨學者である。今まで自分の道を自分一人で歩いて來たので、かうした人の苦心といふものには、心から同情することが出來た。私は、また其の人の實驗室とも云ふべき物置に伴はれて、手製の車を見た。前には二三度本職の者に作らせたが、其の度に金がかゝるので、手製のもので試騒することにしたと云つて居た。車は粗雑なものであつた。たゞ木材をあつめて釘で打ちつけたといふだけであつた。併し、かなり大きな装置であつた。私は、人間の根氣といふものを恐ろしく思つた。

x

私が熱心に問ひたゞしたので、其の發明家は喜んでいろいろな話をした。さうして、此の永久動力の發明を思ひついた動機に及んだ。一種の宇宙觀が其の人の口から漏れた。其の宇宙觀は、私の宇宙觀（といふほどまとまつて居ない）と大分違つて居た。自然の形而上學と云つたやうな思想であるが、其の思想の中には、かなり甚だしい矛盾を含んで居たので、私は、一々それを質問して反省を求めた。其の人は、極めて謙遜な態度で私の言をきき、更に考へ直して見やうと云つた。尙ほ其の中に書いて送るとまで云つた。

其の發明家は、若い時に二つ三つ何か一寸したものを發明して專賣特許を受けた。それが病みつきとなつて、殆ど其の一生を發明の犠牲とするやうになつたと、はじめには外の人から聞いて居たが、たゞそのみが永

久動力の發明を思ひついた動機ではなかつた。或る宇宙觀が其の人の思想を支配して居ることを知つた。其の宇宙觀には、多少の錯誤があらうとも、科學的研究が無効になるわけでもない。

x

其の發明家は、最後にかういふことを云つた。

「若し、此の發明が失敗に終つたら、私は生涯を棒にふつたやうなものだ。私は、世の中のために何の役にも立たない此の世の穀潰しと云はなければならぬ。」

私は、其の考の誤まつて居ることを指摘した。人間の價値は、必ずしも結果の成否によつて決定しないこと、よし結果が全然失敗に終つても、人間の努力其のものは貴いこと、それは人生に何等かの暗示を與へることを語つた。其の人は頗る満足の面持で、私の一言に謝意を表した。

x

それから數十日を経た後のことであつた。私は、しばらく逢はなかつた友人を訪ねた。其の友人は、機械學の專攻者であつた。三箇年間、米國に留學し、先年歸朝したのである。私には、更にわからないが、或る専門の方面に於ては、かくれた一大權威として、識者の間に知られて居るといふことを聞いて居た。

私は、此の男が機械學の專攻者であるといふことから、ふと武藏野の中の發明家を思ひ出した。さうして、其のことを話した。すると、友人は笑つて、

「フン、永久動力の發明者か。」

と云つたとき、熱心に聞かうともしない。友人の話によると、永久動力といふものは、今日の物理學が存在して居る限り、到底理論的に成り立たないさうである。而かも此の永久動力の發明を夢みて居る者が、全國には幾百人あるかも知れない。友人がこれまで實際面談した者だけでも二十何人かの多きに上つて居るといふ。中には随分滑稽な者もある。指一本で釣鐘を鳴らしたといふ傳説的な昔話からヒントを得て、一寸押せば如何なるものでも動き出す筈だといふやうな理窟を考へ出し、それがために十年も十五年も苦しんで居る者がある。愚かな人間の努力である。さうした人間に限つて、頑固な迷信に支配されて居る。親切に注意してやると、却つて怒り出す。科學上の發明を、信仰から引き出さうとするのは根本から間違つて居るが、其の間違ひさへも氣がつかない。中には迷信に支配されない者も稀にある。それ等の者は、注意してやると感謝して歸るが、また間もなく同じことをはじめめる。つまり斷念が出来ないのである。永久動力は、人間の夢である。あの夢を夢みて居る者には手がつけれぬ。傍觀して居るより外はない。

友人はさう云つてから、

「それでも、若し、何なら自分を訪ねて来るやうに傳へてくれ、設計圖面を見た上、其の誤まりを指定する位ならいつでもよいから……」

と語りながら、永久動力が成り立たない理由を科學的に説明し、

「こんな問題は、中學校の生徒でもわからなければならぬ。」と笑つた。

x

私は、例のかくれた發明家に向つて、友人を紹介し、是非一度訪問するやうにと傳へた。其の后果して友人を訪問したかどうか、友人にも逢はなければ、發明家にも逢はないから、更にわからない。友人に逢はない方がよい。紹介しない方がよかつたかも知れないと私は考へても見た。老年になつてから、二十何年の夢をさますのは、悲惨なことのやうにも思はれる。友人が云つたやうに、一寸位注意しても、中々覺めない夢であるとするればよいやうなものであるが――。

かくれた發明家を送つて來た宇宙觀を書いた原稿は、今でも私の手許に残つて居る。こゝに抄録したいと思つたがあまり長くなるから止めた。

此の發明に失敗したら、私は此の世の穀潰したと云つた發明家の言葉を時々思ひ出す。

文明といふものは、絶えず人間に不思議な夢を見せる。所詮人間は夢の中に夢を見て終るものに過ぎないかも知れない。(大正十五年二月五日夜)

雜

囊

雜 囊

廢 都 の 秋

此の間、紙屑の中から、震災の時の歌が出て来た。小さい紙きれに、鉛筆でなぐり書きがしてある。

くづれたる帝都の秋の風さむし、大川端に鳴く蟲もなく。

焼あとに何をたづぬる、悄然と、さまよひながら力もなげに。

武藏野の昔しのぼる焼跡の、木の間に淡くゆらぐ秋の灯。

あはれ下谷、あはれ浅草、悉く、焼野が原と變はりはてける。

焼跡の停車場に入れば、疲れたる、人等集ひて汽車を待ち居る。

焼けたとれ黒すみ立てる電柱を、仰けば秋の空澄める見ゆ。

おごそかに秋空澄めり、人間が、苦惱にあへぐ十月の朝。

バラツクの屋根につめたく星ひかる、廢都の夜をなきてゆく鳥。

つまりない歌だと思つて、捨て、しまつたものらしい。併し、今日になつて見るとよい記念である。大震災のあつた年の秋のことが思ひ出される。まだ電車も通じない時、お茶の水で日を暮して、元町の坂を水道橋の方へ下つた。はじめて東京へ出て来た頃、其の坂で大都市の中へ沈んで行く夕日の影を眺めて、寂しい心地になつたことがあつた。その後、度々其處を通つたが、何とも思はなかつた。震災の時に歩いて居て、偶然、十二年前のことを思ひ出した。田舎から出て来たばかりの青年の眼に、強く映じた大都市の落日は、最も變はりはた情景となつて、今、自分の面前に現はれた。何れを見てもみな一面の焼野が原である。黒く燃えくすんだ電柱や、僅かに焼け残つた樹木が青澄んだ秋の空にしよんほりと立つて居る。昔の武蔵野の中へ迷ひ込んだやうな氣がした。「武蔵野の昔しのぼる焼跡の、木の間に淡くゆらぐ秋の灯。」は、たしかに其の時の作である。此の歌を低唱すると、其の時の自分の姿がはつきりと浮んで来る。歌の巧拙などは問題でない。これほどよい記念はないから、こゝへ書きつけて置いた。

秋風の歌

秋風！ 私にはこれほどなつかしい響を含んだ言葉はないのである。數年來、腸を痛めてから、夏の間全く何も出来なくなつた私は、秋風が立つと、急に元氣が出る。書物も讀みなくなり、ものも書いて見たくなる。

私はいつも夏の中から秋風を待ちわびて居る。

秋風！ これほど私にとつてなつかしいものはない。

私は歌が好きである。歌の中でも特に秋風をよんだものが好きである。秋になると、古今の歌集を取り出しては秋風の歌を味はふ。それが私には最も大きな楽しみである。

私は前にはよく歌を作つた。大正元年に上京してからは、全く歌に遠ざかつてしまつた。私の心が歌から離れたのではない。たゞ歌を作つて見る氣が出なくなつたのである。然るに、大正十一年になつてから、また歌作に興味が出た。毎日のやうに書き止めた。大正十二年の夏百首を得た。それを著書の中へ入れやうと思ひ、印刷所へ送つて置いて、九月の大震災にすつかり焼いてしまつた。僅かに雑誌へ出しておいたほんの一部分だけが残つた。その歌は文集「幻滅と思慕の生活」の中に入れて居る。

その中には秋の歌が多い。

秋の風、西に東にわかれゆく、雲と小鳥のかけの小さき。

これは玉川に遊んだ時の歌である。玉川の秋は近郊の勝地の中で、最も私を喜ばせたものの一つである。水の美しい玉川の濱に立ち、青空を遠く飛んでゆく小鳥のかけが、小さいきれぎれの白雲と離れるのを眺め、それが如何にも秋風のひびきに調和した情景であると感じて、此の歌を得たのである。十數年前、故郷の山間に秋の空を仰いで、

秋の雲、高嶺にわきて、空遠く、なきゆく雁のかけの小さき。
と歌つたことがある。同巧異曲の作である。

秋の風、吹きゆく野路のはて遠み、うす紫の螢草咲く。

これも玉川の秋である。黄色になりかゝつた稻田の畔や、または路傍に螢草が澤山咲いて居た。薄紫の花の色が可憐であつた。次に、

秋の風、忘れはてたる此の身をば、思ひ出でたる心地こそすれ。

といふのがある。これは私自身にとつて、最も感じの深いものである。夏の間忘れて居るやうな自分の身を、秋になるといつも思ひ出す。秋風は私自身に生命の意識を與へるものである。

秋は來ぬ、かなしきものをことごとく、あつめて見たき秋は來にけり。

遠く近く常に聞えぬものゝ音の、あまた聞ゆる秋風のなか。

此の二首は私が今日でも愛誦して居るものである。勿論、よく出來て居るものだとは思はないが、その中に潜んで居る調子が高く私の心に響くからである。

一 茶

一茶の百年が來る。一茶の句には、涙の底から湧き出た樂天的な人生觀が滲み出て居る。個性がはっきりと句に映じて居る點から云へば、古今の俳人中、第一に一茶を挙げなければなるまい。

われと來て遊べや親のない雀

有名な句である。一茶が六歳の時に口ずさんだものだといふ。恵まれない少年の孤獨な涙で一句の全體が濡れて居る。

終生不幸な日を送つた一茶は、世の中を冷眼視した。自然や人事を皮肉に觀察した。「おらが春」といふ名が一茶の一茶らしい特色をよく示して居る。

名月の御覽の通り屑家かな

多くの詩人墨客が、佳辭麗句を並べて賞め稱へた月にさへも、彼はかういふ皮肉を浴びせかけて居る。

きりぎりす聲が若いぞ若いぞよ

といふ句もある。

おらよりもいくら上手ぞ屁ひり蟲

に至つては頗る猛烈である。

一茶の句には皮肉や洒落が多い。併し、其の皮肉や洒落は、たゞの皮肉たゞの洒落と違ふ。皮肉や洒落の底に大きな同情の涙が潜んで居る。前の句を靜かに味はつて見れば、自ら其の心境に觸れることが出来る。

一茶ほど廣い人間愛をもつて居た者は尠ない。

息才でお目にかゝるぞ草の露

これは一茶が墓参りの時の句である。故人を思ふの情が溢れて居る。たしかに名句である。

小言いふ相手もあらば今日の月

生前にやかましかつた老妻を失つた年、名月に對して述べた感懷である。趣味も性格も全然違ふ此の老妻には一茶もかなり惱まされた。併し、なくなつて見れば、思ひ出すのが人情である。「小言いふ相手もあらば」といふところ、一茶でなければ出ない句である。

一茶は人間のみならず、またすべての生物にも、深い同情を注いだ。

秋風にあるいて逃ける螢かな

名句である。弱々しい秋の螢に對する同情がよく現はれて居る。六歳の時によんだといふ雀の句が思ひ出される。

わが味の柘榴へ這はす風かな

これは虱に同情した句である。「虱をひねりつぶさんことのいたはしく、また門に捨て斷食さすにも見るに忍びざる折柄、御佛の鬼の母にあてがひたまふと思ひ出して」と前置きに云つてある。

名利に淡泊な一茶の人格は、

何のその百萬石も笹の露

の一句に最もよくあらはれて居る。現世の名聞利達を幣履の如くに斥けてしまつたのが面白い。それがわざとらしくもなければ、負惜しみにも聞えないところに、一茶の面目が躍動して居る。

狂 俳

小學校長をして居る郷里の友人が來て、狂俳の話が出た。

「狂俳も今の中にまとめて置かないと駄目だ。」

と其の友人が云つた。私も同感であつた。

私は二三年前から、狂俳が地方文化として興味のあるものだといふことに氣づいて居る。少し暇があつたら調べて置きたいと思つて居た。

狂俳といふのは、三河と尾張を中心にして發達した詩の一種である。日本で最も短かい詩である。俳句よりも短かい。從來俳句は世界で一番短かい詩だと云はれて居るが、狂俳は俳句よりも五音だけ文字が少ないから、世界に於ける最短の詩は狂俳である。

狂俳はかなり古くからあつたものと思はれる。明治二十三年頃には、「登美久左集」といふ活字本の句集が、

其の地方の書店から出て居る。

私が高等小學校在學の頃、即ち明治三十年前後には、非常に流行したことを記憶して居る。私も盛んに句作をした者である。其の時分の巻本が未だ残つて居たので、郷里の自宅から取り寄せて見ると秀句として入選して居るものも少なくない。

狂俳は田舎の青年の娛樂として發達したものである。巻元即ち主催者が題を出して句を集める。集まつた句を宗匠の許へ持つて行つて選評をして貰ふ。日を定めて投吟者は一堂に集合して開封するのである。

狂俳は單に一地方の娛樂に過ぎないから、狂俳のことを書いた文献といふものは全然ない。偶々活字本はあつても、みな句集のみである。それ等の句集も、其の方面の消息通でない、編輯者の名さへわからないものが多い。

狂俳の巻本といふものは、今日でもまだ非常に澤山残つて居る。狂俳の流行した地方には、巻本の二冊や三冊河處の家にもある。古い豪家などには何十冊も保存されて居る。撰者即ち宗匠の家にも澤山ある。併し、長く大切に保存しやうと思ふやうな特志家は少なく、追々邪魔にしては、屑屋に渡したり、障子に貼つたりしてしまふから、一年毎に古い巻本は失はれてゆく。

また三河の地方を歩いて見ると、到る處の神社に、奉納額として狂俳の秀句が掲げられて居る。これ等の一句一句が悉く無名の平民詩人の力作である。

狂俳は今日でもまだ一部には餘命を保つて居る。有名な選者も少なくない。選者と云はれる者は、はじめ普通の投吟者から漸次實力を斯界の同好者に認められた人々である。

今日までに作られた句は、何萬、何十萬の多きに上ることであらう。其の夥しい句も端から湮滅してしまひ、僅かに残つて居る秀句も、何人の作であるかわからないものが多い。

狂俳には非常によい句がある。私の友人は、

(裾野) 糸ありたけの風低い

といふ句を賞めて居た。「裾野」といふのが題で、「糸ありたけの風低い。」が句である。狂俳は句が題の註釋になつてゆくのである。冠句又は前句といふ別名もある。冠句といふ名は他の地方にもあるときくが、それは三河地方の狂俳とは全く趣を異にして居るさうである。

蝶高ふ飛ぶ日や低ふ見ゆる富士

といふやうな俳句があつた。前の裾野の狂俳と作意が類似して居る。併し裾野の句の方が自由でゆつたりとして居る。俳句に比較すれば、狂俳は同じ季題でも、著しく碎けたよみ方をする。加之、俳句にない雜題とい

ふのがあつて、世俗的な新聞種などをよむ。此の邊は川柳に似て居る。狂俳といふ名の起りも大方は想像される。

最近に二三の友人を煩はして、狂俳に関する資料を少しばかりあつめた。日本文化の研究の一部として、まとめて見たいと思つて居る。(大正十四九月八日)

斷 想 錄

夏のおもひ出

夏から秋のはじめまで、例年のやうに全く活動力を失つてしまつたので、毎日、見るものと聽くものを探し求めて歩いた。大東京市の隅から隅——といふとや、誇張になるが、とにかく、何か面白いもの、何か眼と耳に快感を與へるものはないかと、毎日出歩いた。淺草と銀座の空気を今年ほどよく呼吸したことはない。上京してから、十何年になるが、私は、東京市の中で、最も都市の情調を豊かにもつ淺草と銀座については、殆ど無知であつた。七八年も外國に居て、外國のことを更に知らない人があるといふことを時々きくが、十何年も東京に居ながら、私は、都會の情調といふものを、少しも知らずに居たのである。私は、どうしても都會人にはなれない田舎者で、田舎の自然をなつかしみ、田舎の人を親しく思つてばかり居るのであるが、純粹の都會情調といふものも、また捨てられないと、今年はじめに熟く感じた。

淺草の天地のもつ魅力、それは此の夏私が最もよく體驗した所である。此の體驗は、貴重なものであつたと私は信じて居る。淺草を慕ふ一團の人々の間に、時々會合が催されることを、よく新聞で讀んだが、今度さうした會があつたら、會合の嫌ひな私も是非出たいと思ふ。淺草は俗化した土地である。此の俗化した土地に含

まれたる魅力、恐らく此の魅力は、大正の今日ばかりでなく、明治の初年にも、江戸時代にも潜んで居たであらう。八百八町のいづれのはてにもない怪奇な夢の色とひびきとは、今日よりも明治の年間、明治の年間よりも江戸時代の方が、更に一層濃厚であつたことであらう。あれをたゞの俗悪の巷としてのみ見るは、くだらない戯を負ふ没趣味——と云はんよりも非藝術な心をもつ者である。

尤もまだ浅草についての私の観察は、非常に上すべりのしたものだといふことを自覺して居る。私は、至つて臆病な性質であるから、徹底した観察の出来ないものが多い。或る時には、ベンチに横はつて居る労働者の群と、話して見たいと思ひ、或る時には、露店の商人のことなどを調査して見やうとしたが、いつも面倒になつては中途でよしてしまつた。カフェー等に出入するだけの勇氣は全然ない。たゞ興行ものだけは根氣よく見た。喜劇役者の下廻りから、安來節の女藝人までみな名をおほえてしまふほど、熱心にも好きに、これこそほんたうに隅から隅まで見て、もう何も見るものがなく、見たいと思ふ興味もなくなるまで見た。

活動寫眞に陶醉して居る學生、無知な安來節の定連、それ等にもみな深い親しみを感した。人の世が夢であることや、夢の世が一つの旅であることを、いろいろなものがあるいろいろな姿をして、私に教へてくれた。池をめぐるともし灯。ともし灯の中にどよめく群集。群集の中に交る自分の姿。意味なきものまでが意味あるやうに思はれた。大道の夜店に、明治初年の浮世繪や、紅葉や露伴や、もつと前の黙阿彌ものの草双紙類などを見出したのも、私には興味が深かつた。

浅草に関する文献をあつめやうと思ひつた。いつもの僻がかうしたところへ頭をあげて來た。友人を頼んで仲見世や凌雲座の寫眞を撮つて貰つたり、古本屋あさりをはじめて見たが、その文献はあまりに多いので、迷つて居る中に秋が來た。

秋になつたら體力が回復して、讀書欲が盛んになつた。外へ出る興味がなくなつた。以來、浅草へは一度も行かない。

文樂の人形

今年の夏には、人に誘はれて、歌舞伎座で、文案の引越人形を見た。夏から秋のはじめまでに見たものの中で、最も面白く感じたものは、それであつた。

文樂の人形に就いては、當時種々の人々から批評や感想が出た。

私は、またこゝで批評などをしやうと思はない。たゞこれだけのことを云つて置きたい。文樂の人形を見て、はじめて淨瑠璃の面白さを感じ、歌舞伎芝居の妙味を悟つた——と。

私は、淨瑠璃があまり好きでなかつた。歌舞伎劇は最も嫌ひであつた。併し、人形の踊と、人形の踊に合せて唄ふ義太夫は、あのわざとらしい仰參な表出も、特に誇張した抑揚も、さまで不自然でないのみならず、却つて天真の美しい輝きを思はせた。

淨瑠璃や歌舞伎劇は、人形のものにして置きたかつた。腐肉の持主の人間のものにしたのは惜しかつた。

江戸文化

日比谷圖書館が中心になつて、三越呉服店の樓上で、前後二回、江戸の文化に關する展覽會を開いて呉れたのも、此の夏に於ける大きな慰籍であつた。

四世鶴屋南北關係の芝居繪展覽會は、會期中に三度も見に行つた。私は、南北を偉大な藝術家だなどと思はない。私の藝術觀——といふほどまとまつては居ないが——から見れば、あゝいふものは、徒らに人の好奇心をひく俗惡藝術の圓熟したものに過ぎない。坪内逍遙博士が、南北を偉大な藝術家として尊敬する心は起らない。あゝしたものをシエークスピーヤに比較しなければならぬ過去の日本の藝術をさびしく思ふだけである。南北は才人であつた。才人たる點は如何なる讃辭を呈してもよい。今年はどうしたわけか不思議に南北がもてはやされ、芝居や映畫に、「四谷怪談」や「累」が盛んに出たのゑならず、南北の脚本集類も二三現はれた。伊原青々園氏の話によれば、昔から夏は怪談芝居が流行るものださうであるが、今年のやうに南北がもてはやされるのは、奇態な現象と思はれる。南北に對して、特別の興味をもつて居る譯ではないが、古い芝居繪のやうなものを見るのは面白い。これが懐古趣味といふものであらう。

東京文化展覽會には、江戸の音曲に關する笹川臨風氏の講演があつた。その講演をきくために出かけたが満員ではいれなかつた。私は極端な講演嫌ひである。他人の講演をききたいと思つたことは今までに一度しかない。上京した當時、三宅雪嶺博士の講演をききたいと思つただけである。それは、講演がききたいよりも人間が見たかつたのかも知れない。いつでも講演がはじまると私は逃げ出す。テーブルスピーチなど、一分間も辛抱してきて居られない。一種の病氣かも知れない。笹川氏の講演をききたいと思つたのは、それが江戸の音曲といふ趣味のあるものであつたからであるが、近ごろ私としては破格なことであつた。

東京文化展覽會では、軟派文藝に關するものだけが面白かつた。其の外のものは見てもわからない。従つて、少しも興味が起らない。廣重の版畫の如きものもよかつたが、明治の初年の風俗をうつした色々の錦繪は特に面白かつた。また黄表紙なども、今までに時々實物を見ては居たが、「金々先生榮華の夢」とか「鼻が峰高慢男」とかいふ有名なもの二十數種が並んで居るのを見るのは、甚だ珍しいことに思はれた。

東京文化展覽會も二度見に行つた。もう一度行きたいと思つて居る中に會期が過ぎ去つた。

民謡と郷土舞踊

日本青年館の開館式には、三日間、民謡と郷土舞踊の餘興を催した。面白い計劃であると思つた。

選ばれた民謡と舞踊は八種であつた。川越の「獅子舞」や越中の「麥屋踊」は、勿論、非常に特色のあるもので

あるが、私は、それよりも岩手の「牛追ひ唄」を一番面白く聞いた。「獅子舞」や「麦屋踊」は、數十人の人が出て、笛や太鼓や其の外いろいろな楽器を入れ、賑やかに見せ、賑やかにきかせるから、人の耳目を惹きやすいが、「牛追ひ唄」のやうなものは、たゞ一人牛をひいて出て唄ふだけであるから、かうした大きな講堂へ持ち出し、三千人の聴衆の前で演ずるには、餘りに淡泊過ぎて注意をひかないといふ弱味をもつて居る。殊に、前の二つが三十分もかゝるのに、これは數分ですんでしまふ。それにも拘はらず、概して好評を博した。その言葉、そのリズム、すべてが東北の田舎をおもはしめるなつかし味の含まれたものであつた。「虚空鈴慕」と佐賀の「面浮立」は残して歸つたが、其の他の「江州音頭」も、宇治の「茶つみ唄」もよかつた。「江州音頭」は乃木大將のことうたつた新作であつたが、音頭そのものの特色がよく現はれて居た。宇治の「茶つみ唄」は、あまりに單調であるが、捨てられない趣があつた。

たゞ一つどうしても感心の出来ないものは「越後追分」であつた。これはない方がよかつた。越後追分といへば、追分節の一系統として昔からかなり有名なものである。或る人は、淺間の馬子唄が北國の商人によつて傳へられ、越後の方へ出て来て、しばらくお座敷に止まり、それが海を渡つて北海道へはいつたといひ、或る人は、アイヌの方から發祥した松前の追分が、越後へ移入したのであると云つて居るが、事實はわからない。わからないところに民謡の面白味はある。何れにしても、越後の追分は、信州の馬子唄や、松前江差の船唄と並んで、非常に特色のある民謡でなければならぬのに、青年館の演技に出た越後追分は、何の特色もないもので

あつた。これが、果して越後に傳はる正系の追分節であるならば、越後追分は民謡として何の面白味もないものである。

其の唄の詞の一節を擧げて見れば、(前唄)枚を衝みて犀川涉り、大刀を翳して研りこめば、流石の敵も遠く逃れて、川中島の霧晴れぬ。(本唄)春日神山晴れゆく雲に、旭照りそふ松の色——とある。如何に考へても、此の歌詞が民謡としての佳作だとは思はれない。かうした歌を作つて青年にうたはせるのも、若干の修養にはなるかも知れないが、それは追分節と離して考ふべき問題である。此の歌に調和した詩吟の譜か何かで唄はせたらよからう。歌詞が悪いだけならまだいくらかの生命はある。民謡は曲節によつて生きるからである。乃木大將のことをうたつた歌詞は、あまりよく出来て居ると思へないが、節が面白いために、江州音頭の方はまだよかつた。越後追分は節も死んでしまつて居た。どの追分節にも含まれて居る地方特有のうるほひをもつたりズムは全く枯れ、氣取つた厭味のある合唱のみが耳に残つた。馬鹿に可憐なお辭儀をしたり、變な恰好で扇子をひらいて見たり、うたひはじめに右の方に一寸頭を轉じたり、何のための作法か知らないが、滑稽な型を定めたものである。揃つてうたつて居る聲をきいて居ると、小學校の唱歌の練習といふ有様である。内容に於ても形式に於ても、全く取り所のないものだと思つた。

これが越後人のお國自慢とする眞の追分であるかどうかを、私は非常に疑つて居る。當日配布の小冊子によれば「今回の越後追分は、とにかく昔から越後に傳へられた節調を、中島信玉氏が手を入れた所謂信玉派越後

追分節で、前唄と稱するのが俗にいふ追分節、本唄と稱するのが、俗にいふ松前追分です。歌詞は春日城下の軍人・青年兩會長の春城山田吉治郎氏の作であります。」とある。

従來の追分に手が加はつて居るならば、改作者はかくして地方人の趣味を俗化せしめた責任を感じなければなるまい。(大正十四年十月二十七日)

身邊雜事

友人の著書

よい友人をもつのは、幸福なことである。此の點だけ、時々自分は學校の出身者を羨ましく思ふ。例へば、高山樗牛でも、網島梁川でも、勿論それは其の人が優れた思想家であつたには相違ないが、また周圍をめぐる友人といふものが非常によかつたといふことを感ずる。先輩や友人を頼りにして、世俗的な功名利達をはかるやうなことは感心しないが、よい友人の間に居るのは、空氣の淨い天地に住むと同じである。自分の思想が知らず識らずの間に淨化され、生長して行く。非凡な才能を有する者は、其の才能が更に一層銑練され、平々凡々、放任して置けば世の中の厄介者となる底の人間でも、或る程度までは進歩する。

學校の出身者は、概して良友を多くもつて居る。獨學者にはよい友人といふ者が少ない。よい友人を求めることが困難である。殊に、自分のやうに交際を求めて歩かず、引つ込んでばかり居る者には其の感が深い。それにも拘はらず、割合に自分はよい友人を多くもつて居る。これだけは實に幸福なことである。

人格の上に美點をもつて居る人は、みな良友たるを失はないが、學問や知識の上(外の方面のことはこゝに云はない)から云ふと、早稲田大學の松永材氏、廣島高等師範學校の長田新氏、弘前高等學校の三浦圭三氏等、

何れも自分にとつて非常に貴い友人である。松永君は始めて上京した當時、十三年前からの知友であるが、長田・三浦の兩君は、二三年來、種々の關係で書信を往復したり、上京の際會談したりして居る位のことであるから、これは畏敬すべき知人と云つた方が適切かも知れない。知識と云ふものは程度の問題である。更に一層進んだ知識の者から見たらば、また變つた意見も出るであらう。併し、自分は、粗ぼ同年輩の人の中で、此の三君からは、常に種々の示唆を受ける。自分は、これまで度々明言して居る通り、學者にならうと思つたこともなく、また學者になれない素質をもつて居る。自分は操觚者として終始したい心願である。従つて、操觚者の職能と地位とをよく自覺して居る。併し、自分がさうした道を歩いて行く者であるからとて、眞摯な學究的研究を輕んずる程浮薄な人間ではない。加之、操觚者といふものは、或る場合には學究の徒であり、或る場合には藝術家であり、或る場合には思想家であり、或る場合には教育家でなければならぬと思つて居る。動もすれば、頭腦が空疎になり、末梢的な感覺的な雜文を書いたり、下らない小説を書いたりして、有頂天になりたがるのが、古今東西を通じた操觚者の缺點だと云ふことを、最もよく辨へて居る。頭腦が空疎になりかゝり努力の心が弛んで來た時に、自分を鞭撻する者は、學究的に精進して行く友人の態度である。いつも自分に何等かの示唆を與へる友人をもつことの幸福な理由はこゝにある。これ等の人々は、また揃つて人格者である。人格者といふことも解釋によつては異論が出やうが、兎も角、信賴の出來る重厚な人である。殊に、松永君や三浦圭三君には、度々いろいろな迷惑をかけるが、それがために平素と變つたやうな態度も示さず、何事も寛恕

して咎めない。

所で、松永君は、今年の夏から着手して、「ショーペンハウエルの哲學」と云ふ千枚以上の著作を完成し、近く發行されることになつて居るし、三浦圭三君は、最近「綜合國文學概説」と題し、千頁以上の大なる研究を發表された。自分は、此の兩君の力作が出ることに非常な喜びをもつて居る。殊に、三浦君の此の大作が出るのは、先年、自分が君の原著「綜合日本文學史」の原稿を文教書院へ紹介したのが機縁となり、國文學を概括的に叙述したものを、起稿することを、君にすゝめたのが動機をなしたのである。此の書の出版に就いては、思はぬ行き惱みを生じ、三浦君にも迷惑を及ぼしたが、此の大きな收穫の動機をなしたことは快心に堪えない。此の書は、近來の出版界に稀有の大著述であるが、國文學に興味をもつ人々には是非讀んで貰ひたいと思ふ。前の「綜合日本文學史」と比較すると、全然また變つた方面から國文學を觀たものである。前のは縦の研究であり、後のは横の研究である。而して、後の方には著者の獨創が大分加はつて居る。其の獨創は信用の出來ないやうな附會でなく、吾人の蒙を啓き、興味を惹起せしめる點が少なくないのである。大學を出ても、「萬葉集」や「源氏物語」の講義しか出來ない者が多いとき。三浦君の如き研究を發表する者が、獨學者の中から出たことは愉快である。古典の棒讀講義や、古本詮索より外に能のない學校出身者は、自分の能力をも顧みず、往々かうしたものを默殺したり、冷評を下したりしたが、最後の勝利は實力の所有者にある。

三浦君の大著述が私の手許に着いた日に、長田君から、「ナトルプに於けるベスタロッツの新生」「道德及び宗

「教育の本質」と云ふ二書の寄贈を受けた。前のは、ナトルプのペスタロッチ觀を批判的に紹介したるもの、後のは、ペスタロッチの著「ゲルトロードは如何にして其の子を教ゆるか」の一節を抄譯せるものである。此の二書は少し前に出たので、既に多くの人の知れる所である。改めて書物の紹介をするにも及ばないことと思ふが、たゞ一つ自分を非常に感動せしめたことだけを記録して置きたい。それは、長田君のペスタロッチ研究に關する熱心の度である。ペスタロッチに私淑し、其の思想や人格に敬慕の念を拂つて居る人は、枚擧に遑なき程多數に上るであらうが、長田君の如く熱心な研究者はないと思つた。長田君のペスタロッチ研究熱の旺盛なる、ペスタロッチに關する文献は、悉く蒐集して、其の思想及び人格を偲ぶ資料とすべく努力されつゝある。それがため自分か所持する古本まで、熱心に懇望せられたので、自分は喜んでこれを送呈した。此の些細なことを長田君は非常に喜び、同時に自著を寄贈されたのである。自分は、曾て長田君の印象を書いて、實際教育家より教育學者に適する人と云つたが、今から考へて見ると、長田君は矢張り全人的な教育者だと云つた感じがする。學にも通じ、實際にも興味を有する、少なくとも全人的な教育者の素質を有する人のやうに思はれる。勿論春秋に富める人のことであるから、前途どう變るかはわからない。

かう云ふ事情を知つて居ると、他人の著書に特別な尊敬の念も起り、興味も湧く。自分も記念として此の二書をながく保存したいと思ふ。

自分の著書

今年の秋から、來年の春へかけて、自分の著書が澤山出るやうになつた。一度に書いたのではない。今までものが一しよになつたのである。

今度、帝國教育會の編輯部で、簡單明瞭な教育講座の叢書を出して見たいと思ひつた。今の哲學や倫理や教育に關する書物は、あまりに不得要領すぎる。不得要領なものを意味の深遠なものとする程の惡頭なら結構な次第であらうが、さうでなければ、手に取つて讀む氣になれない。それでは、哲學・倫理・教育の書物は、むづかしくて誰にもわからないかと云ふと、さう云ふ筈のあるべき道理がない。外國の書物は、靜かに見て居るとよく意味が徹底するが、日本の書物にはどう考へてもわからないものがある……とは讀書家の口から常に漏れる言である。これは、日本語の不完全にも原因するが、外にも種々の理由がある。或るまゝまつた基礎的問題を組織的に解説したもの、最も徹底的に意味のわかる書物、それはいつの世の中にも必要である。明治の先覺者はえらかつた。今でも外國にはトムソンのやうな達識な士もある。編輯部で考へた叢書も、目的は教育者に必要な基礎的知識を最も明晰に叙述することにある。自己の博學を衒はんがための著書ではない。

編輯部で右のやうな計劃をして見ても、今日の狀態では、到底多額の原稿料を拂つて全部を依頼するわけにいかない。そこで、自分が三四冊を擔任することになつた。自分の力に適したものを選んで力を注ぐことにし

た。其の一つが去月出た「精神科學派の哲學及び教育學說」である。此の仕事は、自分にとって甚だ苦しかった。併し、自分がこれに興味をもつたのには理由がある。自分は、近く「教育新學說の基礎たる現代哲學大綱」を出し、續いて、明年中に、其の姉妹篇として「現代藝術大綱」を公にするつもりである。それがために種々の書物を精讀した。自分の多讀的性癖は、厭く所なく諸方面に伸びて行つた。「現代哲學大綱」は、近代の哲學の全般を最も體系的に叙述して、教育との連接を示さうと試みたものであるから、現實主義の哲學と理想主義の哲學を二大系統とし、あらゆる學派の分岐に及び、精神科學派の體驗主義は、特に一篇を設けて略述することにした。且つまた「現代藝術大綱」をまとめる準備として、種々の人々の藝術觀を涉讀して居る中に、特殊の藝術觀を有して居るディルタイに注意せざるを得なかつたのである。かゝる理由により、興味をもつて此の一卷を叙述した。それには友人から多くの教示を仰いだ。

編輯部で出すものに、自分が書かなければならぬことは、非常に苦痛である。雜誌の原稿でもさうである。今の「帝國教育」は、原稿に費す金額があまりに貧弱である。今日の時勢とかけ離れて居る。これでは到底編輯が出来かねる。併し、種々の事情により當分の中此のまゝで繼續しなければならぬとすれば、毎號二三十頁は原稿料のいらぬ記事を以て埋めなければならぬ。それに適當なよい記事のない時には、編輯者が自ら何か書かなければならぬ。自分が時々秃筆を呵して數頁又は十數頁を埋めるのもさうした事情によるのである。自分は本誌へ堂々と教育の意見などを發表しない。いつも隨筆や感想文だけ書く。教育の意見は諸大家のものを掲

けておけばよい。最も不足して居る雜文を書いて、雜誌にいくらかの面白味を添へたい位の程度である。かゝした編輯者の苦衷は、いつも世間から惡意をもつて報ひられる。

自分は、「西洋倫理學史」を書いてから、今日までに七冊同じ性質の著書を公にした。これは、いつも序文にことはつておく通り、現在の諸書を参照し、自分の頭腦で消化したものを、最も明瞭に表現しただけであるから、眞の意味の研究とは云はれない。(尤も現在の書は堂々たる大家のものも大概は同じものである。而かも、それを一かどの研究のやうに見せたのが多い。)自分は、早くかうしたものを避けて、特殊な研究を完成したいと常に願つて居た。然るに、また今度同じ性質の著書即ち「現代哲學大綱」を出し、其の補遺ともいふべき意味で、「哲學を基礎とせる現代の三大教育學說」を出すことになつた。併し、よく考へて見ると、此の種の著書を出すことも無意義でない。書物と云ふものは種々の目的をもつて居る。必ずしも奇抜な愚説を吐くばかりが貴くない。つまらない獨斷は却つて世の中を害することもある。獨逸の啓蒙時代には通俗哲學者といふものがあり、江戸時代には心學者といふ者があつた。彼等の事業も相當に世の中を裨益した。心學者の遺著の中には、官學者などが書いた四角四面な儒書の註釋より、後世に生命をもつて居るものもある。自分の如く學校に全然關係のない者、將來とても講壇に立たうと思ふ意志のない者は、紙上の講義として、絶えず繼續的に從來のやうなものを書いてゆくのが、意義のないことだとは云はれない。自分は、明年から、學校の教壇へ立つて講義する覺悟で、毎日の二三時間を倫理・教育關係の著書に従事し、其餘は特殊研究に費やし、時々これを發表した

い。また年來の希望たる興味中心の研究や創作にも没頭してゆきたい。それは、決して矛盾したことでもないやうに思はれる。相俟つて自己が擴大されてゆくことを信ずる。

學校の講義に比すれば、從來の自分の著書の如きは、非常に優れたものであることを信ずる。「日本倫理學史」でも「倫理學說精義」でもさうであるが、あれだけの苦心をして一つのをまとめ上げ、それを教壇で講義して居る者が幾人あるであらう。一般的の講義の臺本としては、如何に苦心するとも、あれ以上に出來るものではないと確信して居る。材料の選擇やまとめ方もさうであるが、叙述の方法に於ては殊更に其の感がある。自分は決して耳ざはりな文字を使はない。一つのセンテンスに同じテニオハなどを重ねると不快を催す。それまで細かい苦心をして、毎日の講義をして居る者は、天下に一人もないことと思ふ。

雜 信

愛媛縣の某氏へ

しばらくおたよりもなく、如何お暮しの御事かと案じて居ました。其の後も依然として浪々の御生活を御繼續の由承り、私は深く貴下の御身上を憂慮して居ます。時は公平な審判者だと云ひますが、今から考へて見ますと、前の貴下御奉職地郡視學の言には不審の點が多く見出されます。眞實の事情はわかりませんが、私は少なくともかう斷言することを彈りません。貴下の言には直情徑行な正直さが現はれて居るが、郡視學の言はどこかに濁つたところがあつた。老猾な嫌疑が含まれて居た——と。

まだ一度も拜眉の機會を得ないのですが、度々の御書面により、貴下が今日の教育者中には珍らしい特色を有して居られる方であることを想像して居ます。さうした才能ある貴下が、今日の如き窮境に立たれたことを、

私は非常に不審に思ひます。貴下を容れることの出来ないほど、今日の教育界が狭量であるか、それとも到底今日の世の中に容れられない缺點(私等の知らない)を貴下がもつて居られるのか、私はそれを判断しかねるのです。私も我儘な點に於ては、中々人に劣りません。時には自分ほど人と調和の出来ない性格をもつた者はないと考へることがあります。所詮世の中と調和して行くことが出来なければ、獨歩の道を拓いて進むより外に思案はないと思つて、只今ではその決心をして居ます。さうした人間にさへも天地の恩恵はあるのです。乏しいながらも、一家のものが生計を立て、行き、少しは讀みたい書物を買ふ位の餘格もあります。私は此頃しきりに天地の恩恵に對して感謝の念が湧いて來ます。今まではかなり世の中を呪ひましたが――

私は貴下から、一家離散とか、友人の家に厄介になつて居るとかいふ御たよりを受ける度に、貴下の御境遇に對して、厚い同情の念が起ると共に、貴下の如き才能のある人が、それまで窮境に立たれることを不審に思ひます。たゞ貴下の方に運命が冷酷であるのでせうか。私はたゞ研究といふやうな名の下に、自分ひとりが世の中に背くはよいとしても、家族まで犠牲にするのは悲惨なことだと思ひます。私は世の中に妥協して個性を没却してしまへとはす、めかねますが、貴下がもう少し自己及び家族の生活の安定をはかるために努力せられ、其の問題を解決した後、益々自分の特色を發揮し、悠々研究に没頭せられるやうな道はないものかと、たゞそればかりを考へて居ます。尙ほ貴下の研究問題等についても、いくら卑見はありますが、昨今、何かと忙しいので、これにて失禮します。(五月七日夜)

北海道のS氏へ

御書面を拜讀しました。實に驚きました。亂暴極まることです。十三年間勤続の教育者を、無斷で轉任させるなどといふのは、不都合千萬な話です。而かも、辭令を郵便で送りつけるといふに至つては、言語同斷の至りと思ひます。常に貴下の御通信を見て、地上の仙境の如く想像して居た北海の山村にも、さうした空氣が流れて居ましたか。世の中は住みにくいものだ、いつも私は感じます。住みにくいからとて、世の中を離れて生活することも出来ません。「人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。矢張り向う三軒兩隣にちらちらする唯だの人である。唯だの人が作つた世が住みにくいからとて、越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は人の世よりも猶ほ住みにくからう。」と「草枕」のはじめに云つた漱石の言が思ひ出されます。畢竟世の中といふものが、大方そんなものであると悟つてしまへば、あの文句はなくなります。しかし、教育者の地位がさう輕んぜられて居ることは憤慨に堪へません。私は貴下のお手紙を再三再四反覆して讀みました。さうして、貴下が突然無法な辭令を受取られた時の心持と、十三年の間住み慣れた村を、多くの人々に送られて去り行くときの光景を心の中に描いて見ました。それはみな悲壯な詩だと思ひました。正

しい人間を苦しめるやうな不正なことが、世の中にあるのを、私はどこまでも呪咀する者です。徒に運命に盲従するのは、世の中に不正を増長せしめる所以であります。教権を侵害する暴力に抵抗する必要を認めます。何かの方法にとつて、かうした事實を公にすることは出来ずまいか。北海道ばかりでなく、天下に充滿して居るものと認めます。小學校教員の地位が、かくの如く輕視せられて居て、眞の教育の行はれる理由がありません。今度の轉任が貴下の將來にどんな幸福を齎らすか、それはわからないのです。最も不幸であると思つたことが、後になつて最も幸福になることはいくらもありません。或る宗教家に云はせたら、すべては神の意志でせう。此の世に於ける苦惱は、神が人間に與へる責罰ではなく、尙ほ一層幸福な生活に導くための過程だといふでせう。將來が幸福であるか不幸であるかを問はず、私は教育者を一枚の辭令で自由に動かすやうな惡辣な權力の存在を呪咀します。

エハガキを拜見して、今度の任地が風光の明媚な所であることを知りました。それを私は羨しく思ひます。いつも田舎の風物にあこがれて居る私です。峨々として聳えた山、暗く茂つた林、飛沫の白く碎け散る瀧、其の美しい山水が私にいろいろなことを思はせました。人の世には汚ないものがありますが、神の造つた自然は永久に清らかです。私はあのエハガキを毎日出して見ては、遠く新任地にある貴下を偲んで居ます。

(五月十二日)

山梨縣のM君へ

本日、貴翰拜誦、無量の感慨にうたれました。私は今夏もまた例年の如く、毎日無意味な日を送りました。一頁の讀書も出来ず、手紙一枚書く氣になれず、月餘を遊び暮しました。昨今いさゝか加はつた冷氣にやゝ元氣を恢復し、本日は珍らしくも漱石や露伴のものを取り出して讀みはじめました。そこへ貴兄の御手紙が届きました。遠く別れて居た友人の消息を突然きくやうな喜びと親しみをもつて、反覆精讀いたしました。

貴兄の御芳名を知ること、私にとつてもまことに久しいものであります。「文章世界」の投書は短かい小品文までも記憶して居ます。貴兄の文字が「評論」誌上に現はれるやうになつてからも、私は常に注意して讀んで居ました。「文章世界」と「内外教育評論」これは私等の青年時代を育成してくれた搖籃です。私は上京以後も此の二雑誌だけは特別の愛着をもつて讀みました。然るに「文章世界」はあゝした終焉を告げてしまひ、「内外教育評論」もまた今回同じ運命に陥りました。尤も私は三四年前から「内外教育評論」と遠ざかつてゆきました。時々寄贈雑誌の中から拾ひ上げて見る位の程度になつて居ました。

貴簡を精讀して、私は慚愧の念と羨望の感とを生じました。貴兄の如き天分の豊かな人が、地方に止まつて

眞摯な實際教育に従事して居られるのに、才能もなく自信もない者が、東京の市中でかうしたガラにない文筆生活をして居るのは何といふ皮肉なことでありませう。私はもと實際教育家たらうとして失敗し、實際教育界から見限され、遂にかゝる沖合へ吹き流されたいはば漂流者でありますから、さう考へて見ればいたし方ないものかとも思ひます。

私は自分の生活を反省する毎に、つまらないといふ氣が起ります。過日も××君が上京せられた時、話のついでに東京の生活はよいであらうと云ひましたから、私はそれを否定しました。物質的な欲望や世間的な名譽心の強い者には、都會生活もよいでせう。併し、野心もなく權勢名利も念頭にない者に、都會生活は全く無意味です。私は却つて××君のやうに地方の學校に奉職し、氣長に文學史でも研究して居る人を羨しく思ひます。用もないのに都會生活をして居るため、色々の苦惱が増すばかりです。第一、私には周圍の空氣と調和が保つて行けません。田舎に居る時にも幸福な生活ばかりはありませんでしたが、昨今ほど惡臭ある零團氣に包まれては居なかつたやうに思ひます。

私は都市の生活に不調和な融通の利かない人間です。都會生活などは大がいに切り上げて田園に歸つた方がよいと思ひます。しかし、また考へ直します。どこへ行つたとて、私の如き我儘者を容れてくれる天地がありさうにも思はれない。私は永久に孤獨であるべく生れて來た者であるやうな氣がします。さうして見れば、現在の境遇に於て自分の力に適することを行くより外はないのです。山の中へはいらばかりが悟道の要諦

ではない、市井の間に居ても大悟することの出来ない筈はあるまいと考へるやうになりました。私の全力を擧げてかゝる仕事はたゞ書くことと思案することあるのみです。此の意味で私は純然たる操觚者で生涯を終るべきものかと思ひます。輕薄な追従も姑息な妥協も出来ない私には、天分は乏しくとも自分の氣に入つたものを讀み、自分の氣に入つたことを書いて行くより外に私の生きる道はないことを悟りました。

私はこれまで自分の辿つて來た跡を反りみてさびしく思ひます。多くの人は私の今の年輩までには、かなりの仕事をして居ますが、私は操觚者を以て任じながら、まだこれといふものを一冊書いて居ません。僅かに初歩の學生の参考書を數冊書いたばかりです。それも多くは生活に追はれて餘儀なく執筆したもののみです。自分の業績を耻づると共に、私はこれまでいろいろな空想を描きました。或る時には思ひました。生涯の中には少くとも一冊位は學界に貢獻するやうな研究を發表したいと。また或る時は思ひました。學問よりも藝術の方が有意義であるから、せめて一篇の創作位は残したいと。併し、今ではさうした考をすてました。さうした考で學問や藝術を弄ぶのは、一種の陋劣な虛榮心に過ぎないと氣づきました。必ずしも學術的な論文でなくても、また創作でなくても、何でもよいのです。斷片的な感想文でも、または一首の和歌でもかまひません。びつたりと自分の心境にふれて行けば、それで澤山です。世間がそれを黙殺しやうと惡評しやうと顧慮する必要はないと思つて居ます。生活のために學生の参考書を書いて、それに自分の誠意と熱情が加はり、そのものに自分の片影が映じてゆけば、自分の生命の一部として愛着しなければならぬものと思ひます。かやうな考へ

から、私は最近に至りかつて匿名で出したやうなものにまでみな自分の署名をしました。

文學等に關する意見も今では大分變りました。かつては創作のみを有意義な仕事と考へた事があります。創作の中でも自分の周囲の事を眞剣で書いた自然主義的のもののみを貴く思つた事があります。しかし、今ではさうした偏狹な考をもちません。外國の古曲劇にも趣味をもちます。過般東京へ來た文樂の人形の如きも面白く感じました。今月の「改造」へ出た露伴の「蒲生氏郷」なども感心してよみました。徳富蘇峰氏の「近世日本國民史」にも敬意を表して居ます。以前はつまらない餘技のやうに思つたこともある俳句も、それに徹底すればよいと思ひます。

貴兄からの御書面を非常にうれしく思ふのあまり、とりとめもないやうな感想まで書いてしまひました。私は昨今右のやうな氣分で日を送つて居ます。貴下とは境遇も違ひますから、考も大分相違する事と存じますが、何等か熱情を以て自己の姿を正視して行きたいとあせる點に於ては共通な所ある事と信じます。御交誼のほど願ひ上げます。

近來時々未見の友人の音信に接します。親しきなつかしさに堪えられません。(大正十四年八月二十七日)

アナウンサーとなれる同郷の友へ

S M 君

お手紙拜讀、相變らず忙しき文筆生活の事とて、返信遅延、お許し下さい。

アナウンサー、けつかうです、僕は大に賛成します。賛成するどころか、僕自身もやつて見たい位です。別に奇抜なことをいふわけではない。眞實さう考へて居るのです。僕は近ごろ聲の藝術といふものに興味を感じて居ます。アナウンサーは聲の藝術家です。藝術家ではないとしても、それに近いものです。

君が家を出たことは聞いて居ました。思ひ切つて飛び出したことを、君のために喜びました。それは、かねて君にすゝめた通りです。僕は、決して無謀なことをすゝめはしません。年とつた両親があるとか、外に人情として忍びない事情があるなら兎に角、君の場合はさうでないのです。たゞ山間の頑迷な風習によつて、若い青年を束縛し、生涯を無意味に終らせようといふのです。君には心配かける両親もなし、養はなければならぬ義務のある係累もないのです。わけのわからない親戚などの犠牲になる必要は少しもありません。それに君は

身體があまり壯健でないとき、ました。姑息な日を送つて居れば、生命を縮めるだけです。自分の思ふ通りに進むより外によい方法はないのです。君に呈したいのは、因襲と戦ふべくたゞ勇敢なれといふ一語だけでした。君が小笠原島へ行くといつて東京へ来た時、それもよいと思つた。君がN市で玉突を開業したと人に聞いた時、それもよいと思つた。アナウンサーになつたといふ友人の手紙を見た時、尙ほ一層よいと思つたのです。

君は音楽が好きであつた。師範学校の頃から、歸省の度毎にオルガンやバイオリンの練習をして居たのを知つて居る。君が三味線をひくと云つて、頑迷固陋な山間の老人たちは、陰で君を非難した。僕のところへ告げに来た者さへあつた。豈計らんや、その僕は君に對する同情者の一人でした。あの山間の一郷に於て、恐らく僕が最大の同情者であつたらう。さういふことを山間の老人たちは知らないのです。君は、田舎に住んで居ながら、田舎に珍らしい新奇を好むハイカラ青年であり、僕は十四五年も大都會に住んで居ながら、百姓親父其のままの蠻カラである。僕が君の理解者であり同情者であるなどと、同郷の人が思はないのも無理はないのです。

君は嘗て映畫劇俳優になりたいと云つた。僕は、それにも賛成だつた。君が其の方面に天分をもつて居るかどうかは疑問であつたが、映畫劇といふものゝ性質、將來に於ける發展、開拓の餘地の非常に多いこと等を十

分に知つて居た僕は、よい着眼だと思つた。其の時、君に話した通り、僕は映畫といふものを最も早くから見居た者です。教育社會の中で最も早く映畫に注目し、且つ最も映畫に興味をもつたものは、僕ではなかつたかと思ひます。僕が映畫に注目し始めた頃、教育社會の人々は、まだ活動寫眞の知的方面に於ける効用のみを考へて居た。其の頃から、僕は、活動寫眞の藝術的方面に興味をもつた。將來に於て映畫劇といふものが非常に發達し、こゝに新しい藝術の領域が開けて來るであらうと豫想して居ました。其の豫想は適中しました。其の後に於ける映畫劇の發達といふものは實に著しいのです。今日では映畫劇のことが活動寫眞の中心問題となつて居ます。僕は映畫劇の本質といふやうなことも夙から考へて居たので、君の映畫劇俳優志望もよいと思ひました。併し、それが遂に實現されなかつたのを見ると、君の志が變はつたのか、周圍の事情が許さなかつたのか、とにかく、其の後君に逢つて聞く機會もなかつたやうです。

最近にラヂオといふものが流行し出したに就いて、僕はまたこれにも非常に興味をもつたのです。早速自分の宅へも取りつけたやうな次第です。此のラヂオも僕は活動寫眞と同じやうに見て居ます。今日ではラヂオと云へばまだ知識的方面の効用の方が重んぜられて居るやうであるが、僕は寧ろ藝術的方面に望を囑して居るのです。活動寫眞が目の藝術に特有の領域を開いたやうに、ラヂオは將來必らず耳の藝術に新生面を示すものと考へて居ます。今日ではまだあまり注意せられて居ないが、ラヂオドラマと云ふやうなものが發達して、特有の

新らしい藝術を生み出すものではないかとも思つて居るのです。僕は過日二回ほど「本読み」を聞いたが、非常に面白かつた。講談や落語と全く變はつた味はひをもつて居る。あゝしたものが發達して、やがて眞のラヂオドラマが生れて來るのではないかと思つた位です。ラヂオドラマと名をつけたものも二つ三つ聞いたが、更に面白くなかつた。眞のラヂオドラマといふものは、かうしたのではないといふ感じがしました。

君は料理の放送を擔任して居るとか云ひましたが、圖畫の教師に體操を擔任させてあるやうに思ひました。僕は、ラヂオ其のものが聲の藝術だと思つて居るので、料理の放送でも、ニュースの放送でも、考へ方によつて無趣味なこととは思はないが、内容の上から、もう少し君の性格と天分に適したことを擔任させたく思ひます。嘗ては音樂を好み、また映畫劇俳優だらうと思つたこともある君です。聲の藝術として、獨特の天地をもつて居るラヂオドラマの研究などが君の行くべき道ではないかと思はれるのです。

僕は、極端な講演嫌ひですが、アナウンサーは面白いと思ひます。短かい時間の中に、洗練された言葉を洗練された音聲で表現するといふことに興味があるです。ラヂオ其のものが聲の藝術だといふ理由は、そこにあります。僕は講演をきくのも大嫌ひ、講演をするのも大嫌ひですが、「本読み」のやうなものなら、何度きいても厭かないし、自分にもやつて見たいと思ひます。僕の嫌ふのは、粗雑な贅言を牛の涎のやうに吐き出す講堂

訓話的雄辯です。話其のものを嫌ふのではないのです。否、話其のものは非常に好きです。話の材料を研究する雑誌を出したいと時々思ふ位です。洗練された言葉と洗練された音聲によつて成り立つ趣味中心の話をきくのは好きであり、自分にもやつて見たいと思ふことがあります。併し、さう云ふだけで、僕は、聲の藝術家にならうなどと野心はありません。生涯を操觚者として終らうとするには外の道へはいつて居るとマがないのです。

君がアナウンサーになつたことを喜ぶと共に、聲の藝術家として君の天分を十分に發揮するやうに望みます。君のたよりに接して思ひついたことを一寸。妄言多謝。(大正十五年二月四日夜)

舊師におくれる

拜復、御書面拜誦、歸郷の節は、種々御迷惑かけ置きながら、未だ御挨拶もせざる中に、却つて鄭重なお言葉に接し、甚だ痛み入る次第に御座います。

今回の旅行中、御郡に於ける校長の淘汰は、到る處で話題に上りました。正しい道理から考へて見れば、是れ實に由々しい教育界の大問題で、單に一郡一府縣の瑣事ではありません。然るに、多くの人々、而かも自ら教育界に列する者でさへも、更にこれを怪しみます、寧ろ當然の處置の如く思つて居るのには、全く驚きました。これに就いて私の思ひ起したのは、彼の大學教授の停年制問題でありました。

私の如き者がつまらないことを云ふのは、洵に失禮の極と存じます。併し、一言遠慮なく申し上げて見れば、まだ十分に活動の出来る御身を、あはて、退職なされる必要もないやうに思はれます。勿論時節を見て勇退なされることは強ひてお止めするわけにもいかないのですが、今回の如き事情によつて、十何人の仲間入をなされることは、如何に考へても面白くありません。此の際の進退は、自重の上に自重あらんことを希望いたします。私は、今回、如何なる理由で、かうした不自然な校長の淘汰問題が湧いたか知らないのですが、一體に御

地方の教育者は、少し力が弱過ぎはしないかと思はれます。たゞ官憲に盲従して穩かに日を送らうとする惡弊が積り積つて、自ら其の力を弱めたやうな點もあります。私の妄斷かも知れませんが、先年の夏期大學一件によつて、それを私は痛感しました。あゝいふ無謀な計劃には、職を賭しても反對する者が、二人や三人はあつてよい筈です。郡長や那視學の提案なら唯々諸々として何でも盲従するならば、退職強制の命令にも亦唯々諸々として盲従しなければならぬ結果を招くのです。小學校の教員は、郡長の奴隸でもなく、町村長の使用人でもありませんから、さう卑屈な態度に出る必要がないやうに思はれます。殊更に人と争つたり、我意を通さうとしたりすることは、處世上慎しむべきことでせうが、假にも國民教育の大責任を負んで居るものですから、正義のために敢然として戦ふ意氣があつて欲しいものだと思ひます。今度、郡長から呼び出されて、退職の勸告を受けた校長の中には、郡長の前で涙を流して哀願した人があると云ふ噂がありました。かういふ噂の立つただけでさへも情けない話です。××市の△△第一課長に此の話をしますと、涙を流して哀願するやうなものなら、猶ほ更に淘汰してしまふ必要があると云つて居ましたが、私も全然同感でありました。生活難といふことは、辛いものに相違ありませんが、數百人乃至數千人の師と仰がれて居る身であるといふ自覺があるなら、もう少し嚴肅な心がなければなりません。退職の勸告を受けても、其の必要がないと認めたら、正々堂々と反對したらよいでせう。哀願するには及ばないだらうと思ひます。これは、他の方面から考へて見ますと、正義を主張するだけの意氣のない魂を失つた人間だから、自然にさうした屈辱的な宣告を受けるやうになるのだ

とも云はれます。正義を主張した爲めに職を失つて悲惨な目に逢つた者があるとしたら、其の人に對して世間は何と思ふでせう。郡長の前で涙を流して哀願し、三年四年の勤続年限を延長した者があるとしたら、其の人を世間は何と見るでせう。現在其の校長を先生として崇拜して居る幼童が、他日に至り、自分の先生は、郡長の前で泣いて哀願したといふことを知つたなら、如何に幻滅を感じることでせう。△△課長の言の通り、さうした校長こそは、早く職を退いて貰つた方が社會のためらしく思はれます。天道人を殺さずといふことがあります。魂をもつた人間は、さう妄りに餓死するものでありません。全く救ふ道のない此の世の廢物は、魂を失つた人間であるかと思ひます。假令、如何なる短所をもつて居るにしても、また如何なる冷遇を蒙らうとも、魂のある人間は、ながく世の中に生きてゆくことが出來ます。これは、其の實例がいくらもあります。十何人の小學校長が、郡長に呼ばれて退職の勧告を受けたといふことは、あまり香ばしい話ではありません。況んや其の中の或る者が郡長の前で涙を流して哀願したといふ風評のたつたことは、たしかに教育者の品位を數段低下したものだと思はれます。かういふ面白い風評のたつて居る際、同じ渦中の人となり、あはて、退職なされるやうなことは考へものでせう。進退に就いては呉々も自重ありたく存じます。

尙ほこれは外の事ですが、今回歸郷して、私の最も残念に思つたことは、××小學校に關するよくない批評が、かなり多く耳にはいつたことでもあります。××小學校といへば、地方の模範小學校を想像して居る私には、甚だ意外な感がありました。其の非難の中心は教員がよくないといふことにあるやうに感じました。これは、實

に重大な問題と存じます。教員の素質が悪くなつたといふことは、此の頃よく聞くところです。心ずしも貴縣だけではないうです。一般に教員の素質が悪くなつてよい教員が少なくなつたのか、或はまた××小學校だけによい教員の多く集まらない事情でもあるのですか。其の邊はわかりませんが、併し良教員が少ないために、××小學校の成績が上らなくなつたといふことは、教育關係者のみでなく、村民の或る者さへも云つて居ます。多年優良な××小學校として知られた小學校が、今になつてさうした評を受けるのは、甚だ残念な次第と存じます。果して世評の如く實質が低下して居るかどうか、私にはわかりませんが、世評だけでも愉快なことと思はれないのです。かういふ世評の中に引退せられるやうなことがあつては、所謂九仞の功を一簣に缺く憾みがあります。郡長が何と云はうと、縣知事が何と云はうと、問題にする必要もないと思ひますが、此の世評ばかりは氣にかゝつてなりません。名古屋へ行つて×××君に逢ひました。×××君は、自分の學校の成績が近來めきめきと上つて來たことを喜んで居ました。君の話によると、自分は毎日學校へ出席して煙草をふかし、新聞を読むだけで何もしないが、よい教員を揃へたから、自分の思ふ通りになる、今日程愉快なことはないとの事でした。よい教員を集めるといふのは學校長にとつて最も愉快なことであり。且つ最も幸福なことであるに相違ありません。よい教員と云つても色々の解釋がありませうが、所謂善良教員即ちよく云へば濃厚篤實、正直に云へば彈力のない人間は駄目かと思ひます。缺點の多い人間でも、人格の核心に熱のある、潑刺とした元氣をもつた者の方がよいやうです。彈力のない人間、若い中から恩給を取ることを考へて居る人間が多くなればなる

程、學校の内部の突氣は沈滞し、教育の進歩を妨げ、其の結果は、校長の生命を縮めることになるのです。學校の成績は、校長一人の力でどうすることも出来ないものです。よい教員の揃はない程、校長にとつて氣の毒なことはありません。以前には、よく××小學校は變はり者ばかりを集めて居るが、あゝいふ教員を統御して行く校長は骨が折れるであらうと云はれたものです。如何にも骨が折れたであらうと思はれます。よほど統御の才能のある人でなければ出来ないことであつたでせう。併し、其の常規を逸したやうな變人ばかりが集まつて居る時には、却つて學校の内部に際立つた特色が現はれて居たやうに思ひます。世評が當つて居るか居ないか私には判断しかねますが、今日のやうな世評のある時に、先生をして其の職を去らしめるのは、甚だ面白くない事と存じます。偶、歸郷した私に、かうした風評が聞える位ですから、縣下の小學校に職を奉じて居る人々がこれを知らない筈はありません。××出身の教育者は、團結して母校の革新を迫つてもよいことと私は思ひます。さうしてこそ當年の模範學校たる××小學校に生きた魂があると云ふものです。聞いても聞かぬやうなふりをして、自分の目先のことばかり考へて居る者のみとは心細い次第であります。私がいつも残念に思ふのは、××の小學校が多くの教員を出して居ながら、何れもみな消極的・退嬰的な引込思案の人間になつてしまつたことです。××君の如きは、最も將來のある有望な人と思つて居たのに、生家の失敗から挫折したのは惜しいものです。名古屋の或る人に聞くと、あの男はしみつたれてしまつて、もう到底駄目だと云つて居ました。如何に不幸な目に逢へばとて、四十歳になるやならぬにしみつたれてしまふやうでは、たよりなく思ひます。

××の小學校からは、多くの優秀な學生を輩出して、近郷近在を風靡したものです。私もかつては度々××村を天才村と賞讃した位です。創立以來、既に三十年の歳月を経過して見れば、今日では、當年の卒業生が社會の各方面に活動して居るわけでありませう。外の社會のことは暫く措き、教育の方面を見ますと、何となく心細い感じがします。當年の天才と云はれた者が、果して教育の方面に天才的な活動をして居るでせうか。今こゝで大に力量を發揮しなければならぬ時に當つて、何れもみな意氣沮喪し、進んで玉碎する勇氣はなく、退いて恩給の計算をするやうでは、甚だ情けなく思ひます。勿論××小學校出身者の中には、職務に對して忠實な良教員は澤山ありませう。軌道を走る汽車や電車のやうな人は、少なくないでせう。併し、私は少し位無軌道を走る自動車のやうな人もあつてよいと思ひます。大事に當つて頼みになる者は、帳簿の整理が上手であつたり、騰寫版を印刷することの巧妙な教員でなく、生きた魂をもつて居る眞人であります。さういふ人間は、最初から軌道の上を走らないから、往々危険視せられたり、厄介者扱ひを受けたりしますが、事ある場合に玉碎する貴い人間の意氣をもつて居ます。××市の△△助役にも話したことです。彈力のない元氣の銷沈した人間ほど頼み甲斐のない者はありません。段鑑遠からず、××出身の教育者中に、少しでも頼み甲斐のある者があつたら、母校をして今日の如き悪評を蒙らしめなかつたでせう。母校の悪評は、ひいて恩師の徳を汚し、自分の精神的領土を荒廢せしめることになるのです。

私は、今まで出身小學校のことには、甚だ冷淡な態度を取つて來た者です。思ひ起すのは、二十年の昔、同

窓會のことに不熱心だと云ふので、級友から排斥せられたことがありました。或る時の如きは、窓から覗いて居て、中へはいらなかつたこともあつた位ですから、排斥せられるのも當然でせう。されど、二十年後の今日靜かに反省して見ますと、此の最も母校に冷淡な人間が、人並以上の愛校心をもつて居ることを痛感します。××の小學校が生きた精神を有して居るならば、此の精神を最もよく傳へて居る者は、私自身でないかと云ふ感じがします。勿論、外にも澤山あるでせうが、私は、其の精神を最もよく享けて居る者の一人だと自信して居ます。二十年前の憎まれ者が、最もよい後繼者であつたことを考へると、彼の映畫劇のオーバ・ゼ・ヒルが思ひ出されます。私は、もはや人並に年齢を加へて、青年の客氣も大分失せましたが、まだ中々老ひほれません。今後十年生きるか二十年生きるかわかりませんが、益々元氣を振り興して、××小學校の精神を發揮するつもりです。

今日は少し閑暇がありましたので、思はずとりとめもない所感を申し述べました。禮を缺いた點は平にお許しを願ひ上げます。

(大正十五年四月十三日夜)

大正十五年七月一日印刷
大正十五年七月五日發行

版權
所有

隨人問世間

定價金壹圓參拾錢

著者兼 三浦 藤 作

印刷者 白橋 好 惠

發行所 太原 社

發賣所

東京市外中野町中野三六三四
帝國教育會出版部
振替東京六八二八六

(次取大)
東京堂 益文堂 北隆館
東海堂 大東館 上田屋
柳原書店 川瀨書店 菊竹金文堂

三浦藤作氏著「教育講座」第二篇

四六判二百十頁
定價一圓五十錢
送料八錢

明解 哲學概論

哲學概論は其の數が、非常に多く出て居りますが、本書ほど、明瞭に哲學の全體に亘る諸問題を述べ盡したものはありません。從來の哲學概論は、どれを見てもわからないと云ふ嘆聲をよく聞きました。本書が出づるに及んで、またかくの如き嘆聲を發する必要はなくなりました。該博な研究に加へて、非常なる能文の人でなければ、斷じて出来ない名作であります。是非一讀を希望いたします。(附近の書店になければ直接發行所へ御申込み下さい)

目次

第一章 序説	第二章 哲學の性質	一 哲學と科學
第一節 哲學とは何ぞや	第一節 哲學の起原	二 哲學と宗教
一 哲學の語義	一 哲學の心理的起原	三 哲學と藝術
	二 哲學の歴史的起原	四 哲學と道徳
	第三節 哲學と他の文化	第四節 哲學の内容

一 哲學の内容	第二章 實在論(本體論)	一 價值及び價值論の意義
二 哲學概論の目的	第一節 實在論とは何ぞや	二 文化哲學の概念
第二章 認識論	一 實在及び實在論の意義	三 價值論の諸問題
第一節 認識論とは何ぞや	二 形而上學の概念	第二節 價值の本質
一 認識及び認識論の意義	三 實在論の問題	一 價值判斷の根據
二 認識論の性質	第一節 實在の本質	二 理想の構成
三 認識論の問題	一 一元論(唯物論・唯心論)	第三節 價值の種類
第二節 認識の可能	二 二元論	一 眞理的價值
一 獨斷論	三 多元論	二 倫理的價值
二 懷疑論	第三節 實在の生成	三 美的價值
三 批判論	一 機械論	四 宗教的價值
四 其他の諸説	二 目的論	第四節 價值の統一
第三節 認識の起原	三 調和論	一 形式上の統一
一 純理論	第四節 實在の究竟	二 内容上の統一
二 經驗論	一 有神論(一神論・多神論)	
三 批判論	二 無神論	第五章 人生觀
第四節 認識の本質	第一節 價值論	一 厭世觀
一 實在論	第二節 價值論とは何ぞ	二 樂天觀
二 觀念論		三 調和説
三 現象論		

發行所

東京市、中野町、中野、三三四
振替東京六八二八六

帝國教育會出版部

三浦藤作氏著 「教育講座」 第三篇 四月十日發行

西洋哲學小史

四六版二百二十頁
定價壹圓五十錢
送料 八錢

上下三千餘年に亘れる西洋哲學の變遷を最も明述に叙述したるもの、哲學史と命名せる書、多き中にも、未だ嘗て本書の如く要領を得たものはない。難解の哲學史、僅々數時間に於て、充分に消化され、我が知識となる。内容の精選、叙述の美文、二つながら堂に入れるものである。

目次

第一篇 古代哲學史

- 第一章 創始時代の哲學
- 第一節 ミレトス學派
- タレリス
- アナキシマン드로ス
- アナキシメネオス
- ヘーラクライトス
- 第二節 エレアネオス
- クセノフ
- アネオス

- バルメニデース
- ツエノーン
- メリツソス
- 第三節 ビタゴラス學派
- ビタゴラス
- 第四節 元子論者
- エムベドクレーリス
- アナキサゴラス
- ロイモクソス
- 第二節 組織時代の哲學

- 第一節 ソフィスト
- プロタゴラス
- ゴルギアス
- ソフィストの功罪
- 第二節 ソクラテス
- 倫理論
- 小ソクラテス學派(メ
ガラ學派・キニク學
派・キレーネ學派)
- 第三節 プラトーン
イデア論

- 心理學
- 道徳論
- 國家論
- プラトーン學派
- 第四節 アリストテレス
- 形而上學
- 心理學
- 倫理學
- 國家論
- アリストテレス學派
- 第三章 倫理時代の哲學
- 第一節 ストア學派
- 克己主義
- 世界主義
- 第二節 エピク로스學派
- ローマのストア學派
- 快楽主義
- 個人主義
- 第三節 ストア學派との比較
- 古懷疑學派
- 新懷疑學派
- 第四章 宗教時代の哲學
- 第一節 新プラトーン學
- 派の前期
- 新プラトーン學
- ビタゴラス的プラトーン
- 新プラトーン學
- アンキサンドリアの宗
教哲學派

- 第二節 新プラトーン學
- プロテイノスの哲學
- 新プラトーン學派の變遷
- 第二章 中世哲學史
- 第一章 教父哲學
- 第一節 前期の教父哲學
- 正統派
- 異教派
- アレキサンドリアの教
校派
- 第二節 後期の教父哲學
- 教權確立の三大問題
- アウグスティヌスの
哲學
- 第二章 スコラ哲學の發
生
- 第一節 スコラ哲學の發
生
- エリゲナ
- アンセルムス
- ロッセリヌス
- アベラルトウス
- 第二節 スコラ哲學の發
達
- アラビヤ及び猶太の哲學
- トーマス・アキナス
- 第三節 スコラ哲學の衰
頹の原因

- 中世期末の思想界
- 第三篇 近世哲學史
- 第一章 近世哲學發生の原
因
- 第一節 近世哲學の發生
原因
- 文藝復興
- 宗教改革
- 自然研究の傾向
- 近世哲學の發生の二大
系統
- 第二章 經驗哲學の發達
- 第一節 經驗哲學の發達
- ベコン
- 第二節 學問の理想
- ホッブス
- 唯物論
- 利己主義
- ホッブスの學說に對す
る反對說
- 第三節 ロック
- 第四節 ヒューム
- 第五節 佛國の經驗哲學

終

